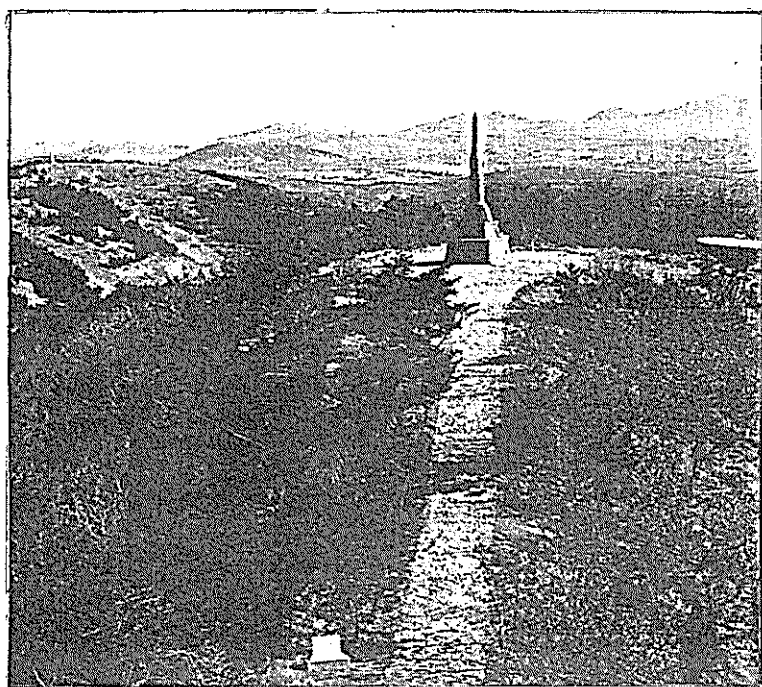


癌を押して旅順の要塞へ
数々の万里の長城に登る
清王朝ゆかりの地の見学

(下の写真は日露戦争の激戦地・203高地)



平成8年6月27日～7月7日
(1996)

寺 前 信 次

目次

まえがき	・・・ 1	明朝を破った清と山海関の歴史	・・・ 3
今次旅行の経過要図	・・・ 4	秦皇島（地区）	・・・ 4
6月28日 成田～大連	・・・ 5	北戴河	・・・ 4
日露戦争	・・・ 5	7月2日 北戴河～薊県	・・・ 4
6月28日 旅順へ	・・・ 8	薊県～黄崖関	・・・ 4
水師営	・・・ 10	八卦街	・・・ 4
乃木・ステッセルの水師営の会見	・・・ 12	黄崖関長城	・・・ 4
203高地（爾靈山）へ登る	・・・ 14	独楽寺	・・・ 4
世界初の永久要塞の旅順攻略戦	・・・ 16	清東陵	・・・ 4
東鶏冠山北堡壘の見学	・・・ 21	7月4日 金山嶺長城	・・・ 5
我々が戦った戦争と日露戦争から	・・・ 23	7月3日 承德	・・・ 5
大連観光	・・・ 28	承德「外八廟」	・・・ 5
6月29日 大連～瀋陽	・・・ 28	普寧寺	・・・ 5
瀋陽観光	・・・ 29	普陀宗乘之廟	・・・ 5
9、18事変博物館		避暑山莊	・・・ 5
（満洲事変）	・・・ 29	宮殿区	・・・ 5
7月1日 瀋陽～山海関	・・・ 32	水郷湖区	・・・ 6
山海関	・・・ 33	平原区	・・・ 6
天下第一関区	・・・ 34	夜見世	・・・ 6
孟姜女廟	・・・ 35	7月6～7日 北京～成田	・・・ 6
老龍頭長城	37	あとがき	・・・ 6

旅順要塞攻略戦

佐藤 和生 54期

地図を精査し堡塁の配置をみると、二〇三高地は巽を仕掛けるには絶好の適地である。

旅順要塞において

日露戦争時、日本陸軍は、旅順要塞攻略戦で約6万の戦死傷者を出した。その原因を乃木第3軍司令官の無能に帰するものが多い。曰く旅順要塞の弱点は二〇三高地であった。しかし、乃木司令官も伊地知参謀長もそれを看破することができず、攻撃の重点を東鶏冠山・二竜山堡塁の中間に指向し、白兵突撃によってロシア軍が堅固に構築した堡塁群を攻略しようとしたために、多数の戦死傷者を出し且つ攻略が遅れた。もし、第3軍が当初から攻撃の重点を二〇三高地に指向していたなら、6万もの戦死傷者を出すこともなく、もっと早く要塞を攻略することができた、というのだ。だが、これは眉唾物である。

たしかに二〇三高地の頂上にたつて旅順を見下すと、港も街も一望の下にある。旅順に要塞を構築したロシア軍の將軍や築城家が、この事実気付かなかったと考えることはできない。なぜロシア軍は二〇三高地に堡塁を築かず無防備のまま放置していたか。それには必ず目的がある筈だ。そう考えて

撒き餌に該当するのは大連港である。天然の良港であり設備も整っている大連を占領すれば、爾後、日本軍全般の作戦を有利に進めることができる。しかし、大連を占領するには先ず南山を攻略しなければならぬ。ロシア軍の思惑通り日本軍は、大連という撒き餌に誘われて南山を攻撃した。旅順要塞には多くの前進陣地があったが永久築城の堡塁があったのは南山だけだ。それ故、南山を攻撃した日本軍(第2軍1D)は、占領には成功したものの、悪戦苦闘し、約4千200の戦死傷者を出した。乃木大將の次男もこの戦場で戦死した。そうなる、この仇は必ず討つぞ、ということになる。これが戦場心理だ。ロシア軍はこの戦場心理も計算していたのである。爾後、日本軍(第3軍1D・9D・1D)は、前進陣地群を次々と攻略していった。

ロシア軍の計画通りに事が涉れば、やがて日本軍は、東鶏冠山・二竜山・松樹山の鉄壁にぶち当り、水が高所から低所へ流れるように、その鋒先を二〇三高地に向けてくる筈であった。

「二〇三高地弱点論」のいうように、もし第3軍が当初から攻撃の重点を二〇三高地に指向し兵力火力を集中して同地を攻撃していたなら、悪戦苦闘してやっと占領した途端、堡塁及び在泊戦艦・巡洋艦の集中砲火を浴びて吹き飛ばされ、何度もそれを繰り返して逐次兵力を消耗し、3個師団のうち2個師団は略々壊滅状態となり、残る1個師団も弾薬欠乏して動きが鈍くなった頃、要塞内で待機していた2個師団の野戦軍の反撃を受け、補給路を遮断され、側面攻撃され、弾薬つき万歳突撃して全滅する、ということになったに違いない。畏にはまると、そういうことになる。それがロシア軍の狙いであつたのだ。

く計画するを要す」という訓令を受けて、当初計画していた正攻法を捨て強襲法により実施したのである。その結果、残念乍ら攻撃は失敗し、戦死傷者約1万6千を出した。

早期攻略を訓令した山縣参謀総長、総長に早期攻略を要請した伊東祐亨軍令部長、部長にそれを要請させた山本権兵衛海相、この三者と、それぞれの幕僚の責任を問われては都合が悪いので、でっち上げられたのが「乃木愚将論」、「二〇三高地弱点論」だ。

「二〇三高地弱点論」の発端は、旅順艦隊をもて余し、そのうえ六六艦隊の中核をなす戦艦6隻のうち2隻を觸雷により喪失し狼狽した連合艦隊の幕僚が、「もし二〇三高地を陸軍が占領し、其所を観測点として大口徑砲で砲撃することができたら、港内の旅順艦隊を撃滅できるのだ」というたら話

夢物語である。その夢物語を参謀本部の幕僚が陸軍用語に翻訳し、もっともらしい屁理屈をつけたのが「二〇三高地弱点論」である。この論者の頭には、二〇三高地から見下せば旅順の港も街も一望の下にある、という極めて単純な地形判断しかない。その他一切の重要事項は等閑視しているのである。築城は、ロシア軍の長技であり、旅順要塞はそのロシア軍が8年の日子と20万

博のセメントを使つて築造した(中略)。

或日の早朝ジャングル中で爆音が聞こえ、3機の編隊が高い高度を飛んでいるのを発見した。翼に日の丸がついているではないか。戦場で見た只一度の友軍機であった。

放浪生活も日を重ねるにつれ食糧の調達が困難になってくる。即ち物々交換する身の廻りのものが底をついてくる。その頃になると戦況も変化が見えて、哨戒機の飛来する回数も減ったように感じられる。

放浪生活も3ヶ月を過ぎた頃、アル、ケイ方面より転進のための兵員輸送の船舶部隊とカンポンで遭遇するようになってきた。中に56期の先輩が船舶工兵中隊長の部隊と遭うことが出来

台湾義勇兵

蕭錦文氏の書簡

後 うしろ

勝 48期

まえおき

戦時中ビルマ方面軍では、司令部の伝令や当番兵に台湾義勇兵を沢山使っており、私の当番兵もそうでした。戦時中の事として特別な面倒をみる事は出来なかったが、17—18歳の若い義勇兵を戦死させないようにと、前線指導に

たときは懐しさ一人であった。余りにも見窄らしい後輩の姿には驚かれたらしい。数日して兵員輸送のためケイ島に向かう大発に便乗することが出来、島づたいの夜間航行により原隊への追及を果たすことが出来た。私は越中樺まで食糧と交換、兵用の襦袢袴下を纏い麻袋にサゴトマン（サゴ椰子粉）が残されていたのみであった。

聯隊本部に着き、入浴、散髪、衣服と日用品の支給を受け、人心のついたところで、聯隊長後藤文敏大佐（3期）に着任の申告を行う。時に12月半ばであった。

若い戦力に期待すると励ましの言葉頂き、決意を新たにした次第である。

出掛ける時には、何時も留守当番に残しておきました。処が何等の差別なく日本人と一緒にアジア民族解放戦に従軍した事を誇りに思う彼等としては、それが不満であったように思われます。

台湾からは、22万名の義勇兵が参戦し、内約2万名が戦死しましたが、これらに対する補償は放置されたままでした。私共は国会に陳情して数年前に、戦死、重傷者に対し、1人200万円の手慰金を支拂う事が出来ました。ま

た生存者には未支給の給料、貯金等に対する補償が行われましたが、当時の金額の120倍という低額で、せめて100倍位は出して頂きたかった次第です。

書簡本文（2部、字句は原文の概）

後 勝 参謀殿

承らくごぶさに打ち過ぎ誠に申し譯ございません。（略）

小生相変わらず毎日元気で『ボランテア』に務めております。先日激励のお手紙を戴きありがたうござ居ました。お禮もながながと差し上げず斯様に長き時間を絶え隔れたこの便りは、参謀殿に45度の頭を下げてお詫しても足りない、自責せざるをえません。どうぞご容赦下さい。南の島台湾では、38度を越す猛暑に、頭も焦がす様な熱い太陽が眩しく照り焼きつける日々です。

七月は、子供達にとって、一番楽しい夏休みの時季です。此の楽しい夏休みには、私も幼き児童時が想いだされ過ぎし日の色色が目につかばれて、その光影は我が人生を映している模様です。参謀殿にもそれぞれの楽しい幼時の夢がありましたでしょう。（略）

何時もながら、日本の皆様方より台湾を愛していただき、特に参謀殿は過去国民党政府の高壓政權時代に於いて、台湾人権運動にご声援を頂き、又台湾元日本軍人軍属の年金問題には日本政

府各機関に奔走致されて、我等台湾人に対する思ひ遣りを承け賜り、ご配慮は一生忘れません。感銘の念を捧げます。

昨年三月、我等台湾人民は五十餘年に亘る、外来政權である国民党から、その政權を奪取しましたが、國會委員少数が為、新政府は一向政策が進まず、世は亂麻の状態で、これを改善するには年末の國會委員選挙が見物です。

出しやばった事を申し上げてご免なさい。老い耄れた私は時代おくれ者だと想い堪忍してください。中國の諺に『歲月不饒人』通り、もう己に人生終點に來たせいなのでしょうか。最近老人惚けと情氣を感じ、何事も怠慢で、動き度くない様になってしまい、手紙を書くのもなまけてしましました。實に恥辱深甚の至りです。

でも、お陰様にて、神様の保佑をいただき、辛うじて體も健康を保っています。けれども一年一年と衰えていく體調は、その手足の活潑性を失い、總ての行動はにぶくなってしまいました。だが此の大自然の中に、人間が生きぬく條件には、如何なる財富や權力よりも、健康に勝るものはないと信じます。では、ここで筆を止めさせていただきます。再會の日を楽しみに待っています。皆様方のご多幸とご健康を祈って止まない次第です。

みことのりのまにまに

硫黄島戦断章

栗林シリーズ
別巻⑧ かく戦ひし人あり

親補式でのお言葉

栗林兵団長の伝記を書く者がみな見落としていることに「親補式」がある。硫黄島玉碎直後、兵団長の伝記を『週刊朝日』に掲載するよう大本営から命ぜられて、まだ空襲で焼けていなかった留守宅を訪問したのは山岡荘八報道班員であるが、東京出発時の東條首相の激励の言葉に触れているだけである。公刊戦史にも記述がなく首を傾げていたのだが、平成12年夏、毎日新聞が掲載した「余録」に関して新藤たか子さん（大將息女）と長電話を交わしているうちに、疑問は氷解した。

当時10歳の少女は、父親が陛下のお言葉に感動し、熱心に母に語りかけるのを、傍らで聞いていたのである。

栗林中将の統帥について堀江芳孝¹⁸参謀はDetermined（断乎・決然）と外国雑誌（後述）に紹介しているが、その源はここにあったのではないか。

幼い娘の事として陛下の「お言葉」の内容は理解の外だが、父親の楽しげな話しぶりだけは今も記憶に残るという。

外国雑誌に掲載された「硫黄島守護の歌」

栗林家にPURNELL出版

版社刊行の「IWOJIMA The Japanese view of the bloodiest fight in US Marine history」という冊子が

残されており（下図）、裏表紙に「硫黄島守護の歌」が日本語で記されている。（左図）

堀江参謀の名が本文記事中にあるが、氏は病中で掲載の経緯は不詳である。

硫黄島守護の歌

一 悠久二千六百年、受け継ぎ来るこの御代に野望の米鬼邀え
東り、皇国を守る大決意、勝ち抜け尽さん、甲斐ある民ぞ。

ニ 島小さかるも硫黄島、皇居に通ずる表門、誰か守らん守護の任、選ばれ来る我等こそ、守れよ因めん、皇国の頼み。

この歌に歌われた精神で日本兵は a glorious battle in defence of the homeland を戦ったと解説されており、恐らくこの歌詞は堀江さんの筆跡で、英訳もまた氏の作業であろう。

硫黄島での栗林スケッチ

昭和19年11月26日・戦地のお父さんより栗林たか子ちゃんへ「たこちゃん注文のお父さんの画はかきましたよ。今度またヒメの時書いて送ります。」という栗林中将の手紙が残っている。

アメリカ駐在時代の絵手紙はさきにご紹介したが、硫黄島でのスケッチが残っていたとは——と、興味津々新藤夫人にお尋ねしたが、学童疎開のどさくさに紛れて失われたらしいとのご返

事であった。残念である。

江藤少年も聞いた、あの放送

「硫黄島への「前線へ送る夕」の放送を聞いた者の一人として、そしてハイケンスの「セレナーデ」の旋律を今でも覚えている当時の少年の一人として硫黄島の地下でルーズベルトへの手紙

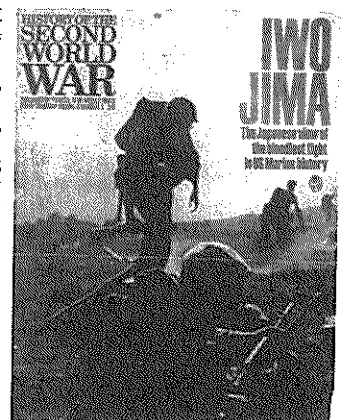
The Song of Iwo Jima

This song, composed by the Japanese defenders of Iwo Jima in the autumn of 1944, was sung by them until the island fell. Below is a literal translation of the first two verses :

*

We are warriors of a sacred generation,
From a culture twenty-six hundred years old.
Fight and halt the invading Americans!
Stand determined, defend our island!
We will gain victory by fighting to the end.
We are glorious patriots.

Although our island is small,
It blocks the path to the Emperor's Palace.
Our duty is to defend this island!
The Emperor selected us!
Defend this island,
Shields for the Emperor!



あること、要塞には要塞守備隊の外に野戦軍2個師団がいること、二〇三高地は、椅子山・西太陽溝堡壘から集中砲火を受ける位置にあり、距離は僅か2千米であること、旅順港に有力な艦隊が停泊しており、戦艦の主砲は30糎加農砲であり、距離は5千米余であること、これらの砲の集中射撃を受ければ二〇三高地には一兵と雖も止まれないだろうということ、等々を全く考えていないのだ。そうでなければ、二〇三高地を要塞の弱点などとたわけたこ



二〇三高地より見た旅順港

とが言える筈がない。海軍の幕僚なら兎も角、参謀本部の幕僚がこれではお粗末と言わざるを得ない。

日露戦争開戦時、参謀本部の幕僚であった大庭二郎（後に第3軍参謀副長）、田中義一（後に満洲軍総司令官参謀）ら4人の少佐参謀は、確たる根拠もなく旅順、大連の兵備薄弱という判断の下、速かに第3軍を編成し旅順を攻略すべきだ、という意見具申をしている。また、南山攻略後、第2軍が戦死傷者約3千と報告した時、参謀本部の幕僚連は、3千は3百の間違いだろう、といっていた。永久築城の要塞のことなど何も知らなかったのである。これら幕僚達と較べると児玉大将は拔群の知将といえるだろう。乃木大将が児玉大将に傾倒し、児玉大将の作戦構想を遵守し、参謀本部や総司令部の半可通の幕僚達の雑音に耳をかさず、終始、攻撃の重点を東鶏冠山・二竜山堡壘の中間に指向し動かなかったのは当然である。

児玉大将も乃木大将なら半可通の幕僚達の雑音に耳をかさず、自分の作戦指導に従ってくれると確信していたのだ。二〇三高地弱点論の主唱者たちが参謀等を第3軍に派遣し、攻撃の重点を二〇三高地に指向させようとして画策したが、児玉、乃木の信頼関係は堅く半可通の妄動は遂に効を奏しな

かった。

第1回総攻撃が失敗したのは、要塞の強度に対する全陸軍の判断が甘かったからだ。戦死傷者が1万6千となったのは、参謀総長の訓令に従い、正攻法を捨てて強襲したからである。第2回総攻撃が失敗したのは、火力の不足だ。28榴をもつてしても堡壘を破壊することができなかったのである。ちなみに、第1次世界大戦時、ベルダン要塞を攻撃した独軍は37・42加農砲を含む1千門の砲をもって1千400万発の砲弾を撃ち込んだが、終に要塞を陥すことができなかった。第3軍が旅順要塞の攻撃に使ったのは、170門の砲と19万発の砲弾に過ぎなかった。それで要塞を陥せたのは、坑道を掘り爆薬を装置して爆破したからだ。第3回総攻撃は、延々1ヶ月余つづいたが、攻略に成功した。最後まで攻撃の重点を東鶏冠山・二竜山堡壘の中間に指向し、砲火に代えて坑道法を創出し堡壘を爆破するという戦術転換によって成功したのである。

第3回総攻撃で戦闘が延々1ヶ月余もつづいたのも、悪戦苦闘、多数の戦死傷者を出して二〇三高地を攻略せざるを得なかったのも、児玉総参謀長が指揮せざるを得なくなったのも、総ての原因は、11月14日の御前会議で海軍が提示したバルチック艦隊に関する極

めて不確かな情報にある。11月14日の時点で海軍は、バルチック艦隊の日本近海出現を38年1月中旬と主張していたのだが、実際に出現したのは5月27日だ。IIが東鶏冠山を占領したのは12月18日、9Dが二竜山を占領したのは12月28日、1Dが松樹山を占領したのは12月31日、ステッセルが降伏したのは1月1日である。

明治38年1月1日、旅順のロシア軍が降伏開城した時、ロシア軍の食糧は既に底をついていた。ステッセルに降伏開城を決定させた最大の要因は食糧の欠乏であったと考えられる。そうだということになる、なぜ6万の戦死傷者を出したかが問題になり、旅順要塞攻略を決定した参謀総長、総長に早期攻略を要請した軍令部長、部長に早期攻略を要請させた海相の責任が問われることになる。そうなつては都合が悪いので乃木第3軍司令官を愚将に仕たてあげ、それを証明するために「二〇三高地弱点説」が流布されたのだ。旅順要塞は遠巻き兵糧攻めで陥せた。攻撃する必要はなかったのだ。孫子曰く「人の城を抜くも而も攻むるに非ざるなり」と。豊臣秀吉は高松城を攻めずに抜いたのである。

まえがき

我が寺前家の家系には胃癌の筋があるのか、親・兄弟・従兄弟も胃癌で死亡している。そのため私は30年来この方、毎年カメラによる胃の検診を継続していたところ、本年（平成8）6月5日の検査で早期胃癌が発見された。（山代温泉板谷医院）

血統などの問題は承知していたが、自分が癌になるとは夢にも思ったことはなく、医者から宣告を受けて始めて我が身にも寂寞の影が濃くなってきたのかと仄かに感じ、「命（サメ）を知れば亦た何を憂えん」と言った、曹操の子の曹植の言葉を思い出し、ていた。

一昔前までは癌に冒されれば死刑の宣告と同様であったが、医学の進歩と早期発見が可能となったため、それほど深刻に悩むことは全くなり、銃砲火の戦陣を馳駆した当時の、遅かれ早かれ自分も死ぬのだという覚悟に似た感覚も、微塵も湧かなかった。

人の力では避けることも変えることもできない人の宿命は前世からの定めで、定めを背負って生きている人間のこれが人生観である。

今日まで多くの人の死を見てきた私は如何に死ぬか、如何に生きるべきかなどと切実に考えたこともなく、自然に身をゆだねて全てを受け入れて生きようと常々考え、自分の人生に悔いなしと飄々として流れのままに生きてきた。

手術する国立山中病院で確認のため再度検査を受けたところ、このまま放置すれば必ず早期胃癌に進行すると診断された。しかし開腹手術後（3分の2切除）の体力の衰弱を考えると、私には一つだけ思い残すことがあった。

それは50数回の海外旅行の締め括りとして残していた、また久恋の地でもあった日露戦争の激戦地、203高地や東鶏冠山北堡塁の見学であった。医師に申し出て相談したところ、私の癌は一日を争うようなものでなく、旅立つことに同意して許可を与えてくれた。

大正の一桁時代に生まれた者にとって、日露戦争に於ける我が国政府の正義を疑うものは皆無で、そのように全国民は教育され信頼もしていた。だから我々の子供の頃の毎日の遊びは、すべて日露戦争の栄光を伝えるものばかりであった。

小学校の一時間ごとの休憩時間に遊んだことは、いつもきまって大将、大将を奇襲する水雷、水雷を爆破する駆逐艦といった戦争ごっこで、全てが日露戦争の勝利を模型にしていた。

子供たちの唄う歌も「日本勝った日本勝ったロシア負けた、ロシアの軍艦底抜けた」などの戦勝の歌のほか、悲しみを誘う橘中佐や広瀬中佐、戦友などの軍歌が多く、世はまさに戦勝に酔ったものばかりであった。

日露戦争（1904～05）は我々が生まれる15年ほど前のことであった。昭和35年に生まれた戦後生まれの人たちが第2次世界大戦を想像するのと同じで、それほど遠い昔のことではない。

いざ鹿島立ちとなると年のせいか懐旧の情が強くなり、子供の頃への親しみと懐かしさが募るばかりであった。そして我々が戦った支那（中国）事変や大東亜（太平洋）戦争と照らし合わせ、重ね合わせて考えるのであった。

日露戦争時の日本軍はそれまでの世界の常識を破って戦っている。即ち武士の白刃の戦いと同様に屍を踏み越え、決死の肉弾突撃を繰り返したのであった。ロシア軍に比べて日本軍は兵力と装備はやや劣っていたが、兵士の素質と士気は遥かに勝っていた。これが肉弾突撃を可能にしたのである。

しかし旅順攻略戦でも勝者である日本軍の損害は、敗者であるロシア軍の損害の3倍にもものぼっている。このように損害をものともせず肉弾突撃を繰り返したことは、兵器の発達に適合するかどうかとは別問題とされたのである。それが尾を曳いて我々までもそのように戦わされてきた。

命中精度が悪く、発射速度も遅い小銃が主兵器であった時代には、抜刀隊の斬り込みも効果があったかも知れないが、機関銃の出現とその主兵器化、さらに高度な兵器の進歩という情勢のもとでは、肉弾突撃は損害を増すばかりであった。

日露戦争は、こうした兵器の発達と戦法の変化を示す一つの劃期だったとも言える（日露戦争ではロシア軍は機関銃をもっていた）。戦争は武器の質と量の戦いであることを日露戦争後の日本軍は全く理解せず、我々までそれを受け継いで戦った。

戦争の勝者となった日本軍は、この変化を汲み取ることをしなかったばかりか、むしろ逆に損害を意とせず肉弾突撃を敢行する攻撃精神こそが、勝利の要素だと信じていたのである。

日露戦争の教訓から、日本軍は兵士の軍人精神、攻撃精神こそが勝利の原因だという公式見解をとった。このような戦法によって日中戦争から第2次世界大戦を戦わされたが、その敗因は日露戦争にまで溯らなければならない。

戦闘の最後の決は、いかなる損害にも屈せず、最後の一兵まで肉弾突撃することによってもたらされるのだと、生命を鴻毛の軽きに比し、忠君愛国の精神が物質的威力に遥かに勝ると信じさせられたのである。

日露戦争後、それまでのドイツ式典範令を大幅に改訂して日本独自の操典、教範類を整備したが、その中に一貫していたのは上記の思想であった。

兵士のすべてが死を視ること帰するが如く、忠君愛国の至誠に徹するという無形の要素が、兵力や装備という有形の要素に遥かに勝り、精神的威力は物質的威力に凌駕するということが典範令に一貫して強調され、戦闘の決は白兵突撃によってのみ決まると強調したのである。

しかし我々が死力を尽くして戦った第2次世界大戦の南方戦線では、忠実にこの精神を守った日本軍は各所で「万歳突撃」や「玉碎」を繰り返した。しかし自らの肉体を弾丸とした戦法はどれほど効果があったであろうか。

日露戦争の日本軍の勝利は莫大な血と汗の代償と、軍隊の素質と士気の差により勝ち取ったものだ。この点から考えると学ぶべき教訓には二つあると思う。

一つは戦争目的を理解できない軍隊は弱いということ。他の一つは兵器の進歩と戦法の変化が伴わなければならないことであった。

第1次世界大戦や満洲事変以後の戦争が、日本国民にも軍隊にも確固とした理解できる名分がなかったということは、論を俟たない。一方の日露戦争時のロシア軍に於ても戦争目的は理解されていなかった。

第2の軍隊の戦闘方式において、日本軍は依然として日露戦争の戦法を踏襲していた。合理的に彼我の戦力を判定して妥当な戦略戦術をたてることを軽視して、物質無

視、精神優先という戦法を繰り返していた。

明治維新後の日本を掌握した薩摩・長州閥が軍首脳を独占して、武士が生命を軽視した思想が根底に流れていたと思うが、しかし我々の時代の玉砕や万歳突撃の悲劇の思想は、小国日本が大国ロシアに勝ち過ぎたことにも胚胎していると考えられる。

日英同盟、米国の資金援助及び停戦に関してロシア側の説得など、他の勝因を忘れてはならず、ロシアはこれからが本当の戦争だと考えていたのであった。

戦闘は元来、非人間的なものである。その中で指揮官は最小限の犠牲で最大の成果をあげ、目的を達成することを考慮しなければならなかった。そして損害を意とせず、攻撃を命じる非情さを、指揮官は常に要請されて苦悩したが、私も忘れられない数々の経験がいつも思い出される。

日露戦争の終戦後、「何の顔（かぱ）あってか父老に見（み）えんや」と詠った乃木大将は、上下からの非難の中で強襲を繰り返した最高指揮官だが、国民的な英雄になったことは、戦争の教訓が正しく踏襲されなかったことと無関係ではないだろう。

第2次世界大戦後51年目の今日、胃癌の手術のために入院することになった私は、今一度人間同士が殺し合う戦争を何故しなければならなかったのかと回顧した。そして又、合理的な戦力の差を無視し、鉄と肉弾を引き換えにしたあの戦法に、我々日本軍が如何に大きな生命を失ったかと嘆くのであった。

8月1日、国立山中病院に入院した私は8月14日の手術日までの2週間、戦闘と開腹手術との心理などを病床に横臥し仰臥しながら考えていた。その最大の差は手術は生命の不安はなく100%生きられることで、死と背中合わせの最前線の将兵の心境とは全く異なるものであった。

入院後の1週間は、手術に耐えられる体力があるや否やと徹底的な検査と診断が行われ、後の1週間はその結果に対する治療に専念させられた。一介の老人に過ぎない私の手術のために何十人もの医師・看護婦・検査技師等の人手をわずらわせた。

これと対照して我々が戦った戦闘の作戦準備などの諸準備は、今になって振り返ると甚だ拙劣で補給等は全く考慮に入れず、真剣になって準備したのかと疑問を抱くばかりであった。

学べば学ぶほど愚かさを知ること「還愚」（ゲンゴ）と言うが、戦後18回も中国各地を飄然と遍歴して還愚を知り、実のある人生を送って画竜点睛としたいと目標を203高地に選んだ。

何か新しい夢を求めて歩くことが旅であり、旅の原点は歴史にふれて我が心魂に響かすことだと思う。戦跡を眺めて感じたことは兵は凶器、戦いは逆徳、争いは末事、天の許さぬところで、「戦争は百害あって一利なし」という結論であった。

今次旅行の経過要図

成田・(新羅)・大連・(バス)・旅順・(バス)・大連・(バス)・瀋陽(旧奉天)・・・
 (鐵道)・山海関- 秦皇島- 北戴河・(バス)・黄崖関- 清東陵- 薊県・(バス)
 金山嶺長城- 承德・(バス)・北京・(新羅)・成田



6月27日 (木) 曇 成田～大連

「行尸走肉」の身となり生命の終点は目に見えぬまま近くなっているが、実際の間は自分が死ぬとは思っていない。理屈では死ぬことを十分承知して想像するだろうが、しかし本当は知らない。実感では未来永遠に生きのような感じを抱きながら、6月27日の夕刻に成田を飛翔した。

希望は強い勇気と意思であり、意欲は人生を豊かにし、「人生即旅、旅即人生」であり、現在の充実が大切だと降り立ったのは大連空港である。

大連は平成2年6月に訪れて以来6年ぶりである。中国は天安門事件から満7年を迎え、多くの課題を抱えながら発展を続けている。21世紀の前半には経済大国になるのは確実だと言われているが、同時に軍事大国になる懸念も拭いきれない。

このところ世界中で「中国脅威論」をめぐる議論が盛んである。最近の日本の世論調査を見ても、中国に対する好感度イメージが低下の傾向にあるが、何故だろうか。

その背景には国防費の増大、核実験の継続、武器輸出、南沙諸島問題などがある。加えて世界経済の停滞状況を尻目に、経済成長を続ける中国の存在感の大きさである。

こうした安全保障や経済絡みの問題とともに、12億という人口圧力、これと関連する食糧問題、急速な工業化に伴うエネルギー消費の急増や環境汚染の深刻化なども、中国のイメージを悪化させる要因となっているようだ。

国際世論は中国自体の姿勢にもいらだちを感じ始めている。次々と顕在化する中国問題に対し、中国自身の説明が不十分であったり、時にはかつての中華思想さえ見える対外姿勢がその原因がある。

栄光の歴史を誇る中華民族が長年にわたる屈辱に耐えてきただけに、ようやくという思いもあるだろうが、余りにも自己主張が強いと周囲は警戒せざるを得ない。特に日本に対し事あるごとに過去の出来事を蒸し返すことは大人気ない。

中国は日本の宗主国のように「日中友好関係の発展の前提として日本は歴史を正確に認識しなければならない」と述べている。しかし中国こそ自国と世界の歴史を正確に認識すべきで、近代化を忘れて白人に侵略された歴史を反省すべきだ。

このような感じを抱きながら成田空港に集合すると、参加者はなんと10名に過ぎず、日露戦争(1904～05)は遠くなりけりであった。

大連の記事は前回詳細に記述したから省略する。一般に知られている「日露戦争」を角度を変えて観察し、要点のみを書いてみる。

日露戦争

経済的に必要のみならず、国内に勃然と沸き上がった人民の反感をそらすため東進をはかった帝政ロシアと、このロシアの東進を阻止して朝鮮半島に支配権を確立しようとする日本との間には、こうした政治的な底流が流れていた。これが日露戦争の原因であった。

誰の目にも明白であったのは日本の劣勢で、日本の為政者自身にも勝利の確信はな

かった。しかし国民は報道管制下におかれたが日本は勝利を得た。

その結果、ロシア国内では反動的にツァーリズム打倒の勢力が拡大し、一方では列強に従属を余儀なくされていたアジアの有色人種に、開放の契機を与えたと日露戦争は評価された。

大国ロシアと戦って勝利した日本は世界を矚目させ、戦勝後の日本の国際的地位は格段な向上を見た。ここで角度を変えてロシアにおける日露戦争を考えてみたい。

西欧を指向していた近代ロシアにとって、19世紀の日本などは殆ど関心をひかない小国であった。政府上層部が日本に着目するようになったのは、日清戦争とそれに続く三国干渉以降のことで、民衆の多くは戦争が始まって漸く日本という国の名を知ったのである。

日本とロシア両帝国の極東での対立が戦争となったが、ロシア内部には強硬派と穏健派の対立があった。しかし日本軽視という点では共通していた。

1904年2月、仁川と旅順での日本軍の奇襲攻撃で戦争が始まった。ロシア皇帝の開戦の詔勅では宣戦布告なしの日本軍の攻撃の背信性を強調し、民衆の戦争協力を訴えたが、知らない国との戦いの正当性は説得力はなかった。

(小国が大国と戦う場合に宣戦布告した例を私は知らない。日米戦争も然りである)

当初から日露戦争は近代ロシア史上では最も不人気な戦争であった。ドイツ、オーストリアとの戦争に備えていたロシア軍部には、極東での戦争に備えた作戦計画もなかった。

ロシア側は配備不十分な兵力で戦争を迎えたから退却しながら時を稼ぎ、ヨーロッパ・ロシアからの増援部隊の来着を待ち、数的に優勢になってから日本軍を反撃するという基本戦略を立てた。(しかし先を読んだ米国の停戦の斡旋が功を奏した)

そのため唯一の輸送手段である、長大な単線のシベリア鉄道での輸送に全力を上げた。しかしロシア軍の相次ぐ敗報は国内の不満、政府批判を次第に高め、特にロシア革命の発端である05年1月の「血の日曜日事件」以後、民衆の離反は決定的となった。

開戦時から戦争に反対していた社会主義者の民衆への影響力は大きくなった。苦境にたった政府には戦勝が必要だったが、3月の奉天開戦(現在の瀋陽)で破れ、5月にはバルチック艦隊も壊滅してしまった。

その直後のロシアの御前会議では国内治安の回復が最重要だとして、戦争終決の方針が打ち出された。そして日露戦争はロシア革命の引き金となるとともに、日本に対するロシア人のイメージの多くが作られた戦争でもあった。

自他ともに「世界最強の軍隊」を任じていたロシア軍の敗北の原因について、レーニンは「将軍や軍司令官たちが無能でくだらない連中であることが分かった」と前置きして、次のように述べている。

文武の官僚は農奴制度の時代と全く同じで、穀潰(カツガ)の汚吏であることが分かった。将校は無教養で、未熟で、訓練を欠き、兵士との緊密な結びつきをもたず、彼らの信頼を得ていないことが判ったと。

農民大衆の蒙昧、無知、無学、萎縮は、近代技術を要求する近代戦において進歩的な敵国民とぶつかったとき、あからさまに現れた。創意に富んだ意識的な兵士や水兵

なしには、近代戦での成功は不可能である。

専制ロシアの軍事的威力は見掛け倒しである事が分かった。ツァーリズムは、最新の要求に応じうる近代的な軍事組織にとって、邪魔なものであることも解った。

しかし軍事こそツァーリズムが全心を打ち込んできたものであり、又、人民のどんな反対も押し切って測り知れない犠牲を払ってきたものである。

以上がロシア側から見た日露戦争観である。

一方、「日露戦争後の日本の国策方針」はどうであったか。

戦後経営の基軸は日清戦争後の経営と同様に軍備拡張であった。1907年から12年に至る陸軍軍備拡張費は約1億7500万円、海軍のそれは約4億3400万円、両者合計は6億900万円の巨額に達した。

これにより陸軍の師団編成は19ヶ師団、平時兵力は約25万人、戦時動員兵力は約200万人まで大增員された。（日露戦争当時の戦時動員は約100万人）

海軍の軍拡は陸軍の軍拡を更に大きく上回り、主力艦隊をすべて艦齢8年未満の戦艦8、巡洋艦8を基幹とする88艦隊の建艦計画が策定された。

この大軍拡の背景にはアメリカ、ロシアとの対立、及び植民地の朝鮮、満洲における抵抗運動の高まりもあった。この軍備拡張と植民地支配の強化は、日露戦争後の国家財政にとって大きな負担となった。

一方では日露戦争時の外国からの借金を返済しつつ、他方では軍備拡張を推し進めていかねばならず、国民生活に深刻な負担を強いることになったのは当然であった。

とくに農村は大量の基幹労働力を兵士として引き抜かれたため、大きな打撃を受けた。この農村の動揺をしずめ、他方で富国強兵を支える良民良兵を確保するために、国民の軍事的組織化が急速に進んだ。

在郷軍人会の設立、青年団の奨励、小学校義務教育の6年制への延長など、いずれも天皇制国家のもとへの国民の政治的・イデオロギー的に統合する役割を担うものであった。

このように戦争は日露戦争中はもとより戦後も問わず、国民を犠牲にして国民生活を圧迫するものであった。第2次世界大戦に参加した私も戦後の苦しい生活を乗り越えて来たが、戦争のない平和は実に貴重なものだと思感しながら、紀行文を書き始めたのである。



6月28日 (金) 曇

旅 順 へ

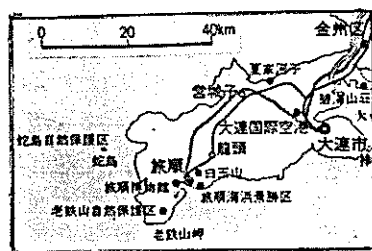
北の香港を目指して積極的な都市作りを進めている大連は暫くの間に変貌し、歴史が始まって以来の豊かさは隔世の感がある。経済開発区に指定されて11年目を迎えた大連では、日中の合併企業は400社を超え、日本独自の企業も330社に及び、約4000人の長期滞在の日本人の数は北京について多いという。

聞くとところによると日清戦争中に大虐殺があったらしく、古老は今なお日本に反感を持っているというから、「覆水盆に返らず」の格言の通りで、肉親の怨みは永遠かも知れない。しかしこれも南京大虐殺の例に習ったような感もしていた。

旅順に行かなければ大連に来たことにならないと言われているが、初めての旅順訪問を思うと、昨夜は想いが千々に乱れて容易に寝つかれず、ひっそりとした雨音に耳を澄ませながら目を閉じた。しかし今朝は5時に目を覚ましてしまった。

中山広場の傍らにあるホテルを出発したバスは、私の希望を受け入れて旅順への途中にある營城子壁画墓へと快走した。ここは黄海に面した大連と反対側で、楊柳の茂った遼東湾に面していた。

營城子にある東漢時代(25～220)の豪族の壁画墓は、墓室に描かれた鮮やかな朱彩が残る「主人昇天」「怪獣」などの壁画があり、中国の国宝に指定されている。



(上の図は大連～營城子～旅順の関係図)

鬱蒼として大樹の茂った整地の中に石造りの建物があり、鉄扉で頑丈に閉ざされて周囲は赤煉瓦の塀が巡らされていた。内部の見学は許されないが、古代の遼東にもこのような文化があったのかと驚嘆の眼で眺めていた。

遺跡は古代人の生と死の世界の出現で、当時を彷彿させるものがあるから特に私が希望したのであった。中国も文化遺産の保護に力を入れるようになったのは大躍進であり、経済発展のお陰である。

中国も変わらざるを得なくなっている。情報に国境がなくなると国境を超えたあらゆる観念が往来し、あらゆる価値観が交差して人的交流、文化交流、経済面での多国籍化、環境問題、核問題など、諸問題は一国単位では対処できなくなってきたからであろう。

營城子はまた旅順攻略戦時の乃木第3軍司令部の所在地であったから、毎日、肺腑をえぐるような悲惨な報告を受けていた將軍の心境は如何ばかりかと、息苦しい懊悩を感じるのであった。そして「大樹招風」(地位の高い人ほど大変だという意)の辞を思い出しながら、バスに乘車して旅順へと急いだ。

今次旅行の出発直前である5月21日の読売新聞によると、中国政府はこのほど日露戦争の激戦地として知られる遼東半島南端の軍港都市・旅順を、北京駐在日本人記者団に公開している。

人民解放軍北海艦隊(司令部は青島)の重要基地のある旅順は、外国人の立入りを認めない「未開放地区」で、外国人記者の取材が公式に認められたのは新中国成立後

初めてのことであった。

今回取材が認められたのは、軍港とは反対側の西部沿岸地区に建設中の「経済開発区」をはじめ、日露戦争当時の旅順要塞の一つ東鶏冠山北堡壘、旅順博物館、日清戦争の中国側犠牲者の墓地だった万忠墓、日露監獄跡の5ヶ所であった。

乃木第3軍将兵が血みどろの攻略戦を展開した203高地は、「軍港を見渡せる」との理由から直前になって不許可となり、軍港周辺にも一切近かずになかったと言う。

私も出発前、旅行社に「203高地」に登れるのかと何回も質したところ、小人数のツアーには目をつぶり、前回も登ってきたという返答であった。それで多分大丈夫だろうという印象をもって応募したのである。

遼東半島の南端にある旅順は黄海北岸の要港にあたり、唐は靺鞨(マコツ、北の鮮)を征伐して半島の海岸に上陸し、その遺跡は現在も残っている。

日本と旅順との関係は近代の戦闘よりずっと古くからあった。奈良時代初期の遣唐使は朝鮮半島の西海岸を北上し、遼東半島から山東半島へ渡るコースをとったのではないかと推定されている。

旅順という地名の由来は、遼東半島に新天地を求める山東半島の人たちが、ミヤオタオ(廟島)列島を渡って旅順に着いたから、旅の順路と言うことで旅順と名付けられたと言われている。(上の地図を参照)

清末の1878年、清朝はここに要塞を築き、李鴻章の指揮下にあった北洋艦隊の根拠地とした。日本は日清戦争でここを陥し、戦後、下関条約によって租借することになったが、臥薪嘗胆しながら三国干渉(ドイツ、フランス、ロシア)に従って清国に返還した。

しかし三国干渉の当事者である老獪なロシアは、南下の野望を果たすために遼東半島を租借し、旅順に近代的な難攻不落の要塞を築いて日露戦争を迎えたのである。



水師營

水師營という地名は中国各地に残っている。これは中国海軍の水兵たちの兵舎という意味である。

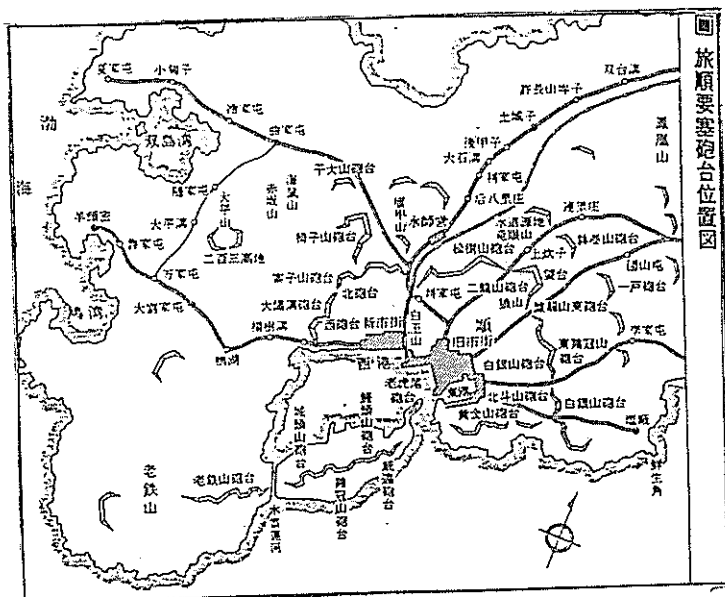
ここでいう水師營は旅順市外北方に位置し、旅順要塞の一角を担う近代的な堡壘があった日露戦争の激戦地の一つである。

(右の地図の中央付近)

右の地図の印のあるところは砲台や要塞で、旅順港を守る主陣地(絶対に守るという主抵抗線陣地)は東南部から白銀山砲台、東鷄冠山砲台、盤龍山砲台、

二龍山砲台、松樹山砲台、案子山砲台、大陽溝砲台を結ぶ線であった。即ち水師營は戦術用語で言う前進陣地で、主陣地の前方に設けた要地であった。

(上図で赤く塗ったところが主陣地で、203高地は主陣地の前に設けた堅固な前進陣地と言えるだろう)



明治37年6月から日本軍は旅順要塞を昼夜兼行で攻撃し、多大の犠牲者を出して翌38年1月1日に陥落させた。1月5日午前11時、敵の將軍ステッセルと乃木大将は歴史的・劇的な会見を水師營で行っている。

我々の小学校のころを回顧すると、「小学校唱歌」は日本人の共通の意識や価値観など、共通の日本文化を育てることにあらゆる努力を惜しまなかった。次に記述する「水師營の会見」と題した唱歌は、老若男女を問わず知らない者はいなかった。

【水師營の会見】

- ① 旅順開城、約成りて 敵の將軍、ステッセル 乃木大将と会見の
ところはいずこ水師營
- ② 庭に一本(ヒトト) ナツメの木 弾丸あとも著く 崩れ残れる民屋に
今ぞ相見る二將軍
- ③ 乃木大将は厳かに お恵み深き大君の 大詔(ミコノリ)、伝うれば
彼かしこみて謝しまつる
- ④ 昨日の敵は今日の友 語る言葉も、うちとけて 我はたたえつ彼の防備
彼は称つ我が武勇
- ⑤ かたち正して言い出でぬ この方面の戦闘に 二子を失い給いつる
閣下の心、如何にぞと

- ⑥ 二人の我が子夫々に 死所を得たるを喜び これぞ武門の面目と
大将、答え力あり
- ⑦ 両将、昼餉ともにして なおも尽きせぬ物語り 我に愛する良馬あり
今日の記念に献ずべし
- ⑧ 厚意謝するに余りあり 軍の掟に従いて 他日、我が手に受領せば
長くいたわり養わん
- ⑨ さらばと握手ねんごろに 別れて行くや右左 砲音(ツツオ)絶えし砲台に
閃めき立てり日の御旗

昨日の敵は今日の友と唱った歌詞は我が脳底に焼き付いている。この会見の模様と、第2次世界大戦後の連合国の第一線軍司令官や軍首脳の態度を照らし合わせて見る時、彼らが戦争犯罪人として日本軍人を処刑したことを思うと、非人道的性格が明らかである。民主主義云々をいう以前の人間性の問題ではないだろうか。

バスのフロントガラスに歴史を物語るような、古めかしい石積と煉瓦積の支那家屋が写ってくると、神経が高ぶり胸の鼓動は激しさを増してきた。子供心にも見覚えのあった記憶の中の風景を、頭の中に描き出しているとバスは停車した。

吸い込まれるように静かに進むと支那家屋の入口に、「水師営建材部」と書いた看板が目に入った。ここが両將軍の会見場となった名高い水師営の村落であった。

三方が高地に囲まれた地形は平坦で現在も海軍の兵舎が付近一帯に建ち並び、昔と変わらない軍の基地となっていた。

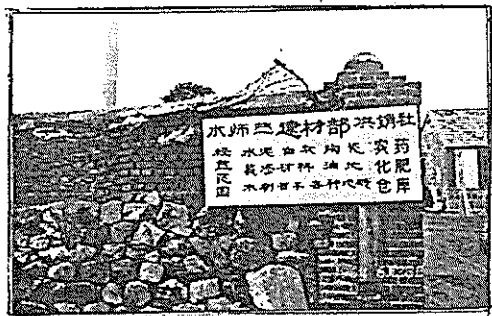
目を皿のようにして辺りを見渡したが小学校唱歌の「ナツメの木」は見えず、凜として沈黙している一行をガイドが案内したところは貧弱な陶器工場であった。

この陶器工場の地が乃木大将とステッセルが会見した場所だと説明された。その証拠は工場の広場の中に点々と残っているコンクリートの跡だけであった。当時のロシアはコンクリート(ペトン)で築城していたから、嘘でないかも知れない。

(上段の写真は水師営部落の入口、下段の写真はコンクリートの跡が下部に見える)

91年も経過した当時の支那家屋が今も厳然として残っている訳はなく、それらしい雰囲気は何となく感じ取れただけでも幸いであった。

会見場の跡地に立った私の脳裡には、時が逆流したかのように昔の想いが音を立てて押し寄せていた。ここで子供の頃を想起して日露両軍首脳の水師営に於ける会見の模様を記してみたい。



乃木・ステッセルの水師営の会見

旅順本要塞の陥落は、203高地占領（1904・12・6）から数えて25日目のことであった。この間の三大堡壘（東鶏冠山・二龍山・松樹山）の攻略戦がいかに早く終わったかが判る。（10頁地図参照）

延べ150日に及ぶ旅順攻略戦のうち、旅順本要塞三大堡壘の攻略時間は5分の1にも満たない速度で達成された。それには203高地を攻略されたロシア軍の、戦意の喪失という要因があったと思われる。

旅順開城は市民や負傷兵をこれ以上、戦禍に巻き込んではいならないと言うロシア軍首脳的主張が、徹底抗戦を主張する人たちを説得した結果の意思表示であった。

1905・1・2に降伏文書（開城の諸条件）に調印を終えたが、最も配慮された条文は次の通りであった。

「ロシア軍将兵の勇敢な防禦を名誉として、ロシア陸海軍将校及び官吏の帯剣並びに直接生活に必要な私有品の携帯を許す。この戦争が終結するまで武器を取らず、いかなる方法でも日本国の利益に反する行為をしないと筆記定誓する者は、本国に帰還することを承諾する」

1月3日には全堡壘、砲台が明け渡され、1月4日以降は捕虜及び軍用諸材料の受け渡しが始められた。1月5日午前11時から乃木司令官とステッセル要塞司令官の会見が水師営で行われた。この会見は乃木司令官の私的な発意によるものであった。

露軍の旅順最高司令官ステッセル将軍が参謀長以下を連れて、水師営に到着したのは午前10時30分、乃木将軍の一行はやや遅れて11時15分に会見場の農家に入った。

（右の写真はステッセル将軍等の水師営会見場に到着の情景）



会見は水師営の支那家屋の粗末な部屋で行われ、両司令官は初めて相見えた。会見はお互いに勇敢な戦いぶりを讀んで淡々と進み、そこには勝者の驕りもなく、敗者の卑屈もなかった。

私も大隊長としてビルマ（現ヤンマー）戦線で終戦を迎えたが、降伏式に臨んだ英軍司令官と比較すると天と地の隔たりがあると思っている。昔の武士道や騎士道がなぜ廃れたのであろうか。白人の侵略が有色人種に対して傲慢になったのであろう。

ステッセル将軍が先ず口を開いて、乃木将軍の二児の戦死（旅順攻略戦）の弔辞を述べたところ、乃木将軍は「予は元来武門の生まれである。我が国では古来から武門の身として親子兄弟、身を国に捧げるを以てその本分とし、これを畢世の名誉とする。予は二子の国難に斃れたるを以て、この上なく満足を感じたのである」と答えた。

ステッセル将軍は深い感歎に耐えられず、繰り返して称賛されたという。さらに日本兵の勇敢を賞し、ことに砲工両兵の優秀なことは世界無比だと述べている。

彼はまた「予の参加した前後3回の大戦中、今回の旅順のような惨絶を極めた戦闘

は未だかつて見たことがない。閣下もご承知の如く北清事変において最も勇敢な行動をとったのは、貴国兵と我が露兵であった」と述べた。

両国の兵士は世界無比の強兵で互いに死を恐れず、最後の一塊となるまで力戦奮闘し、今回の旅順の壮絶な光景を呈したのも偶然ではない。

予は衷心より誠意を以て今後永遠に日露両国が互いに相戒めて、再び干戈(かか)を交えるような不幸を見ないことを望む。

予は旅順戦のごとき惨澹たる光景を再び見ることは忍びない、と述べた。

ステッセル將軍はまた、貴軍が28センチ砲を使用したことは実に予想外のことで、このような海岸防禦砲を海を越えて運搬したその労と苦心は感服の至りだと述べた。

すると乃木將軍は「貴砲台の鉄壁なペトン陣地は我が砲兵も貫くことができず、予は貴国の要塞築城法に畏服せり、と答えている。

誇り高く胸襟を開いて語り合った両司令官は両參謀長を交えて昼食を共にし、お互い無事に帰国したなら文通を交わそうと約束し、午後1時15分に会見は終わった。

(上の写真は会見後の記念撮影。中列の左からレイス參謀長、乃木司令官、ステッセル司令官、伊知地參謀長)

ここに昨日まで部下を引っ提げて砲火のもとに相敵視した両雄は、一見十年の旧知のような親交の人となり、熱心に握手して別れたのであった。

乃木第3軍の將兵たちが万感を胸に秘めて旅順に入城したのは、1月13日のことであった。これらのことは我々が小学生の頃にたたき込まれたことで、それ以来、日本軍は世界最強だと日本人は信じ込んでいた。



203高地（爾靈山）へ登る

強烈な懐旧の念に駆られながら水師營の見学は終わり、203高地へとバスは進んだ。

熱病にかかったような私の203高地への想いは、癌を押してまで引き付けていた。漸くここに辿り着いた今の心境といえば、意余って筆及ばずというところであった。

水師營から西へ伸びる道路は昨夜の雨を含んだ木々の緑に包まれて、その森の中を走っていった。かつての旅順の激戦地一帯は現在、国定森林公園に指定され、見渡す高地の緑陰は飽くまでも濃く荘厳な靈気を帯びていた。

（上の写真は日露戦争当時の203高地の遠望で、禿げ山であったが今は大森林地帯となっている。頂上付近の黒い点々は日本軍の塹壕で、手前の横に伸びた白い部分は露軍の露天壕である）

赤土の土砂まじりの坂道を右手の山のほうに向かって登ると、小さな陶器工場が見え隠れしてきた。ここが203高地に通じる道路の入口で、桜花園と書いた歓迎ゲートと203高地への標識が立ち、いろんな花も植えられていた。（右要図の右下が入口）

日本軍の歩兵の歌には最初に「万葉の桜・・・」、あとに「散兵線の花と散れ」とあるが、それに因んで203高地の麓の陶器工場までが、「桜花園」と名付けたのかと勝手な想像をしていると、私の肺腑に爾靈山の重みがひしひしと迫ってくるのであった。

初夏の陽射しさえも遮るような深い森林には、松やアカシアの木のほか面妖な木々も生え、その樹海を抜け出て視界が開けた山の中腹でバスは停車した。

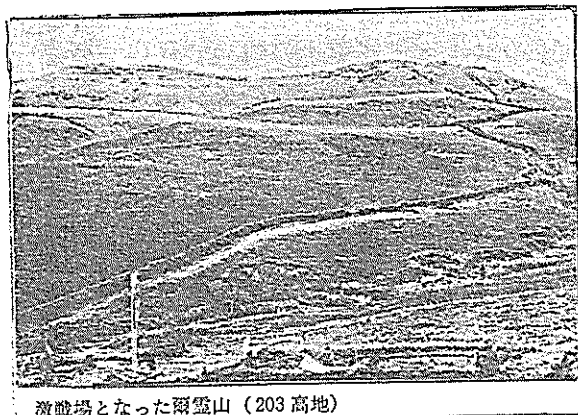
そこには当時の鬼神も泣かずにおられなかった、悲絶な阿鼻叫喚の光景は片鱗も残していなかった。しかし自ら数多くの歩兵の戦闘を体験してきた私は、直ぐ生と死を主題にした若武者に変身してしまっていた。

日露戦争当時の諸先輩に久闊を叙するように吾れ我を忘れ、膠漆の交わりを新たにするような思いで四周を眺めていると、欣然と死地に身を投じた泉下の人たちのことが、彷彿として目に浮かんできた。

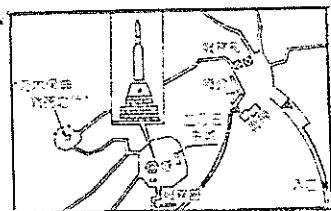
我が垢面蓬髪な顔の目だけはぎょろぎょろさせ、茂みに沿って曲がった坂道を喘ぎながら、幽邃な松林の樹間に五管を澄ませて登っていった。

我々以外には観光客の姿は見えず、沿道に咲く萩や山ぶどうの花は軋た(ウタ)寂寥の感じを増すばかりで、水を打ったような静けさは尚更私を緊張させて、全身の血管が火を噴くように熱くなっていった。

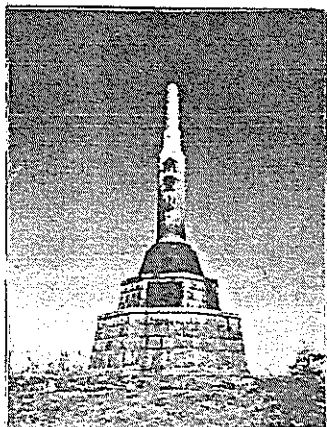
積年の宿願で垂涎の的であった203高地の空気は森閑として、古戦場の哀史を秘



激戦場となった爾靈山（203高地）



めた山道は鬼哭嗷嗷としていた。眉間に縦皺を寄せながら思わず足を停めて、虚空を見詰めると、一条の石畳の急坂が空に向かって一直線に伸び、203高地の丘が眼前に広がっていた。



(上の写真の左は「爾靈山」の碑、右は頂上に登る石畳の道路と景観)

「難得而易失者 時也」得難くて失い易いのは時である。よい時に訪れることができた一期一会に感動して登ると、高台の真ん中に爾靈山と書いた記念碑が天に向い聳え立っていた。

(203高地は標高203mを表し、爾靈山は戦後に乃木大将が命名した名称)

碑は人間感情を通じて私の心の中に生きていた。自然に慰霊と顕彰の心を込めて恭しく拝礼すると、91年前の日本及び世界の情勢が彷彿として脳裡に浮かび、癌を押してまで訪れた感動の涙が思わず頬を流れ、それを押さえることは出来なかった。

新緑の森がやんわりと高台をつつむ古戦場は、五色の雲霧にとざされていたが、やがて流れた雲間から微かに旅順港の入口が見えてきた。しかし雨雲はまた視界を遮り、旅情の極まる中でカメラを構えて切齒扼腕していた。

未開放地区のため長時間の見学は許されなかった。しかし爾靈山に足跡を残したことに鮮烈な印象を感じながら、深沈として寂しい203高地から降りることになった。

梅雨時の不連続線が停滞して定まらない空気の中の景観を、冥界にいる人たちに後ろ髪を引かれる思いでもう一度眺め回した。

やわらかく吹いてくる松籟を顔に浴びながら坂を下ると、そこにロシア軍の陣地の跡が見えていた。(右の写真は最近、激戦をイメージするために中国が造った簡単な散兵壕)



爾靈山は血生臭い戦闘があったことなど嘘みたいに森と化し、一味違った荘厳な気が充満していた。別れに当たり心底から鎮魂の祈りを捧げてバスに乗車した。

旅順攻略戦の天王山となった203高地の戦闘経過を述べるため、旅順攻略戦の全般の経過を次に記述する。

世界初の永久要塞・旅順攻略戦

明治27・28年の日清戦争は、漸く近代化されつつあった日本と、旧態依然として近代化に遅れた清国（中国）との戦いであった。それから10年、明治37・38年の日露戦争は、近代的軍隊をもつヨーロッパの大国ロシアと、漸く近代化した日本との戦いで、この時、日本は初めて近代戦の洗礼を受けた。

その当時の旅順要塞の永久築城は、ロシアを支援するフランスの軍事技術の粋を集めて造ったもので、その堅固さと火網構成においても、防禦施設の完璧さにおいても、また構造の巨大さにおいても、難攻不落の要塞であった。

旅順の攻防戦が日露戦争を象徴するほどの大規模な激しい戦いになった背景には、日本軍首脳の旅順に対する認識の欠如が指摘されるだろう。即ち日本軍の欠陥である情報軽視が原因だったと考えられる。

旅順攻略には港内のロシア艦隊の動きを封殺し、陸上から要塞への補給路を遮断すれば、その目的が達成できるという判断に沿って、初め海軍による海上封鎖、陸軍による旅順以北への攻撃（遮断）が展開された。

この作戦構想には大きな誤りはなかったと思う。しかし旅順要塞そのものに対する認識の甘さが作戦遂行を困難にしたと言える。

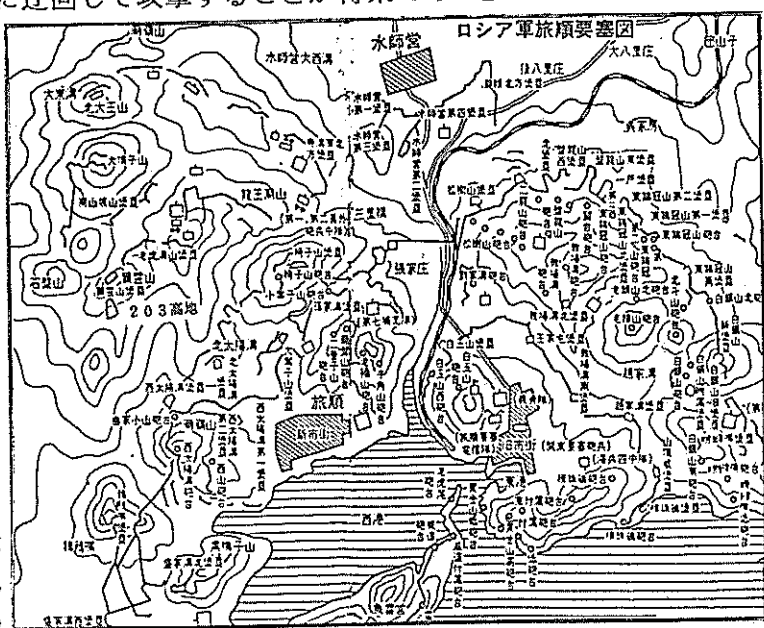
日清戦争時と比べて旅順は一変していた。地の利を生かし、巨費を投入して近代的要塞の構築に腐心していたことについて、日本の軍部は適切な情報を欠いていた。ロシア側の徹底した情報漏洩の防止策によるにしても、である。

当初の作戦計画と違って旅順攻略が急に浮上し、旅順攻略を目的とした第3軍が途中で編成された。可及的速やかに旅順を攻略せよとの至上命令を受け、第3軍司令官に任命されたのは乃木中将である。（後に大將に進級）

大本營の「旅順の背後に迂回して攻撃することが得策である」（203高地攻略）とする計画案に対し、乃木大將は要塞の中で最も堅固とされる東北の正面（二龍山と東鶏冠山堡壘の間）を攻撃目標とする正面攻撃を主張した。

（右図はロシア軍旅順要塞図で、堅固な主陣地は松樹山～二龍山～盤龍山～東鶏冠山を結ぶ線で、203高地は前進陣地）

これは一気呵成に敵の主陣地を衝こうとする作戦で、それが可能であれば旅順要塞攻略の最短の



コースであった。乃木大将の胸中にはどのような成算があったのであろうか。

大本營の迂回作戰（203高地の攻略）を拒んだ第3軍の作戰計画は机上の空論に過ぎず、旅順要塞の防禦線に対する認識の甘さを露呈することになった。

延々25日に及ぶロシア軍の防禦線には700門の砲が並列し、歩兵32個大隊、4万2千名のロシア陸軍があり、その守備態勢は近代的な要塞の堅固さと共に、予想を遥かに超えた戦意をもっていた。

【第1回総攻撃】（下の地図参照）

第1回総攻撃は8月19日に火蓋を切った。その時点での日本軍の装備は攻城砲170門、野砲80門、海軍からの支援による重砲33門であった。満洲軍総司令部は、8月12日には計画通りに突撃隊による総攻撃が行われ、戦果をあげるものと信じて疑わなかった。しかし砲撃による効果は全くの見込違いに終わっていた。

この時から作戰計画は大幅な狂いを見せ始め、以後、150日にわたる旅順の死闘の幕開けとなった。余力を欠いていた砲撃は効果も薄く、予定の砲弾を使い果たして鳴りをひそめ、白兵戦に満を持して繰り出した突撃隊は、ロシア軍の機関銃の弾幕の前で、敵陣地にたどり着く前に薙ぎ倒された。

白兵による夜間の奇襲作戰も探照灯に照らし出され、集中砲火を浴びて前進を阻止された。一時、第9師団（金沢）が盤龍山の一角を占領して気を吐いたが、結局は壊滅的な打撃を受けて奪回されてしまった。

近代戦に一步の後れをとり、突撃隊への過信が総攻撃失敗の原因であった。延べ6日間に及んだ戦闘に参加した兵員は5万余名、死傷1万5千800名で、山を覆うばかりの屍は累々としていたという惨状であった。

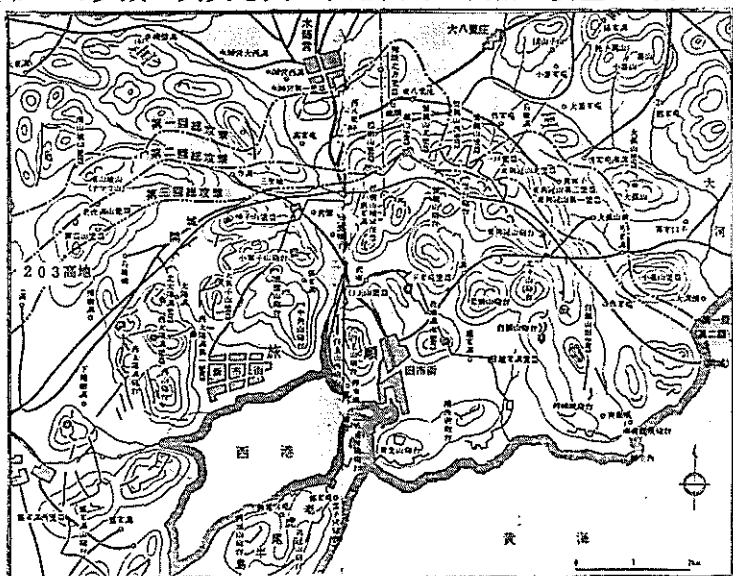
【第2回総攻撃】（下の地図参照）

第1回総攻撃は失敗に終わって多数の兵員を失い、近代的な装備の要塞に対する突撃隊の限界を知らされ、爾後の作戰の展開に危機の念を抱かせた。

作戰計画の見直しを迫られた第3軍は、ロシア軍が誇る東北正面の防禦線の攻撃を避け、防備の手薄とみられる周辺の守備線を撃破しながら、要塞の孤立化を図ることが得策だと、具体的な攻撃目標として203高地をあげた。

その論拠として203高地は旅順の背後に位置し、距離や高さの点から旅順港を眼下に一望できる。203高地の占領は何よりも、今後の作戰を進める上で大きなプラスになると言うのが主張の骨子である。

この提案は賛否相半ばして結局、203高地の攻略は消極的な採択、つまり主攻撃



正面の支作戦として攻撃目標に組み入れられた。

この時期になって203高地を攻撃目標に組み入れたことは、当初から大本営が提唱してきた迂回作戦を受入れたものとして歓迎された。

大本営の見解は、ロシア艦隊に対する港口閉鎖作戦の失敗以後、当面のロシアの脅威は旅順要塞そのものではなく、港内にいるロシア艦隊であった。（それは東航するバルチック艦隊との合流を防ぐため）

旅順港内の艦隊を撃滅することに専念すべきで、この方策こそが優先しなければならず、迂回作戦はその一環として行われるものである、と言うのであった。

第3軍が203高地を攻撃目標に加えたという報告があった直後、大本営は急遽、大口径の28㍉榴弾砲の作戦参加を決定した。（私も横須賀重砲で見たが実に大きなものである）

この巨砲は東京、下関などの主要港湾に設置されていた、艦船攻撃用の要塞砲である。バルチック艦隊の東航に備え、対馬海峡防備の一環として8月27日に移動が決定した。

この巨砲はドイツのクルップ社の設計・製造だが、この時初めて攻城砲として使用されることになった。その威力を検分した児玉満洲軍総参謀長は、さらに大本営に対し28㍉砲の追加搬送を要請している。（上の写真は旅順攻略戦の28㍉榴弾砲）

この時の攻撃では水師営東方の龍眼北方堡壘、水師営南方堡壘と南山坡山（ナマコヤマ）を占領した。ナマコ山は203高地の北側にあり、山頂から港内を望み見えたから敵艦隊を初めて砲撃した。しかし結果は無効であった。

第2回総攻撃の時、突撃隊による攻撃に初めて坑道作戦が取り入れられた。敵の堡壘の間近までジグザグに坑道を掘り進み、至近距離から突撃を敢行することによって、敵の銃撃による損害を少なくし、突撃の効果を高めようとしたのである。

しかし坑道を掘り進めるためには2週間に近い日時が必要であった。この坑道作戦に対してロシア軍は鉄条網を巡らし、地雷を敷設し、坑道に無数の手榴弾を投入して抵抗した。又、補助砲台や堡壘の銃眼から側射攻撃を間断なく続けたため、今回も再び流血の修羅場と化し、戦況は一進一退で膠着状態のまま推移していた。

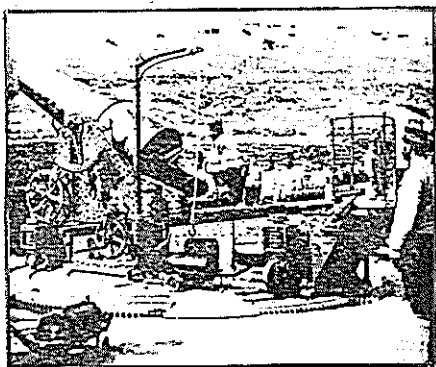
第2回総攻撃に参加した兵員は2万6千余名、死傷した兵は4千800余を数えた。前回の総攻撃の失敗に多くを学び、不屈の決意で挑んだ攻略戦であったが、結果的に見れば28㍉榴弾砲の作戦参加や、坑道作戦も戦況を左右できなかった。

【第3回総攻撃】（17頁の地図参照）

敵味方が重なり合った第2回総攻撃も失敗に終わり、バルチック艦隊が東航した報告は大本営、陸海軍首脳に決断を迫ることになった。

この時期、満洲軍総司令部では旅順要塞の攻略について、大本営の主張する西方迂回作戦は必ずしも得策ではないとして、これまでの作戦経過を是認し、むしろ兵員の増加を望んで第7師団（北海道）の増派を要請した。

それぞれの主張が対立する中で、バルチック艦隊の東航の報を受けた山県参謀総長は、11月14日の御前会議では満洲軍総司令部の主張を容認し、第7師団の派遣を



決定した。第7師団は予備師団として日本内地に残されていた唯一の師団であった。

満洲軍総司令部は乃木第3軍に対し、「旅順の死命を制するに足るべき要地を攻略し、以て旅順港内にある敵艦隊の戦闘力を奪い取る時機を速やかにすべし・・・」と、具体的には203高地の攻略を主作戦として遂行するように訓令した。

あくまで要塞の正面攻撃を主張して譲らなかった第3軍司令部は11月26日、3度目の総攻撃を開始した。正面中央の攻略を主作戦として二龍山、東鶏冠山、松樹山への攻撃を繰り返したが、総攻撃の失敗は明らかであった。

中村少将の発案で自ら陣頭に立った決死隊（白タスキ隊）3千余名の夜間攻撃も、翌朝の夜明けには松樹山堡壘の山の斜面に白タスキの屍が朝日を浴びて、川の流れのように横たわっていた。映画化されたこの光景は今も私の脳裡に刻まれている。

27日午前10時、乃木第3軍司令官は正面攻撃の中止を指令し、改めて203高地攻略を指示した。即ち主作戦の転換であった。203高地の防備は正面の要塞より弱点は見受けられたが、前回の攻撃の時からロシア軍は兵員を増加して陣地が強化され、抵抗は頑強を極めていた。

攻撃の先陣を切った第1師団（東京）は、28日の夜半に山頂の一角を占領した。しかし203高地が主攻撃目標となっていることを知ったロシア軍は、後方の主陣地の要塞から兵力を結集して奪還を計り、まれに見る死闘が展開された。

第1師団はこの激戦で攻撃続行の余力を失っていた。突撃と退却が繰り返された戦跡には、敵味方の屍が四重にも五重にも重なり合い、占領した地点に陣地を構築しようとしても土嚢が不足し、屍を積み上げたと言われている。（上図は10月30日の第3軍の戦線の状態）

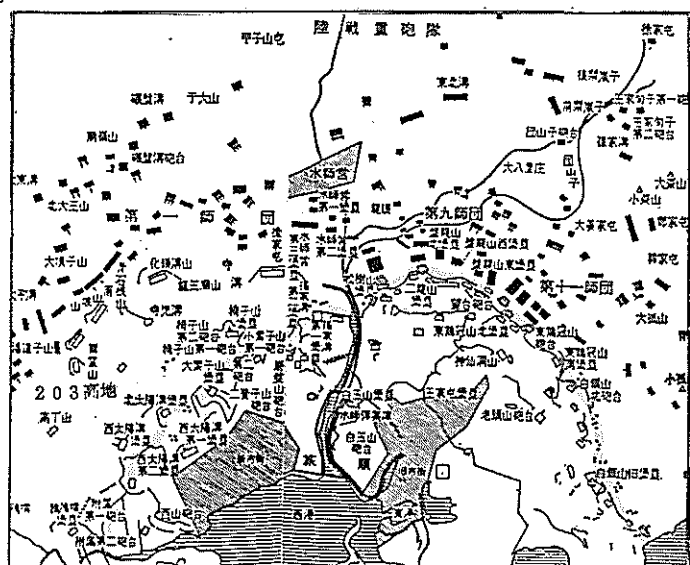
11月29日夜半、第1師団は遂に占領地を支え切れず、退却を余儀なくされて奪還を許している。翌30日午前10時、第3軍司令部は第1師団に代わる主兵力として、第7師団の出動を指示した。

この報告を聞いた児玉満洲軍総参謀長は第3軍の作戦指導に不満を抱き、自ら旅順に出向いて総攻撃の指揮をとることになった。

総司令部から第3軍司令部に到着した児玉総参謀長は、第3軍司令官代理として自ら砲撃、突撃の両面にわたり、作戦準備と手順を指示した。

12月5日午前10時、突撃隊が苦戦の末に三たび高地の一角を占領すると、戦力を集中して逆襲するロシア軍の撃退に成功した。即刻かねて準備していた28㍉榴弾砲の備え付けを急がせ、旅順港内のロシア艦隊に照準を合わせて砲撃準備を完了した。

この日の午後、28㍉榴弾砲は敵艦に向けて砲門を開き、敵の主力艦隊を次々に撃



沈した。ロシア艦隊撃滅という当面最大の任務を完了した軍内部には、心理的な余裕すら生まれたのであった。

203高地の態勢が12月5日夜になってほぼ決まると、ロシア軍の戦意は急に衰えを見せた。203高地に隣接する山々のロシア軍守備隊は、5日の夜から6日にかけて続々と要塞本陣地に退却した。

日本軍は6日午後には殆ど抵抗を受けることなく、数度にわたって多大の犠牲を出しながら攻略した、これらの要地の占領を終わることができた。

11月26日から12月6日までの間、203高地一帯の戦闘に参加した日本軍の兵力は、歩兵58個大隊、野砲180門、攻城砲206門で、戦闘総員は約6万4千名である。日本軍の受けた損害は戦死5千52名、戦傷者1万1千884名の計1万6千936名である。

ロシア軍の戦闘参加兵力は歩兵31個大隊、重砲132門、軽砲442門、野砲64門、機関銃34挺で、戦闘総員は約3万1千700名、死傷者は約4千名であった。

《標高203の203高地を乃木大将は戦闘終了後、爾靈山(ニイザン)と命名した》

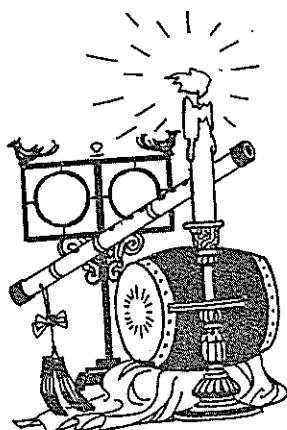
第3軍の各師団(第1、第9、第11、後に第7師団)は203高地攻略の作戦中も、東鶏冠山、盤龍山、松樹山などの正面要塞に攻撃を続けて牽制していた。203高地陥落の前後から正面陣地のロシア軍にも、弾薬・食糧の欠乏、士気の低下が見られるようになった。

日本軍の将兵は騎虎の勢いでこれら三大堡壘の攻略戦を展開し、12月18日の東鶏冠山堡壘占領に次いで、29日に二龍山堡壘を占領、そして最後の堅壘であった松樹山永久堡壘を占領した。(前頁および16、17頁の地図参照)

明治38年(1905)1月1日午前9時、旅順市街に向けた我が攻囲軍の一斉砲撃が開始された。その2時間後の11時過ぎ、ロシア軍司令部の屋上に白旗が掲揚されたのである。

明治37年7月31日の攻囲陣地確保以来、155日間にわたる激しい攻防戦は終わりを告げた。この旅順攻略戦に参加した日本軍の兵力は延べ約13万人、戦死者は1万5千400名、戦傷者は4万4千人である。

以上が陸軍の旅順攻略戦の概要である。



東鶏冠山北堡壘の見学（16頁と下図参照）

爾靈山を離れたバスは進路を東にとって水師營南方を通過し、天も地も人も眠るような静けさの中を東鶏冠山北堡壘に向かった。

高地の下に広がる平地地には一面に林檎園が続き、山々は植林された公園の新緑に囲まれて平和な光景を展開していた。

（右上の写真は日露戦争当時の東鶏冠山北堡壘の全容で禿山であった）

眼に写ってくる平和の陰には、多くの人たちの尊い犠牲があったことを深く心に刻みながら、戦没者諸先輩を心から追悼するとともに、車窓から恒久平和の願いを新たにしていた。

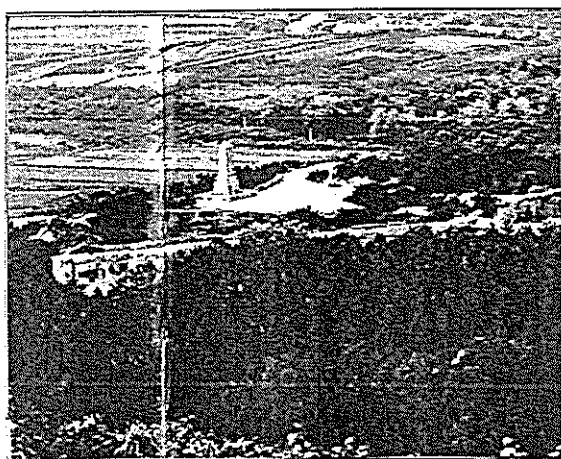
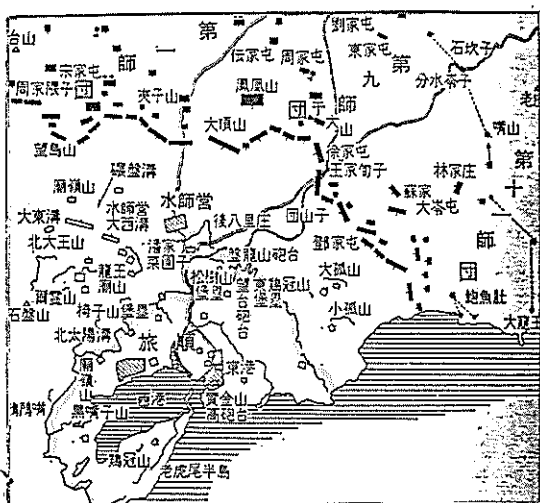
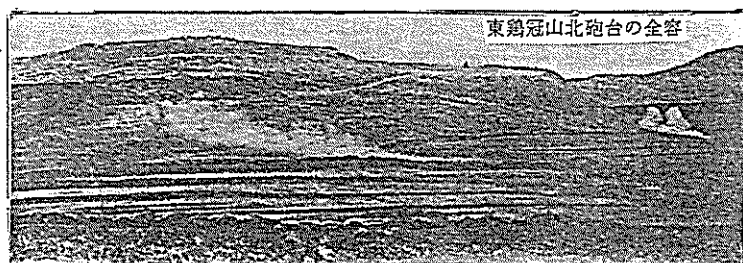
バスは坂道を登って赤土の山頂近くの広場で停車した。剣先を閃かし烈々とした士気と雲霞のごとく肉薄した日本軍が草の根をつかんで死を待つような戦況を想像すると、諸行無常の風が吹いている古戦場に見えるのであった。

旅順港が見えないために見学が許される東鶏冠山北堡壘は、中国人観光客が予想外に多くて売店までも並び、203高地とは違った雰囲気漂っていた。

数回にわたり津波のように日本の大軍が攻撃した東鶏冠山北堡壘は五角形で、未だに死臭が漂っていて正視できないと思っていた堡壘は、緑の山となっていた。（右は駐車した広場と記念碑に緑化した堡壘）

大砲30門と300余名のロシア軍が守備していた堡壘の攻防は、4ヶ月にわたって行われ、両軍はにらみ合いながら対峙した。日本軍は強攻が期待できないと判断し、この牙城に初めて坑道爆破の戦法を採用した。

1904年12月15日、日本軍は28号榴弾砲でロシア軍指揮所を爆破し、ロシア軍の防衛司令官はここで戦死した。そして18日、日本軍は2・3トンの爆薬で陣地を爆破し、堡壘を占領した。



石の階段を登って下車した広場には、東鶏冠山北堡壘と刻んだ大記念碑が聳えていた。恰かも第11師団（四国・善通寺）の将兵の士気が天を衝き、鬼神も泣かした奮戦ぶりを表しているように眼に映っていた。

名にし負う旅順要塞の鉄壁の堡壘を砕いた肉弾の屍は累々として山をなし、それを眺めて互いに励まし合って突撃した心境は、歩兵戦闘の凄惨を身をもって体験した私には痛いほど分かるのであった。（右は東鶏冠山北堡壘の記念碑）

この世ならぬ地獄の世界に赴かした指揮官の体験者の一人として、生死こそ人間の最大の問題だと、全国民が気が付いてくれることを願っており、黙って黄泉に旅立たれた霊を慰めて欲しいと、傍観しておられないのであった。（そこに増田神社の問題が残るのであった）

自然に囲まれた山腹に立つ記念碑に、人の世の哀れさを感じながら慰霊申し上げ、東鶏冠山北堡壘の見学へと歩いた。

見るとペトン（コンクリート）で固めたロシア軍要塞の上には、自生した可憐な花が咲き誇り、彼女らは知恵を絞って平和を祈っているように見えていた。（右は2階建の兵舎の外観で弾痕が見える）

歴史は足で学べと私の頭は敏捷に回転し、胸を躍らせながら血が騒がずにおられない心境で、先ず夥しい弾痕を残した2階建の半地下兵舎の外観を眺め、それから内部に入った。

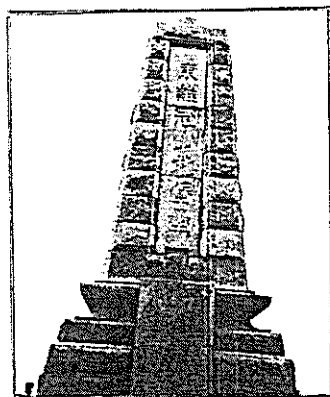
これだけ堅牢な陣地であれば現今の戦にも通用するぐらいで、当時としては世界無比の永久要塞だったと驚嘆の眼で見詰めると、懊悩させられてしまった。（右は2階建の兵舎と陣地の内部）

今日まで私が見学した永久要塞は旅順と青島要塞（ドイツ）の2ヶ所に過ぎず、このような難攻不落要塞から射ち出す敵弾をおかす突撃は、考えただけでも身の毛がよだち、針の筵（はり）の心境に胸がしめつけられそうであった。

砲弾の炸裂音と閃光、壕に突きささる破片のに音、煉瓦が崩れ大木が倒れる無気味な轟音、破裂のたびに山に響いて壕とともに身体が浮き上がる戦場では、人間は幽鬼のようになったが、弾痕は再び私を戦場に引き出したような感じを与えていた。

広い要塞の数箇所に中国が想像で造った日本軍の坑道の出口が見えた。しかし旅順攻略の成功は坑道作戦よりも、28釐榴弾砲の攻城砲の威力だと私は信じている。

背筋に悪寒の走る思いで眺めた東鶏冠山北堡壘や203高地は、見る者の肺腑を引きちぎるような強烈な衝撃を与えていた。旅順攻略戦を通じて肉弾攻撃は、犠牲の多く無謀な戦法だと当時の指揮官も悟ったと推察するが、何故その轍を我々の時代まで踏襲したのかと、大正・昭和の軍首脳の怠慢に憤りを感じながら堡壘を回った。



上記の記事の一部は遼寧省人民出版社発行「旅順口」の写真集を参考にした。又、この写真集によると203高地や東鶏冠山の各堡壘以外の、ロシアが誇る堅壘であった望台砲台、二龍山堡壘、案子山堡壘、椅子山堡壘、白銀山堡壘、電岩堡壘、松樹山堡壘、蜜子宮砲台、黄金山砲台、盤龍山堡壘などはよく保存されており、若し機会があれば見学したいところである。

写真集によると各堡壘には多くの記念碑や塔も残っている。これらは日本の支配した昭和20年8月までに、慰霊と顕彰のために建立されたと思われる。戦後50年を経過した今日まで狡猾で横柄な中国が、破壊もせずに保存した点は驚きであった。

ガイドの好意により、203高地と東鶏冠山東堡壘との歴史的な出合が叶えられ、私の念願だった夢が達成されたばかりか、我が脳裡に終生忘れられない印象を残し、これが最後と思われる海外旅行を赫く燃えさせたのである。

天運あって九死に一生を得、生きて還ってきたことが不思議に思える私が、心底から感動して随喜した東鶏冠山を去り、森森とした中に立つ「二龍山」の標識を眺め、冷水を浴びたような静寂の中の日露監獄所の旧址前を通り、水師營に戻った。昼食は中国の基地近くの古興酒楼で摂り、旅順の観光は終わりを告げた。

日露戦争当時の驚天動地の日本を想像しながら、戦袍に身を包んで我々が戦った戦争も、日露戦争と同じく原始戦法で戦い、卵を投げて石垣を崩すような無謀な戦いをしたと反省していた。

次に日露戦争の指導的立場の軍人と、満洲事変後の15年戦争の指導的立場の軍人と比較しながら、最前線の指揮官として戦闘に明け暮れた私が見た、支那事変から大東亜戦争の感想を述べてみたい。

我々が戦った戦争と日露戦争から

冷戦構造が崩壊して戦争はなくなるだろうと期待したが、豈図(アハカ)らんや戦争は益々多発したのは事実で、世界に国家の複雑性が存在する限り、戦争は世界歴史が終わるまで継続する、というのが結論である。

旅順を訪れた機会に、日露戦争の教訓を無視して我々が戦った戦争と、日露戦争とを比較して、反省することも全くの愚ではないだろう。人文5000年の歴史を調べてみても、大東亜戦争以上に世界的な意義をもつ重大な戦争はないからである。

戦史は勝った方より負けた方の戦史に教訓が多い。将校の末席を汚した泡沫に過ぎない私だが、幸か不幸か万死の境に入り、薄氷を踏む思いの戦場に身をおいて敗れた体験を、述べてみたいのである。

死生戦場に立ち、肉弾戦を敢行して猛烈な銃砲撃を受け、戦車の蹂躪、飛行機の猛爆等を味わい、死生観に当面した者でなければ、非情な戦闘場面を論じる資格はない。戦闘を知らない者にとっては、戦闘は想像の世界の出来事に過ぎないからである。

(戦争も戦闘も戦うことだが、戦闘とは直接敵と兵器をもって戦うことで、外地に出征しても戦闘の体験者は100分の1、激戦は万分の1ではないだろうか)

私が戦った戦争(戦闘も含む)の体験は勿論、兵器の進歩等により、これから起こりうる戦争の参考にはならないが、精神的には死者を出して初めて強烈な責任感を感じたのであった。経験は貴重な贈物で、馬鹿でも賢くするという格言の通りだ。

資源のない日本は短期決戦主義でなければならないが、太平洋戦争は3年8ヶ月、その前の支那事変は4年5ヶ月を要している。織田信長は短期決戦主義で多くの戦いを勇猛に勝ち抜いた。しかし天下は取れなかった。徳川家康は戦法としては見るべきものはないが天下を取った。これは政治を常に軍事に優先させたからである。

「右文左武」(ウケサハ、サバキの比喩)という言葉があるが、昔の武士は「武官兼文官」であり、「允文允武」(インカイン)と云って学問があり武勇もあるのが、武士であった。

日露戦争で肉弾突撃が、如何に大きな犠牲を払わなければならなかったかを体験した日本軍は、これを境にして、新兵器の開発と戦法を変化させる画期的な時機を迎えていた。しかし重大な好機を逸している。

勝者となった日本軍はこの変化を汲み取れなかった。否むしろ逆に損害を意とせず、肉弾突撃を敢行する攻撃精神こそが勝利の要素だと信じたのであった。

日露戦争の教訓では、日本軍兵士の軍人精神、攻撃精神こそが、勝利の原因だという公式見解をとった。そして戦闘の最後の決は如何なる損害にも屈せず、最後の一兵まで、肉弾突撃を敢行することによってもたらされるとして、生命を鴻毛の軽きに比し、忠君愛国の精神が物質的威力に勝るとしたのであった。

戦史は例外なく新兵器の登場と戦法の変化が、勝負の最後の決め手となったことを示している。騎馬と弓矢が蒙古族の東西両大陸の蹂躪を、可能にしたことを証明しており、新兵器は戦法を変え、戦法もまた新兵器を生み出している。

我が国の戦国時代では、織田信長が鉄砲をいち早く採用したことによって、結末を告げた。第1次世界大戦では毒ガス、第2次世界大戦では原爆が決定的な最後の勝負を決している。

この兵器の開発や戦法の変化(肉弾突撃から火力優先主義)には予算が伴う。だからこそ政治を優先させなければできない問題である。(軍の兵器は各種飛行機・戦車を始め、情報機器を含めて広範囲にわたっている)

それに加えて強調すべきことは、人的資源の無尽蔵的な思想である。この考え方が犠牲的精神を強要し、この世で最も尊いものは犠牲的精神だと教え、教えられ、人命軽視に繋がっていった。その最たるものは玉砕と言う言葉でないだろうか。勿論、戦う軍である以上、犠牲的精神を否定しないが、時と場所を考慮しなければならない。

私が体験したビルマの死闘戦場では、連合軍の歩兵部隊が一気に突撃してくることはなかった。一人でも生きている日本軍兵士の姿を発見すると、彼ら歩兵は徹底的に友軍の砲撃や戦車、爆撃の援護下に隠れ、火力で目茶苦茶に叩いて風景を一変させ、日本軍が居れなくなってから前進してきた。即ち人命を尊重し、人的資源を確保する戦法をとっていた。

当時を振り返ってみると、敵の絶対優勢な戦力も考えず、戦勝の決は白兵突撃によってのみ決まるとして戦った我々最前線歩兵は、戦場は娘捨山(ウサヤマ)、将兵の墓場だと簡単に見捨てられたのである。嘆かわしいことだが、戦史は各級指揮官の深奥を語っておらず、断腸の思いがするのは私だけではないだろう。

日露戦争で勝利した装備は、次の戦争でも勝利が獲得できるという考え方で、その象徴は無用の長物「刀」ではないだろうか。それが日露戦争から日本軍が解体するまで続いたことは、無策と言わなければならない。

旅順攻略戦で優勢な敵の銃砲撃の渦の中を突進した戦法は、西南戦争(1877・

2～9)における刀本位の西郷軍と、銃弾で応えた官軍の戦いと似ている。だから刀を振りかざして先頭に立った将校の死傷が格別に多く、田原坂式戦闘の二の舞を何時までも演じていたのである。

しかし日露戦争の勝利は、結局は刀剣による突撃で敵を圧倒したのであって、火力だけでは勝利は得られなかった、という解釈が一般化してしまった。

それは当時の将軍たちは明治生まれではなく幕末生まれの士族で、抜刀を武士の心得として身に付けた人たちであったからであろう。そしてバンザイ突撃は切腹の変形だと考えていたのである。(私の子供の頃まで武士出身の家の表札には「士族」と書かれ、誇りをもっていた)

孫子は「戦争の経済学」に常に注意を払っていた兵法家であった。日露戦争で日本の経済力の貧困を痛感した上層部は、これを糊塗するように「刀の戦い」である白兵戦を強調し、将来の戦争でも最後の拠り所にすべきだとしたのかも知れない。

以上は日露戦争の教訓を主として記述した。それから我々が戦った戦争までの長い間、日本軍の首脳部は時代遅れの教訓に基づいて教育し、戦争を準備し、指導してきた。戦争は兵器と戦術を変化させるという大原則を無視し、昔のやり方にこだわった無能ぶりは、重大な責任問題である。

「何時までも昔のやり方にこだわる」ことを「守株」(シュ)という。「思慮が硬直して応変に振舞うことを知らない」「意味のないことや間違っただけのことを、後生大事に守ること」等の意味である。これらの守株思想のリーダーは早く待命させなければ、軍は若返らなかったと悔やまれる。

孫子は「将に五危あり」と次の五つを挙げている。「必死」「必生」「忿速」「廉潔」「民を愛す者」である。

「必死」とは猪突猛進型で死にもの狂いなる将軍である。「必生」とは優柔不断型で、何時までも煮えきらない将軍のこと。「忿速」とは怒りっぽい将軍。「廉潔」とは清潔でプライドが高く、完全主義で名を惜しむ将軍。「民を愛す者」は人情型の将軍で、孫子は勝利の条件として戒めている。

日露戦争後に起こった第1次世界大戦(1914・7~1918・11間の4年)では目覚ましく兵器の発達を見て、毒ガスやタンク(戦車の始まり)が出現した。連合国の一員だった日本は青島攻撃と太平洋の島嶼の占領の他、大きな戦闘もせずに戦勝国に列した。

この4年半の世界大戦で甘い汁を吸った日本は、必死に兵器の改革等に取り組んでいた列強とは異なり、独り居眠りしていた。昭和14年のノモハン事件でも、優勢なロシアの戦車や砲爆撃に完敗した日本軍は、痛手を被りながら何らの改革も行わなかった。日露戦争から一步も前進しないことが日本の伝統であろうか。

私も部下に戦死者を出して始めて本当の責任観念を痛感し、実戦の経験の重要性を認識した。しかし軍人は階級が上になるほど戦場から離れる関係か、責任観が薄くなり、経験を重要視しないようになるのではないだろうか。

戦闘は美辞麗句では戦えず、戦闘は実戦の積み重ねによって策を生み出すもので、実戦の経験は金では買えない財産だと信じている。戦場の策者は策におぼれず真剣で、実行の必要性和可能性を常に念頭に置いていた。

戦場に立って下から上を見ていると、3日で上官のことを知ることが出来たが、上から下を見ていると3年たっても分からないのが実情で、このことを軍の上層部は考

えられなかったのであろう。人間性を無視した戦場の実相は、今日の我々の常識や人情とは隔離した世界で、軍の中央部も進んで第一戦に立って実相を肌で感じなければ、日進月歩の科学・技術の進歩・改革に追従できなかったと思う。

これらの欠陥は、日露戦争で大国ロシアに大勝利した影響の他、官僚組織と特権意識に権威主義を最も鮮明にしてきたのは軍人であり、日本の支配層となっていたことも忘れてはならない。その証拠に軍人以外の人を地方人と呼んでいた。

現今の我が国の政界でも批判的になっている2世3世議員と同様に、確かに軍の中にも2世3世が多く存在し、有力な地位を温めていた。幼年学校出身者と旧制中学出身者、陸大出身者と出ない者との軋轢は、外部から見ても分からない問題であった。

有力者の2・3世たちは特権階級意識が強く、彼らが激戦地に赴任しても直ぐ内地や満洲の安全地帯に転任し、いい加減な者としか思えない人でも出世街道を歩いていた。これも亦、我々の戦いが破れた原因の範疇であろう。

陸士や陸大の恩賜組（成績優秀者に時計や軍刀が下賜された）は、実戦での作戦が下手だという定評があった。彼らは中央や満洲に勤務した者が多く、死に直面する第一線に立たなかったから、実戦戦術は苦手なようであった。しかし身に危険を感じる戦場に立たなければ、真剣な兵器や戦法の改革も考えられないのである。

陸大をトップで卒業した人は参謀本部作戦課参謀になったようだが、死を伴う苦しい戦闘の谷間を渡った経験もないエリートたちは、特別な戦場心理も理解しないで全軍を動かすとは、ナンセンスと言わなければならない。

学問のない経験は、経験のない学問に優ると言われている。彼らは戦場で疲労困憊の極に達している将兵に対し、更に人として堪え得る限度を遥かに超えた、克難敢闘を要求するのであった。将兵は命のまま動いたが戦力は零に等しい状態であった。

米軍をはじめ連合軍は、「人間は食わずには動けない」と言うことを前提にして、作戦行動をとっていた。我々の体験した日本軍は、「たとえ糧食が尽きても精神力で敵を倒せ」と叱咤激励した。美辞麗句の命令だけを伝達し、全く補給（糧・藥・弾・具）を無視したのは敗戦の大原因である。

ビルマでは牛や羊を引き連れて食糧に替えると言う、ジンギス汗時代を思わせる軍司令官までが出現した。何を考えて作戦計画を立案したのであろうか。補給に責任を持つのが軍であり、これが師団とのに大きな差異である。

中央部のみならず軍は全般的に補給抜きに戦略戦術に走り、その多年の弊風が積み重なって戦線を拡大した。そのため死生の間に心胆を練りあげた人が犠牲にされたばかりか、縁故とゴマスリが横行して退廃を生んだのも事実である。

実地を踏んで鍛え上げない軍人は木偶(カ)の坊と同じで、装備が劣勢なのは裸で戦うのと変わらないのである。だから負け戦の味を知らない将帥は名将になれないと言われるのは、真剣な責任観念の自覚である。そして大将(上立者)一人で戦いはできない事も、戦場が私に教えてくれたのであった。

私の経験からすると陸大や陸士の学校にも問題が多い。日米が開戦に突入した以後の陸大の入試問題が、依然として対ソ戦法の戦術問題ばかりで、全く対米戦法の研究は空白状態であった。軍のエリート養成の陸大までが傲慢と曖昧が同居していた。

陸大の再審(再検討)の問題も亦、戦争と関係のない現実離れしたトンチ教室の問題であった。死臭が漂う眠られない戦場で作戦を練る問題でなく、内務班的な問題ばかり

であった。陸大教官にも敵弾下の第一線指揮官の経験者は僅少で、死闘戦場と遊離していたのである。

実際に絶対優勢な米軍と戦っている時、陸大の戦術問題で飛行機や情報が発達した当時では考えられない、師団の遭遇戦の問題が提出されたり、仮想敵軍は我と同等の戦力を有するソ連軍(赤軍)であった。このように実際に役に立たない座敷兵法と思うと、人間は地位が上がるにつれて、才能が低下するのかと疑うほどであった。

次いで私のような者が将校養成の陸軍士官学校の区隊長(教官)に選ばれたことは心外なことで、軍に人材なしと憂うばかりであった。

血と汗と知恵で戦う実戦の指揮官向きだと任じていた私が、生命の危険のない学校附を命ぜられ赴任して先ず感じたことは、我々の在校時代と余り変わらず旧態依然として居り、学校全般に先見性が乏しいことであった。

歩武堂々といった訓練ばかりが目につき、形式に流れすぎていた。これは戦争が酣な時に合致せず、要は実戦に役立つ将校の養成を主眼とすべきであると感じていた。

平時と戦時では学校教育にも当然のように差異があって然るべきである。しかしながら学校附の上層部は下級指揮官としての実戦の経験は少なく、実戦的な将校の養成を考慮に入れていない。戦時の教育は臨場感に溢れた教育でなければならない。

私と同じ立場の10名の教育者の中で、私以外に実戦の経験者は一人も居らない状態であった。そして武人でありながら要領のよい官僚的であることに意を用い、自己の栄達のみ専念する者が多いのには驚いた。明治の兵器と戦法を踏襲している軍が、原始戦の域をでない原因の一端が見えるたのであった。

錚々たる逸材ばかりと思っていた学校附上官の経歴を見ると、殆どの人は学校から学校へと渡り歩いている教育専従者であった。外地に出征しても満洲や後方の安全地帯勤務が主で、精神訓話適任者ばかりだと感じていたが、身を以て実戦を戦った経験を生かす教育が肝要で、私の心中は彼らを教育ゴロ、教育ボケと評していた。

軍にもあってはならない閥もあったようだ。自分に甘く他人に厳しい弊害が生じていたのも事実で、先見性のある優れた着想に乏しく、旧来の発想から一步も出ていなかったのも、軍の各種学校の実情ではないだろうか。勿論、特攻のような実戦を主眼とした学校は特別であろう。

以上は纏まりのないまま記述したが、結論の①は日本軍の人命軽視症候群という死の美化は誤りで、真の闇より無闇が怖いのである。②は戦闘は錯誤の連続で錯誤の少ない方が勝利する。予想外のことが起こるのが戦場で、常に作戦計画は最悪の事態を予想して、立案してこそ健全なものになる。③は兵勢には常はない。旧態依然の戦略戦術では応じ切れず、最終的には実戦の経験が大切だということで、真剣に取り組む戦場こそ、戦法や兵器の進歩・改革に繋がると確信している。

最後に述べたいことは、陸海軍の統帥を一本化できず、陸海軍が別々に軍政を分担して戦ったことと、空軍の一本化が出来なかったことが、我々が戦って破れた大原因ではないだろうか。そして統帥を無視した関東軍のように独断専行されては勝ち目はなく、万策尽きるのも当然である。

我々が身を投じた第2次世界大戦は、犠牲多くして残念ながら負けるべくして負けてしまった。閃光轟発、鮮血淋漓の旅順攻防戦を彷彿として睨に浮かべ、枚挙に遑がない多くの敗因の中から若干とり挙げてみた次第である。

大連観光

ロシア軍の猛火の中を丸裸で突撃し、力尽きて花吹雪のように散華した先輩たちの、限度を超えた苦闘を肝に銘じ、午後は旅順を去って大連の観光に移った。大連博物館（博物館）、大連駅、星海公園、貝殻細工工場、自由市場等の大連の観光は、前回の紀行文に記載したため省略する。

6月29日

(土) 晴のち曇

大連～瀋陽 (下図参照)

霧が晴れて大きな太陽が昇った午前中は大連市内観光が続けられた。お馴染みの旧満鉄が建設した大連埠頭、旧ヤマト・ホテル（現大連賓館）、旧満鉄本社、旧日本人街を見て、著しい自然破壊のためにすっかり変貌した老虎灘を回り、旧満鉄病院前の懐かしい渤海大酒店で昼食を摂った。

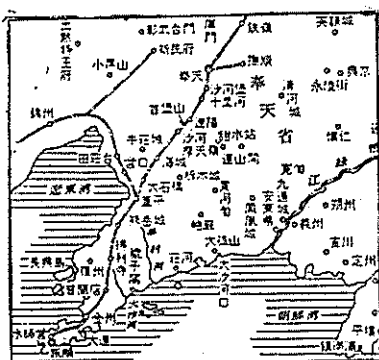
早めの昼食が終わって11:45に出発したバスは、大連～瀋陽（奉天）の高速道路（370号）を北上し、瓦房店と海城でトイレ休憩ただけで懸命に走り続けた。通過する地域は日露戦争の古戦場ばかりで、記憶を新たにしていた私には無聊を感じる暇がなかった。

曠野千里の満洲の大地を疾走し、午後4時頃になると右手彼方に鉄鋼の街「鞍山」の濛々として立ち上る煙が見えた。ここは紀元前の前漢時代に早くも製鉄が行われていた所で、満洲の資源に日本とロシアが目したことは自然の成り行きであろう。（位置は遼陽南）

日露戦争後、旧満鉄の製鉄所が建設され、鞍山の鉄と撫順（瀋陽東）の石炭を利用して重工業を拡大し、世界戦への備えを固めようとした地であった。

午後4時20分ころには遼陽の塔が見えてきた。やがて瀋陽の西を走る高速道路上から、林立する工場の煙突群が眼に映った。右肩上がりを経済が続く大工業都市瀋陽の発展の姿は、我田引水かもしれないが、日本が残した恩恵を目一杯受けているように見えていた。

高速を出て市街地に入った空は煤煙で覆われ、梅雨よりも鬱陶しい感じの町並みの建物には見覚えがあり、17時に北陵の東にある懐かしい鳳凰賓館に着き、旅の疲れを癒すことになった。



6月30日 (日) 晴のち曇

瀋陽観光

時の流れは瞬く間のように速く、6年前にも泊まった鳳凰賓館は今では古くさくなっていた。10回近く訪れた瀋陽(奉天)の観光は型にはまったように北陵、故宮、瀋陽駅、旧ヤマト・ホテル等で、今回は新設した「9・18事変博物館」(満洲事変)が含まれていた。

瀋陽駅前広場に立っている毛沢東の像は現在の中国では珍しい存在で、市内は変化する余地がないため郊外の発展は目覚ましい。満洲事変を契機として生まれた満洲国が、わずか15年の間にこれだけ発展する基礎を作ったのだと、事あるごとに過去を蒸し返す中国に言ってやりたいと思いながら、若いころの思い出に耽っていた。

大連と同様に瀋陽の記事は省略し、9・18事変博物館のみ記述する。

9・18事変博物館 (満洲事変博物館で場所は柳条湖)

6年前の今回は単独行動で柳条湖(溝は誤り)へとタクシーを飛ばし、草ぼうぼうの荒地の中に横倒しになっていた記念碑を見学した。続いて当時の中国軍の北大営兵舎の跡を捜したが見つからず、反転して張作霖を爆死させた皇姑屯駅に走ったことが脳裡に浮かんできた。

当時のタクシーの運転手から博物館の建立計画があることを耳にしたが、今回運よく博物館に足跡を残すことが出来たことは、私は未だ鶏肋的存在(鶏肋のこと、大して役に立たない)かも知れないと自惚れていた。

9・18とは1931年(昭和6年)9月18日、当時の奉天(天帝の命を奉ずる意)北方にある柳条湖の南満洲鉄道線路を、関東軍が爆破した事件のことである。

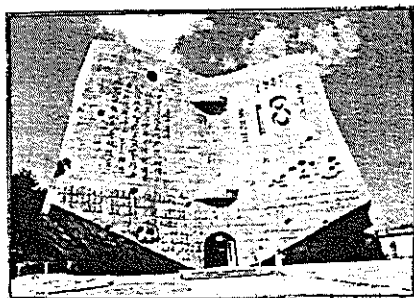
関東軍は中国側が爆破したとして、柳条湖付近の中国軍兵舎「北大営」を攻撃して占領した。この事件が日本の15年戦争の始まりの満洲事変の発端で、終戦後まで真相は明らかにされなかった。無理にでも力で押し通せば、それが正義になるということは許されず、私の胸に万感の思いが錯綜するのであった。

一行の乗ったバスは道路や町並みにも発展が見られる、北大営(現在は部落名)の柳条湖に到着し、コンクリート塀に囲まれたゲートの前で停車した。

荒れ放題の草むらであった敷地は整地され、博物館は南京大虐殺記念館と同じく日本攻撃の一役を担っていた。糸を引くように雨は音もなく降りつづき、館内の広場には湖水のように水が溜り、爪先を立てて歩かなければならなかった。

敷地の正面に一風変わったデザインの、コンクリートの建物が新しく建っていた。これは卓上カレンダーを形どったもので、無数の弾痕と腐蝕(サロウ、錆)を表面に表し、1931年9月18日の史実を左側に刻み、右側に18日のカレンダーの日付を刻んでいた。

(右の写真は卓上カレンダーの形をした9・18事変博物館の正面の建物)



卓上カレンダー型の建物の正面入口から1階ロビーに入った。真正面にある黒大理石に「忽忘国恥」の四文字が刻まれ、その上の方に残月状の時計をはめ込み、時計の針は事件の発端であった10時20分を指していた。

館内の2・3階は日本の侵略と中国人民の抵抗闘争を、写真や絵及び人形などを使って説明し、事変の歴史を刻銘に解説していた。遺恨を晴らすことを目的にした博物館は、命を削るような場面もあれば、事実と異なる笑止千万なものもあり、端的に言えば南京大虐殺記念館の小型化したものである。

全人類は誰一人の例外なく侵略者、差別者、抑圧者と言っても過言でない。共産党政権の言う革命も上記の一つに当てはまり、一つの階級が他の階級を打ち倒した激的な闘争（戦争）であった。

国の歴史をよく知る者は、その国の未来を読み取ることが出来るのであり、半世紀以上も前の日本を非難しても始まらないのではないだろうか。中国人は自己を見つめ、自己を改革することを知らぬ民族だと聞いていたが、本当であろうか。

齒がゆいがある場で反撃することもできず、心の中は鉛のように重く感じ、身の毛がよだち鳥肌のたつ思いで急ぎ足で回ると、日中の歴史が浮かんできた。

日本なしに中国はないと語った孫文は、「満洲は日本に譲る」と発言したことが思い出された。混沌とした時代に孫文としては、手の及ばない長城外の地方を、信頼できる日本に預けるという形で、諸問題の処理を考えていたようだ。

昭和初期に於ける国民党政府の支配力の及ぶ範囲は未だ限られ、北支（北中国）と満洲は地方軍閥が政権を掌握していた。だから蒋介石も孫文と同様に、日本の満洲支配を認めていたのは事実である。

そこにロシアの軍事的圧力や中国共産党の地下工作が入り込み、アメリカ資本の攻勢も加わって日本の権益を圧迫し、在満洲日本人の危機意識を募らせていた。

欧米諸国の植民地になっていた中国は、日本の大陸進出を白人のアジア支配に対する挑戦であったと、見てほしいのである。明治維新から50年で世界の大国に数えられ、その後40年で滅んだ経験を持つ日本人だからこそ、言えるのである。

当時の国際連盟は、白人が力で奪い取って世界を支配し、アジア太平洋の島々を搾取し続けた白人のクラブであった。イタリアのムッソリーニがエチオピアを攻撃しても、国際連盟は何にもしなかったではないか。満洲の秩序と平和を維持する日本を非難するのは片手落ちである。

第一次世界大戦で同盟国だった国が第2次世界大戦では敵国となり、世界は全く信用できないと言わなければならない。原爆事件を続けながら、やたらに平和を口にするのは二重人格の証拠である。

館内には明治天皇の写真から日清戦争、皇姑屯駅の張作霖爆死事件、中村大尉事件、万宝山事件等(朝鮮の事)の写真も展示され、満洲では耳にしなかったが、南京と同じような虐殺の写真まで飾られ、矛盾だらけの展示であった。勿論、9・18事件を起こした非は弁明できないが、肯定できないことの多いのには憤慨させられる。

共産党支配下の中国では、「前のことを忘れずに後事の師とする」とか、「過去を顧みて未来を展望する」とかの言葉が、型にはまったように下部まで浸透している。これは自分ほど正しいものはないと言う発想で、例にもれず、この小さな博物館のパンフレットにも記載されていた。

中国人は世界でもっとも自惚れやすい民族だと言われてきたが、共産政権下の中国人は自分自身で考えるのではなく、党の言うことをくり返すだけの方が信任が厚く、好意がもたれるから鵜呑みにしており、弾圧に屈しているのである。

中国共産党政権は専制王朝的なシステムであり、一党独裁といっても少数指導者への権力集中である。江沢民総書記は李先念の女婿で、李鵬首相は周恩来の養子であることを思うと、何ら過去の王朝と変わりがないようだ。

国共合作を唱えながら中国人同士を戦わしたのは一体誰であったのか。我々が中国戦線に従軍して見てきた共産軍の悪辣な行動を顧みると、彼らに歴史を語る資格があるのかと疑うのであった。

そして中国と韓国では、何かにつけて日本が悪いと言えば、総べての問題が落ち着くと言うのは困ったことで、古来からの「遠交近攻」策は今日でも生きていた。

心のどこかに憂憤を覚えながら9・18記念館を出て、絹のような滑らかな小雨の中を歩き、満洲事変勃発当時の日本軍が造った記念碑へと進んだ。

(右の写真は日本軍がつくった横倒しの記念碑)

私が最初に見たのは歩兵第25聯隊(札幌編成)に隊付のため、北満洲のチチハルに赴任した時で、58年も昔の昭和13年のことである。当時は満鉄線路の直ぐ東側に立っていた。



9・18記念館のパフレットには、爆弾の尾翼の形をしたコンクリートの記念碑と書いてある。しかし我々は爆破して曲がった軌条(レール)を表していると聞いている。鉄道線路は爆弾で破壊したのではなく爆薬であり、中国の意図的な姿勢を正すことは容易ではない。(爆破の直後に急行列車が通過しており、爆弾ではないことは確実)

共産党(軍)にとっては満洲は終戦後の内戦まで全く関係はなかった。だから旅順の各要塞にしても、この記念碑にしても最小限度に保存しているのであろうか。しかし、「四旧を破る」(旧思想、旧文化、旧風俗、旧習慣)と主張した「文化大革命」の大破壊を考えると、理解できないことばかりである。

続いてゲートの横にある「日本帝国主義統治下の瀋陽專題展覽」と金文字で書いた地下ホールの見学に移った。ここでは録画やビデオで事変を説明していたが極く短時間で終わり、焼印を押されたような印象を残して博物館を去った。

中国の人達に申し上げたい。歴史を緋くくと体制は必ず崩壊する運命にあることは明瞭で、世界は民主主義を謳歌している。「民主とは民衆に主権がある」と言うことで、主権は何物にも制限されない最高の権力だと、中国人民は自覚してほしい。

又、唇齒輔車の関係にありながら、中国にとっての日中友好とは、日本が譲歩することだと言う考え方は止め、遠い過去から続いた歴史と伝統を是非とも再建させたいものである、と。

7月1日

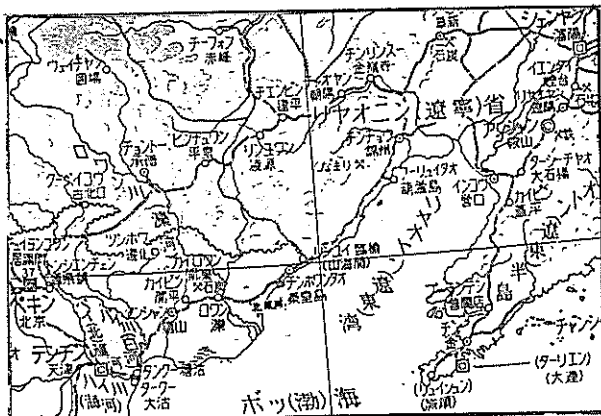
(月) 晴

瀋陽～山海関 (下図参照)

7:45発の北京行急行列車は定刻に瀋陽北駅を発車した。街が発展して乗客が増加したためか北京・天津方面行は瀋陽北駅から、一方の長春・ハルビン・大連方面は瀋陽南駅(今までの瀋陽駅)からの出発到着に変わっていた。北駅は私にとっては初めての出合である。

10階建のモダンな北駅を発つと、次の駅は皇姑屯駅だと車窓に釘付けにされていた。張作霖が爆死した皇姑屯駅に前はタクシーを飛ばして訪れ、駆け上がって線路上を歩いたことが思い出された。

列車は茫々とした沃野の中を一直線に走った。車内のサービスは低下して、今では一等車(軟車)でも茶は有料となり先進国並みであった。改革開放路線になってから世は世知辛くなり、中国の旅の情緒がなくなることを心配するのである。



10:45に停車した駅は【錦州】で、大陸らしく停車時間は10分間であった。ここは瀋陽と山海関のほぼ中間にある交通の要所で、漢時代から東方異民族に対する砦をなしていた。

丘に囲まれた街には数本の河川が流れ、高層ビルが櫛比して建ち並ぶ市街地を眺めていると、幽かな歴史が脳中に浮かんでいた。それは満洲を去った張作霖が、予定だった錦州を根拠地とすることもできず、遠い承德まで落ちのびたことである。

瀋陽(奉天)～北京間のこの鉄道は戦時中に私は3回も往復し、半世紀も過ぎた今でもその記憶は鮮烈に残っている。懐かしい記憶の糸をたぐりながら、山海関の長城が渤海に突き出た光景を臉に浮かべていた。しかし目を皿にして今か今かと待ち焦がれていても、一向にその景観は網膜に写らなかった。

改革で線路の位置が変更されることはありうると思っている時、列車は城壁の胸牆の形をした半地下道に滑り込んでいった。線路が地上から姿をけして奇麗な海岸線が見えなくなったのが今の山海関駅で、磯の香りも全くしないのであった。

我々の知る山海関は、北支那(北中国)と満洲国との国境をなしていた海岸線であり、列車は30分間停車して税関検査が行われた。その間を利用して将校たちは、天下第一関の長城の見学に走ったものだ。今日は久闊を新たにしたいと思ってきたが、すべてが消えさって昔の面影はない。全く滄桑の変であった。

なにか懐かしいものがないかと、血沸き肉躍るような思いで駅前広場に走って出た。そこには東西に伸びた幅広い街道と、林立したコンクリートの近代建築ばかりで、本当に昔の情緒豊かな中国は何処に行ってしまったのだろうか。

出迎えた流暢な日本語ガイドの「呂」氏に尋ねると、駅は北に移動して市街は新興都市となっていた。残念な思いで先ず「豆花村飯店」で昼食を摂った。

山海関 (下段の地図は広大な山海関全般の図)

山海関は北京の東方約300里のところに位置し、山と海と険しい地形によって守られ、燕山山脈に沿って造られた万里の長城の東端で、「天下第一関」と言われている。

屹立した険しい山の角と大海の間に形成された山、海、関の渾然一体の景観は壮麗で、山海関とはよく言ったものである。

前に渤海の蒼波を控え後ろに巍峨たる山嶺が聳えて、正に何処から見ても水陸の要害たる地に恥じない。

これが「天下第一関」といわれ、「燕東の天嶮」（燕は北京の略）と謳われた所以である。（上は天下第一関と書いた山海関の老門）

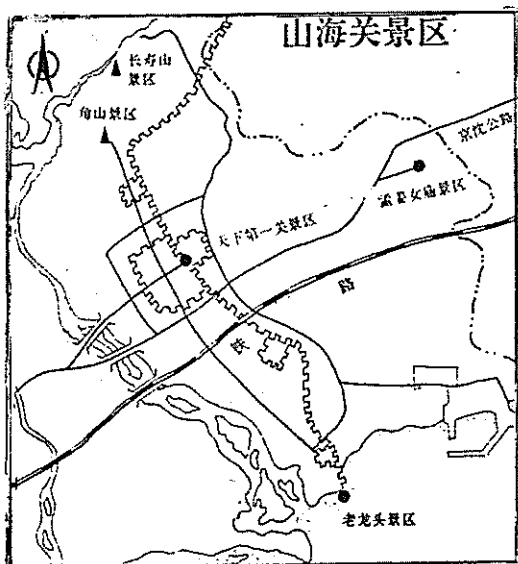
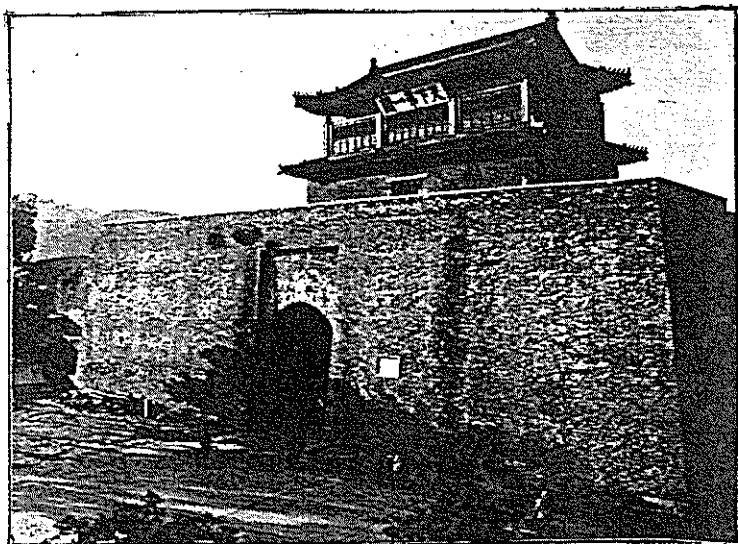
山海関は古代中国の堯舜の時代（伝説上）から要衝の地で、古来から兵家必争の地として幾多の興亡を経てきており、烽火の絶えることがなかった古城の一つである。

現在の城は明の洪武14年、「徐達」によって初めて造られた「山海衛」で、後に「山海関」と改名した。明の万歴7年、海中に突き出たように「老龍頭」が造られ、西方はるか6000里の甘肅省の嘉峪関（嘉峪関）までの長城の起点となった。

明時代の末年、農民一揆から軍を起こした「李自成」が北京に迫ったとき、山海関の明の司令官「吳三桂」は救援に駆けつけたが間に合わず、北京は陥落して時の皇帝「崇禎帝」は景山に登って自殺し、明朝は滅んだ。そこで吳三桂は清軍に寝返りして、清軍は北京に無血入城した。これは歴史的にも名高く山海関の最後に記述したい。

1899年の義和団事件（別称は北津事変）のとき、日独英米などの8ヶ国連合軍が天津・北京を攻撃した際、山海関の起点である老龍頭から上陸した。

満洲事変以来、満洲と支那との国境となった山海関は、政権争覇の中心となった。中でも有名なのは、直隸派（張作霖）華やかなりしころ、奉天（瀋陽）の張作霖と覇を争った奉直戦争は、私の記憶に歴然としている。



奉直戦によって張作霖は関内、つまり山海関の内側の北京に入ろうという野望を燃やした、第2次奉直戦の際、時の直隸軍の大將「呉佩孚」(カイフ)とここで対戦した。このとき呉佩孚に強制されて熱河(熱河)地方に兵を進めていた馮玉祥(ヒョウキョウシヨウ)の国民党軍は、突然、奉天軍と妥協して軍を返して北京に入り、馮玉祥は時の大總統の「曹錕」を軟禁してしまった。

このことを山海関にあって聞いた呉佩孚は大いに驚き、かつ怒り、直ちに馮を討つべく北京に向かった。しかし遂に果たすことは出来なかった。

これらの事件も私の記憶の中に残っている。このように山海関は近代支那軍閥争覇の絵巻物の上にも重要な役割を占め、数々の秘話をのこしている。

山海関の建関600年の蒼桑の歴史は中国の文化的遺産だが、1983年以降に重複修理したため昔日の面影はなくなっていた。

《清朝が崩壊した以降の中国は、群雄割拠して国内は安定せず、満洲事変から支那事変(昭和12年7月7日・盧溝橋)まで内乱状態であった》

天下第一関区 (下は第一関区の地図と全景)

明時代に万里の長城は多く造られ、山海関、居庸関、嘉峪関を三大名関と称した。我々一行は天下第一関を見学するため駅前の食堂からバスに乗り、先ず鎮東城楼東側の老門前の広場で下車した。最初に築城したときには第1関には鎮東、迎恩、望洋、威遠の四つの城楼があったが、現存するのは第1関城楼の鎮東城楼だけである。

山海関の関城は完全な形で残る古城の一つで、堂々とした関城は虚空を衝き、広場から見上げる威容は流石で威圧されそうであった。

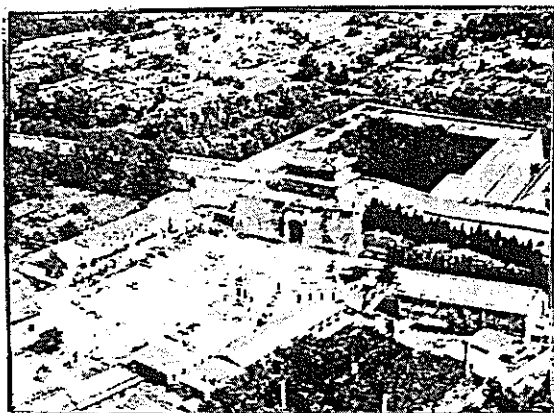
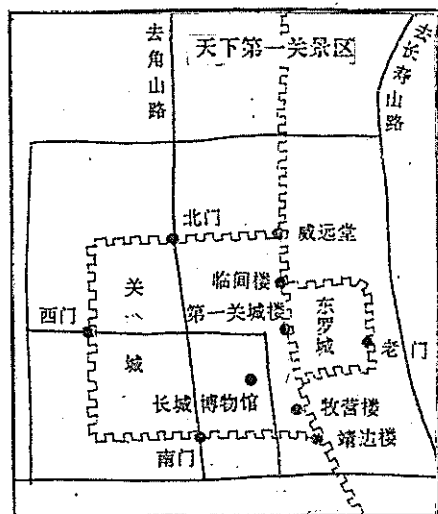
(前頁の写真は天下第一関の鎮東城楼と老門)

城壁の高さは約14m、厚さ7mで、鎮東城楼に向かって緩やかな坂道が設けられていた。

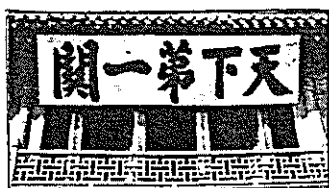
(右下写真中央、鎮東城楼の右側が登城の坂道)

鎮東城楼は高さ10mの2階建てで、屋根には動物を形どった飾りが取り付けられていた。関城は東門(老門)、西門、(迎恩)、南門(望洋)、北門(威遠)の四門からなっている。また北、東、南の三方の城壁には矢を射るため、70近くの穴が造られている。

山海関は万里の長城東部の一つの関城だが、明王朝が最も恐れていた北方騎馬民族に通じる京城第一の街道であり、特に「天下第一関」と名付けたのである。



城楼の二階に「天下第一関」と白地に黒で書いた扁額が掲げられていた。これは明代の開化8年（1472）に進士の「蕭頭」（シウケン）が書いたもので、一字の大きさは優に一坪あまりあるだろう。（右は天下第一関の額と楼）



近代では義和団事件から各国の守備隊がここに駐屯したこともあり、満洲事変の熱河作戦の時にも山海関城を攻撃している。これらの戦闘経過を思い出しながら城壁の上を散策し、兵家必争の地の景観を堪能していた。

城楼の建物の内部は長城博物館の陳列室となっていて、古代の鎧、冑、兵器などが展示されているが、時間の余裕もなく見学は割愛されてしまった。

日本では美術館、博物館の数が3、700もあると言われている。しかし展示するものがなく、大半は街の古道具屋程度のものが集まっているだけだと聞く。現今の経済状態では考え直さなければならない。中国では歴史的に由緒ある山海関や旅順、承德と古い大都市だけに限られているらしい。

孟姜女廟（姜女廟とか貞女祠とも言う）（位置は33頁の地図参照）

鎮東城楼の天下第一関を去って、中国四大民間伝説の一つである「孟姜女廟」の見学となった。乾き切った炎天下を優雅な物見遊山気分にしたたりながら、東門（老門）の東南約7里の姜女を祀る、鳳凰山に向かって砂漠地を快走した。

一行の乗ったバスは108段の石段のある丘の下で停車した。まず孟姜女の伝説から記述する。

（右の写真は孟姜女廟の108段の石段と山門）

孟姜女の説話は秦の始皇帝の長城築城にまつわる悲話であり、明代の築城にまつわるものではない。しかし明代築城の山海関地方に古くから孟姜女説話があり、「臨榆県志」（この地方は漢代には臨榆県が置かれていた）に次のように記されている。

「貞女祠は東関外13里の望夫岩の頂きにあり、孟姜女を祀る。この祠は宋以前に創始される」。宋以前に創始されるというのは、そのような伝聞があるということであろう。

山海関の築城は明代であり、それ以前の宋代よりも前から、この地に孟姜女説話があると言うのは可笑しい。しかし戦国時代にこの地に長城があったかも知れない。

今世紀のはじめ、敦煌の洞窟で発見された夥しい数の文書の中に、孟姜女の名が見える唐代の詩がある。

孟姜女は杞梁（キリウ）の妻

一たび燕山に去（ユ）きて更に帰らず

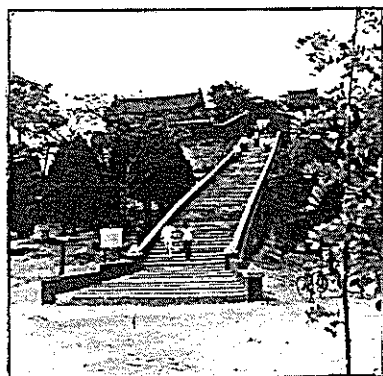
寒衣を造り得て人の送る無し

免れず自家（ミスカ）征衣を送るを

（燕山は燕山山脈で明の長城の北側の山脈、漠然と北辺の燕の地を指したのであろう）

「孟姜女は杞梁の妻」というと春秋時代になる。范杞梁は春秋時代の斉（山東）の人である。その妻が戦死した夫の杞梁を思って哭（ナ）くと、その心に感じて城壁が崩れたという言い伝えがある。この詩は杞梁の妻を孟姜女としている。

長城築城のための犠牲になった兵士あるいは人夫の妻の哀話として、幾つもの説話



が伝えられてきた。敦煌で発見された前記の唐代の詩は、それを春秋時代のこととしている訳である。

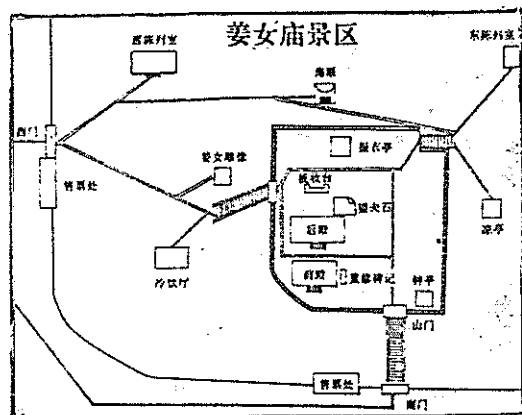
それは戦国時代の築城でもよければ、秦の築城でもよいのである。辺境の築城に駆り出された何万、何十万もの若者の妻たちの中には、時代を問わず無数の孟姜女がいたのであった。

秦の始皇帝時代に徴発された男が山海関近くで労役に従事させられていた。その人夫の妻は何年も帰ってこない夫の身を案じ、冬着を整えてはるばる工事現場まで夫を尋ねていった。

彼女は山海関にたどり着いたが、苛酷な労役に耐えられなかった夫は、すでに長城の下に人柱として埋められていた。

そのことを知った彼女が慟哭すると、俄かに雷鳴がとどろいて城壁が崩れ落ちた。そこから夫の遺骸が現れ、妻は夫を手厚く葬った。その後、孟姜女は悲しみのあまり山海関の崖の上から海に身を投げて死んでしまった。(右は姜女廟の配置図)

この山海関の孟姜女の哀話は唐代から詩歌、芝居、伝説、語り物として、民衆の間に1500年以上も伝承されてきた。そして方々にある孟姜女の中で、廟のあるのは山海関だけでないだろうか。



廟の南門に着いた我々は蒼松翠柏が影をつくった108段の石段を登り、貞女祠の扁額が上がった山門をくぐり、孟姜女像の塑像を祀った前殿の前に立った。

【前殿】の大門の両側に掲げた次のような対聯の詩が目に入った。

「海水朝朝朝朝朝朝落」「浮雲長長長長長長消」
この中国漢字は一字多音、一字多義なことが特徴で、海水朝(潮)落、浮雲長消は自然現象を表現している。自然界の景観の変幻きわまりない多くの姿は無限長久だが、人生はどうであろうかという意味であろう。

前殿の中に入ると中央正面に孟姜女の塑像が祀られ、その両側には男女の子供の塑像が立ち、その上の方には「万古流芳」の扁額が見えていた。(上の写真は孟姜女を祀った前殿)



前殿の両側の壁面には数多くの刻碑がはめ込まれていたが、その中には清の乾隆帝、嘉慶帝、道光帝らの「御筆」の題詩の刻碑もあり、南宋の文天祥の所題のものもあった。万里の長城は白骨の上に立っているとも言えるから、歴代皇帝は手厚く廟を守っている感がしていた。

前殿のすぐ後ろにある【后殿】には「慈航普渡」と書いた扁額が上がり、正面中央の蓮花座の上に慈悲深い眼差しの観音像が立ち、右側に如意をもった普賢菩薩、左側に書巻をもった文殊菩薩の像が立っていた。

后殿を出てその後方に回ると巨岩があり、その一つに【望夫岩】の三文字が刻まれていた。岩の間にある穴は孟姜女が夫は何処にいるのかと見渡し、足を止めたときの足跡だと伝えられている。

望夫岩の構にある小さい平らな石は女性の姿見のように見えるから、これを【美女梳粧台】（化粧台）と呼んでいる。そこを過ぎたところに孟姜女が更衣したという【振衣亭】が建っていた。これは清の康熙帝が廟を訪れたときに休息した建物である。

廟のまわりには鐘楼や鼓楼があり、純白の孟姜女の石像が二体も造られ、周囲の風景と調和して甘美な情景を醸し出していた。（上の写真は對岩と説明書いた岩）

天井しらずの勢いで何もかも膨んでいる中国では、日本の美術館ブームに劣らず観光資源開発にも力を注ぎ、この孟姜女廟も湯水の如く資金を投じている感じであった。



老龍頭長城（下図は老龍頭長城地区の配置図）

孟姜女廟を去り、動物が水を求めるようにバスは自然に海辺に向かった。いよいよ私が春秋に富んだ青年のころに眺めた山海関を見るのだと、神経を高ぶらせて記憶の糸をたぐり寄せていた。

海中に突き出た老龍頭を訪れたのは50年以上も前のことで、老人性痴呆症と言われても仕方がないが、あの覇気にはらんだ堂々とした威風は見えず、閑散とした新市街の空気をかき乱すものは何一つ見えない。

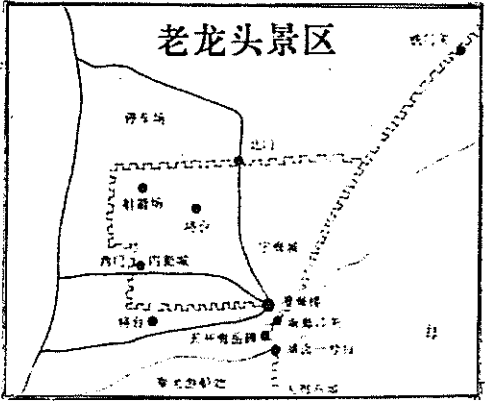
バスは老龍頭長城の北門の駐車場に入った。しかし我々が当時「山海関」と称して足を運んだ老龍頭は昔の面影をとどめず、変貌した光景に驚きながら城内へと進んだ。

北門を通過した所が【寧海城】で、城門の上に寧海城の三文字が見えていた。山海関文物旅遊局発行の書籍によると、寧海城は明時代の城の主要な部分で、軍隊の駐屯と練兵の用に供されていた。

老龍頭の北にある新築した寧海城（上図参照）は周囲4浬、城壁の高さ7㍎もあり、天下の景勝地に恥じない麗容は測々として胸をつくものがあつた。

清の光緒26年（1900）の北津事変の際に、8ヶ国連合軍の英軍はここに兵營を造ったという過去があり、1989年に現在のように新築したとき、城の中央に練兵場と閱兵台も造られ、明代初期の民族的英雄「戚繼光」の塑像が立っていた。

寧海城の南門に当たるところが【澄海楼】（上図参照）で、老龍頭長城では最も高



いところにあり、朱塗りの二層の城楼は飛楼のように天に連なり空に溶け、海水のように清い澄海楼は気宇壮観である。

澄海楼の前身は明代の観海亭で、清が天下を制覇してから康熙帝9年(1670)と乾隆8年(1743)に大修築している。恐らく我々が往時に見た山海関は正に澄海楼であったと思われる。

翼を一杯に広げたように城壁が連なり、黒松林の空の上には数羽の鳶が輪を描き、絵のような眺めの素晴らしさは風光明媚と表現するより外なく、静かな海の波の音に誘われて澄海楼を下って行った。

1900年に8ヶ国連合軍が山海関を占領した時、老龍頭の砲台も破壊されたが、澄海楼下のその場所に今も「天開海岳」の碑が立っていた。(上の写真は澄海楼と下方の南海口関)



この付近は【南海口関】と称し、長城が海に没するところの関所であった。この関所は山海路の十大関の一つで、明の初め「徐達」が山海関を築城したとき、南海口には将兵171名、馬5匹を配置して防備に当たらせたと山海関志に書かれている。

いよいよ最後の【老龍頭】へと下った。山海関は現存する万里の長城(明時代のもの)の最東端で、藍を溶かしたような渤海湾に突出した部分を「老龍頭」と称し、全体を老龍頭長城と呼んでいる。

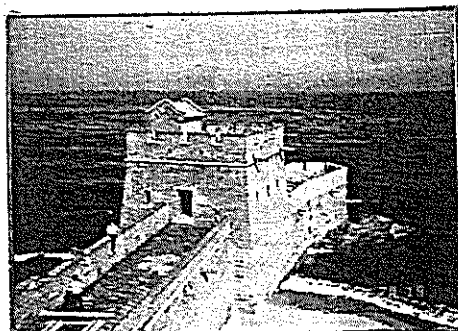
遥か西方の嘉峪関から山海関まで、蜿蜒と屈曲して伸びること6000㍍に及び、その長城を一匹の長龍とみなし、その東端を巨龍の将に(マニ)海に入ろうとする形だとして、老龍頭と呼んだのであった。

渤海に入ったところが石城となっているから【入海石城】の呼称が付いている。石城の部分は明の万歴7年(1579)、「北虜南倭」に(北方から侵入した蒙古族と南方海岸を侵奪した和寇)対する防備に活躍した「寂継光」が築いたと言われている。

(上の写真の上段は昔の老龍頭・入海石城の突端、下段は新築した現在の突端)

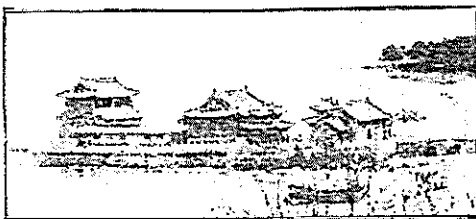
現在の入海石城は長さ22、4㍍、幅8、3㍍、高さ9、2㍍、石積みは9層、突端には昔の遺址の巨石も遺っている。築城してから400年も経過した入海石城は崩壊していたが、1987年に修復した姿を眺められて感慨無量であった。

疲れが重なったからであろうか、眼病がある私の目は虚ろになって焦点が定まらない。ひとりでに西の方に視線を移すと、初夏の風は潮の香りをのせて白砂の浜に吹き渡り、海水浴を楽しむ中国人は黒山のように群れをなしていた。



その向こうに見えてきたのは【海神廟】で、昔もあったのであろうかと首をかしげて眺めていた。なかなかの海上の景勝で仙境の感がしていた。

老龍頭の西方約300㍍の海上に浮かぶ高台楼閣は高低があり、三面には海水を巡らし、そこに向かって健脚の人たちは水を得た魚のように、勇んで脚を運んでいった。



海神廟は明の初めの創建で、海運が盛んで商人の往来が激しくなり、又、漁民等の海上の安全のために海神を祀ることになった。

清の乾隆・光緒の時に廟の修理が行われたが、1900年の8ヶ国連合軍が山海関を侵攻したとき、海神廟も戦火に巻き込まれて毀され、1988年の再建まで廟の姿はなかった。だから私も知らなかったのである。(上の写真は海神廟の景観)

行動半径が極端に短くなった私は一行と行動を共にできず、独り駐車場に座り込んで山海関の新しい城壁を眺めていた。西の端の嘉峪関にも20年ほど前に訪れた私は、身の幸福を感じながら佇んでいた。そして歴史や雑感に耽っていた。

日本の侵略戦争が一番最近で最後であったから、中国は何から何まで日本の罪が最も重いと攻撃している。しかし、それには同意できないと一人で憤慨していた。

中国は彼ら自身の失敗は些かも省みず、文化革命を批判する党幹部は見当たらない。長城にしても都市にしても文化遺産の寺院や城壁を破壊し、今になって復元に莫大な投資をしている愚を反省しているのかと、城壁に向かって呟いていた。

昔から波風を立てたくないという中国民衆の思想と、はびこる事大主義に追隨する思想をうまく利用した中国首脳は、日本に対し事あるごとに過去を蒸し返しているが、彼らの一人よがりの驕り高ぶりは必ず身の破滅を導くだろう

熱帯雨林に棲む生物の生活を観察しても、木も木の葉も鳥も爬虫類も総べてが互いに、持ちつ持たれつの生活をしている。彼らが日本を何時までも事実反して虐殺国家だと非難攻撃している間は、協力関係は進展せずアジアの平和は容易ではない。

一方の日本にしても、不幸にして戦争の歴史は真実と離れて、単なる道徳の教科書となってしまう、反省と謝罪と不戦の決議が結論となっている。何故そうなったかに就いて考えることを禁じているのは領けない。

明朝を破った清と山海関の歴史

明朝は万暦から天啓を経て崇禎帝の時代になると、腐敗した内政と異民族による外圧で、二進も三進(ニツサツ)もいかなくなり、18才で即位した崇禎帝は鋭意改革に勤めたが、すでに時期を失っていた。

東北では満洲族が瀋陽を都として後金の王朝を建て、南下して北京に剣を突きつける姿勢を固め、一方、重税や飢饉から起こった明国内の反乱は各地に拡がって行った。

明朝では清と改称した後金の南下を阻止するため、遼西の事情に詳しい「呉三桂」に精銳の軍を委ねて、山海関の守備を固めさせた。

明の国内で内乱を起こした首謀者の李自成は西安に順王朝を建国し、更に太原、大同と山西省の西側を通して居庸関から北京に迫った。

急を聞いて山海関から救援に駆け付けようとした呉三桂は間に合わず、北京は陥落して崇禎帝は景山に登って自殺し、明朝は滅亡した。

山海関を守備していた呉三桂は関内に清軍を引き入れて清朝に降り、さらに先導して北京に迫った。すると李自成は抵抗することなく北京を離れて西安に逃亡した。

李自成の北京占領はわずか40日、清朝は明朝のために賊を討とうという大義名分を得て、無血入城すると、明朝の多くの官僚は喪服を着用して出迎え、清朝は無傷で明朝の組織を受け継いだのである。

【寿山福海】寿は山の如く、福は海のようなという言葉は、山も海も見事な山海関に最も適していると感じながら、憧れていた景勝を離れることになった。

秦皇島市 (下の地図参照)

山海関や北戴河を含む秦皇島市は遼寧省との省境で、山を背にして渤海湾に臨んだ海滨都市である。地名は秦の始皇帝が東巡の際に、万里の長城用の煉瓦をここで造り、余ったものを海に投じて島を作ったという伝説に由来している。

行政的には秦皇島市は唐山（西方の都市）地区の直轄市で、人口は約140万人である。市は東から山海関区、海浜区（秦皇島）、北戴河区、の三つの町に別れている。

秦皇島地区

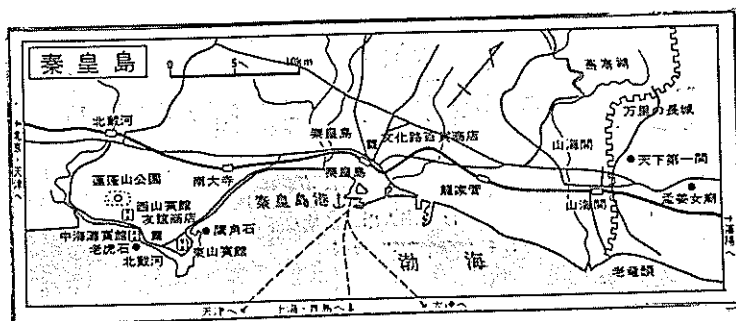
山海関から西17キロの不凍港・秦皇島は清朝のときに開港した。開鑿炭坑(カイザンコウ)の関係から英国の勢力が絶大で、昔は日本人の居住も許さなかったと言う。

北清事変の際に連合軍はここから上陸し、海岸線一帯に英仏日などの兵營があつた。(開鑿炭坑は当時、英國資本で造られた)この地名は上記したが、字でも分かるように昔は渤海湾の離れ小島であつた。それが沖積層の発達と砂丘の移動により、本土と陸続きになったのである。

私の記憶にある秦皇島は実に素晴らしい海岸線が続いていた。当時は北京を發って瀋陽(奉天)に向かうときも、反対に瀋陽から北京に向かうときも、日中にこの風光明媚な海岸と必ず出会い、それが旅の無聊を慰める楽しみであった。

その頃の海岸線には沢山な塩の山が積み上げられていた。この塩と北支那の広大な土地から取れる豊富な綿花があれば、簡単に「綿火薬」の製造が可能であり、群雄割拠時代の軍閥はこれに目を付けて、虎視眈々と狙っていた地区であつた。

印象に残っている塩の山が見られるかと注目していたが目に映らず、美しい海岸線は石油コンビナートと化し、塩に代わって開鑿炭坑の石炭が山のように高く積み上げ



られていた。

秦皇島は1900年に開港した不凍港として有名で、1973年に大慶油田からの石油パイプラインの敷設が完成した。車窓から原油専用埠頭も見え、1万トンの船が同時に数隻、停泊できる近代的な港に発展していた。

隔世の感がする海岸線に沿った市街地も近代都市として整備され、緩やかにカーブした白砂の海浜が見えると、そこは名高い北戴河であった。

北戴河

岬の東側に屹立した巨岩は、鷹の嘴(ケバシ)に似ているから「鷹角石」と呼ばれ、更に東に鳩が巣を造っているため「鴿子窩」(鴿=鳩)と名付けられていたが、観光地らしく目を楽します景観が続いていた。

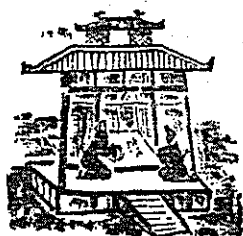
秦皇島よりも外国人の間に知られているのが、異国情緒の濃い北戴河であった。湾を形成するように突き出た岬は、緑と赤く縞模様を描いている赤土とが調和し、落日の迫った残照に輝いていた。

緩やかな海岸線、松林を抜ける松籟、穏やかな波を売り物としている北戴河は、清朝のころには皇帝を始め政府高官や外国公使、金満家たちのために高級保養地が開拓され、海浜に700余りの別荘が建てられた。

今も庶民の楽しめる海水浴場は賑わい、中国の屈指の療養地になっていて、現政府の高官や実力者も訪れている。全くヨーロッパの避暑地の縮図版といった趣で、北中国のニースであった。昔を思い出すと、張学良もかつてこの別荘に第何夫人かを引き連れて、悦楽に耽っていたのである。

現在、海沿いには瀟洒なリゾート・ホテルが建ち並び、ホテル越しに眺める白い砂浜とエメラルドグリーンは、コバルトブルーへと幾重にも色を変えていき、静かな海は印象的であった。

我々は北戴河でも有名な外国人専用のホテルに宿泊することになった。夕食は蟹料理を始め鮮魚料理であったが、蟹は上海蟹と同じで、越前蟹の本場の私を満足さす筈はなかった。ただ感心したことは女性社長が挨拶に訪れ、我々を個々の部屋まで案内したことである。



7月2日 (火) 晴 北戴河～薊県(ケイケン) (下図参照)

疲れ果てて爆睡状態だったが目を覚ました途端、私の足は白砂青松の北戴河の海岸へと出掛けていた。早朝の5時半というのに多くの人が潮騒の中を、思い思いに散策していた。それだけ余裕ができた中国人の生活は、50年前には予想もできなかった。

前記したように戦争当時は塩の山が海浜に積み上げられていたが、今は観光第一のため塩は小屋の中に押し込められていた。しかし海岸を散策して北戴河を楽しむ時間もなく引き返した。

清朝皇帝もしばしば遊泳に訪れた北戴河の金山賓館で朝食をとり、社長の見送りに手を振って別れを惜しみながら、バスは天津・北京街道を唐山に向かった。都を控えた土地柄だけに道路は四通八達し、8:30に出発して11時には唐山に到着した。しかしガイドは観光の予定箇所でないためか何一つ説明しない。

唐山は平成6年7月(1976)、大地震が発生して24万人以上が死亡し、そのニュースは我々の記憶には未だ新しい。中国では地震がないと一般に言われていたから、干乾煉瓦の家屋は地震には一溜りもなかったようだ。

唐山は撫順に次ぐ中国第2の炭坑として発達し、約100年の歴史を有す大都市である。最近では機械、鉄鋼、セメント、紡績、製紙、陶磁器工業なども盛んで、鉱工業都市となっていた。

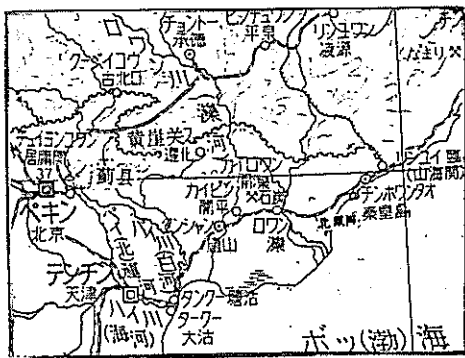
蒙古の忽必烈(ケビライ)が初めて帝位についた元の上都は、唐山の東隣の開平炭坑の地域であった。(上図参照)同時に元朝最後の順帝が蒙古へ逃げ込んだ旧跡地でもあり、歴史は歴史を誘って面白い。

天は日本のような資源のない国には勤勉な人間を与え、昔の中国のような怠惰な国には豊富な資源を恵んだのだ、と思いながら唐山市街を通り抜けていった。

13:00に【薊県】に到着し、ホテル漁陽飯店に入って昼食となった。ホテルといっても昔の招待所なみで、北京・天津に挟まれている土地では仕方がない。

【薊】(ケイ・カイ、おぼろのこと)は北京の東約90kmで薊運河の上流に当たり、周代に黄帝の末子を薊に封じたのが始まりで、春秋時代の山戎(種略で燕齊などを侵している)の「無終子国」(フユウシコク)の国都であった。

漢代は無終県、晋以後も同じく隋になって初めて県名が漁陽となった。唐は薊州とし五代以降もこれに習い、清もまた同じであった。民国になって薊県と改められたが、今は天津市地区である。



薊県～黄崖関 (上の地図参照)

天津市薊県にある黄崖関長城は北京の東、天津の北に位置し、薊県北部の群山の中にあり、綿々と続く雄偉な長城は新しく修復されたもので、今回初めて開放された。

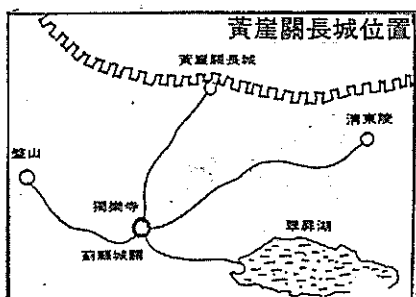
「黄崖」は重疊とした連山と共に遙かな雲際に没し、一夫関に当たれば万夫も進むことができない峻険な崖が連なっている。それに夕日が西から照射して反射する山崖の光景は金のようなから、その名がつけられたと言われている。

黄崖関は帝都防禦の軍事的險要の地として漁陽(鯁の詔)の山脈を結んでいる。薊県より115㌔の黄崖関長城は泥灰粘合と磚石(イガ)からなり、方型や円型の見張台があるのが特徴で、氣勢は雄飛、風光は壯麗である。

明朝時代(1368-1644)に造った万里の長城の一部分である黄崖関長城は、文献によると明朝の永楽帝、天順帝、成化帝の三つの年間に関所を建造し、嘉靖年間に築城し始め、際慶年間に「戚継光」が中空見張台を創設し、万暦年間に煉瓦や石を積み上げて城壁を構築した。全長41㌔もある起伏の多い連山を結び、虎踞洵河の河谷は峻険で、独特な風格のある建築の構えとなっている。

城壁の中には「八卦関城」「北極閣」「太平寨堡」などが造られているが、これは中国の長城修復工事では珍しい存在である。

この長城を造った人物は山海関を造った「戚継光」で、ここにも彼の塑像が立っていると聞いたが、我々は時間もなく見られなかった。彼は山海関を起点として都の西辺(今の北京の直ぐ北の評)、保定までの2000㌔を3年間で完工した人物である。



八卦街

一行は漁陽(鯁の詔)古街を散策し、明朝時代を偲ばせる牌坊をくぐって先へと進んだ。

長城の内側に抜がる街は「八卦街」という街であった。八卦は長江の三峡で諸葛孔明が用いた陣地の名称で、易の算木に表れる八種の古象によって運命判断の基本原則としたものである。

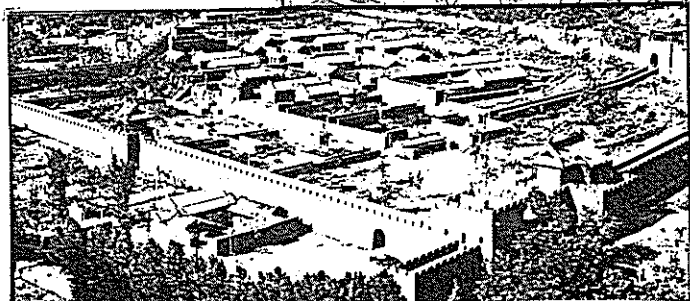
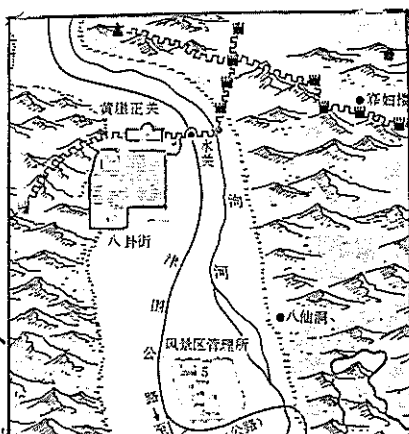
(右の地図は黄崖関長城と八卦街の関係図)

この八卦城は明朝の永楽年間に創建され、万暦年間に完成したもので、周囲の城壁の長さは707㌔、三関と九門があり、南門外には牌坊が一つある。

牌坊の正面に「薊北雄関」、北面に「金湯鞏固」と書かれていた。

城内には古代伝説中の「伏羲」(中國神話の三皇の一人で易の八卦をつくる)の所創の八卦図(乾、坎、艮、震、巽、離、坤、兌)の卦形が公署を中心に作られていた。(右の写真は八卦街の全景)

卦は一ケの方向で他を排し、

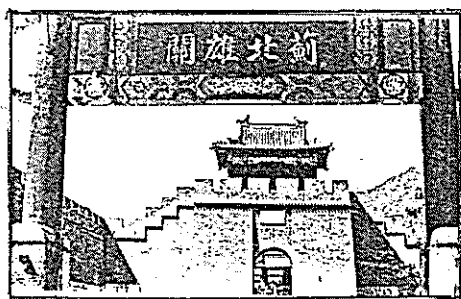


方陣は道路両側によって組織され、縦横40という多くの街路が設けられ、ただ一つか二つの門楼が相通じているだけである。

若し八卦城に入ると迷宮に入ったのと同じく、到底出ることは出来ないという民間伝説があり、「迷魂陣」といって黄崖関は守るに易く攻めるに難い金城湯池である。

八卦街はまた神秘的な色彩があって街道は縦横に交差し、T字形の交差点が多くて出るところを忘れ、包囲の中に閉じ込められるのである。

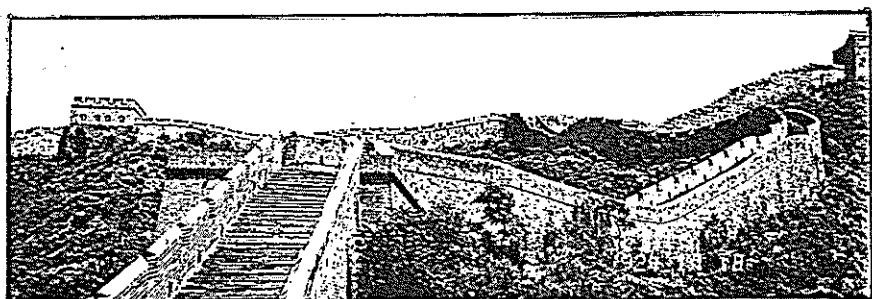
薊県から行くと八卦街の正面に「薊北雄関」と書いた牌坊があり、その向こうに八卦城の城楼が見えていた。街の北側正面には美しい「黄崖正門」が険しい峰々を従えるように聳えていた。(上の写真は八卦街の牌坊と城楼)



黄崖関長城

八卦街を取り巻く城壁と黄崖関長城とは繋がっており(前頁中段の地図参照)、健脚の人たちは蒼穹のもとに鳳翼を伸ばしたような長城に向かった。膝の悪い私は八卦城の近くに留まり、周りに何一つ遮るものもなく強い日差しが照り返す城壁に座りこみ、長城の実感を肌を感じながら過去を振り返っていた。

気宇壮大な城壁の上から深い谷底を見下ろすと、中国やビルマの戦場を馳駆して戦った私には、この平和



な眺望も戦争と戦争の谷間の一時に過ぎないように見え、平和は戦争に囲まれていると感じるのであった。(上の写真は黄崖関長城の一部)

長城を建設した明時代でも国の守りは築城の險ではなく、「徳にあって險に非ず」と言いたいのに、現在も観光資源として各所に長城を修復再現し、果たして効果が上がるのであろうか。甚だ疑問で黄崖関も我々10名以外に人の姿はなかった。

薊県や黄崖関などに足跡を残す外国人は、年間幾人であろうか。万里の長城と言えは歴史的にも北京北方の八達嶺と慕田峪、西方の嘉峪関で良いのではなからうか。

昨年春、安徽省の地方大都市を訪れたが、失業者が路頭に迷って戸外に寝ていた光景を思い出し、為政者に順序を間違えていると言いたいのだ。経済は経国済民の略で、国を治め民を救うことが本来の目的である。

国内の事情を詳しく知らない国政の責任者たちは、長城を造って自国の経済力の豊かさ、歴史を見せようとする魂胆であれば、止めた方がよいだろう。経済は思想を左右することを忘れてはならない。

さまざまな檻の中に入れられて暮らす現代人に、夢のある街づくりを期待し、山背道の長城から細い路地を眺めながら、経済成長以後の爛熟した日本に飽きたらない若者たちに、厳しい自然がはぐくむ壮大な長城に親しみを持たせたいと思っていた。

幽かに寂しさを思い出させてくれた長城を下り、つぶさに八卦街を見学したのち、目を刺激する何物もない街道を走り続け、薊県の漁陽古街に入ってホテルに帰還した。時計を見ると夕食まで未だ時間もあり単独で「古漁陽楼」を訪れた。

昔の顔をのぞかせる白壁の土蔵が建つ路地を歩き、薊県城内を散策した。1371年に建築された「古漁陽楼」（又の名は鼓楼）は、かつて街の中心的な存在であった。青い瓦をのせた屋根をいただき、南の正面に「古漁陽」の横扁額があがり、如何にも山城的古楼といった感じがしていた。

漁陽は前記したように隋の大業末年に創建され、無終国を改めて漁陽とした歴史がある。これは漁山の陽側（日本と反対で北側は陽、南側は陰）に当たるから、その名が付いたのであった。

単独では来れない山間僻地の長城をツアーのお陰で足跡を残したが、要約すれば全く閉ざされた所であって、見所は強いて言えば八卦街だけであった。

7月3日

(水) 晴のち曇

独楽寺 (関係位置図)

朝は遅く薊県の漁陽飯店を10・00に出発し、約1000年の歴史をもつ独楽寺へと快走した。

古漁陽楼から漁陽古街の北側を通り、北西に走ったところに独楽寺が建っていた。俗称を大仏寺と呼んでいる。(右図参照)

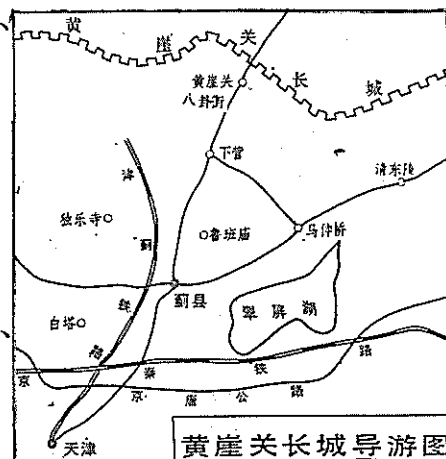
寺の創建は初唐といわれ、現存する独楽寺の主要建築は統和4年(984)10月に大修理して完成したものである。

堅牢に見える山門の高さは約10㍎、間口3間、奥行2間の正面中央に扁額があがり、楷書で独楽寺と書かれていた。これは明代の武関殿大学士の肩書をもつ太子大師の筆である。(中国電視出版社の書を鈔)

高大な楼閣が珍しく平坦地に巍然として建ち、独楽寺の主体を成すものは山門と観音閣、東西配殿で、観音閣には巨大な観世音菩薩の塑像一尊が聳立していた。

高さは16㍎の観音像の面貌は至って沈静で微笑を帯びていたが、中国に現存する最大最古の泥塑像の一つで、頭上に11個の小頭像があり、十一面観音と称している。(右は十一面観音の頭)

観音閣の上方にある「観音之閣」と書いた黄金色の扁額は、李白の書といわれており、閣の前には一株の千年の古柏が聳え、兵火にも落雷にも耐えて現在も若々しく生きていた。又、寺名の由来は西北にある独楽水に因んだのであった。



清東陵 (位置は43頁の地図参照)

明の13陵是北京近郊にあるため多くの観光客が訪れているが、一般に清の東陵のことは知られていない。それが現状である。

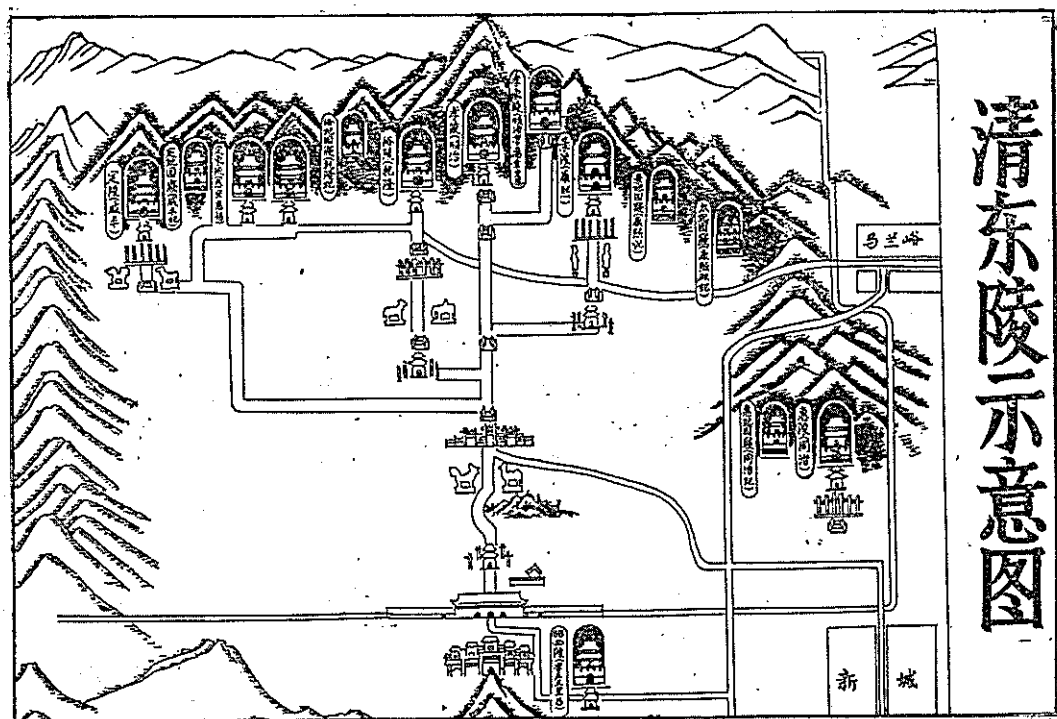
かねてから私は清の東陵・西陵を見学したいと虎視眈々と狙っていた。しかしパックスツアーでは清の陵は殆ど含まれておらず、北京からの単独行動を考えていたが実行には移されなかった。

今回は幸いに念願が叶い、清東陵へと走るバスの中で「墓」のことに就いて考えていたが、それは現在、私も自分の墓を建設中だからである。第2次世界大戦の激戦地の一つであるビルマ(現ミャンマー)の象徴・パゴダ、及び中国戦線の主戦場であった黄河を模して造っている。

生存中に墓を建設する目的は自分が入ろうという意味ではなく、私が生存していた記念碑として又鎮魂のためである。そして我が遺骨は黄河とビルマの河に撒くように遺言している。親鸞上人は遺言で遺体を加茂川に捨てて魚の餌として与えよと言った意味とは異なり、どこまでも犠牲者の鎮魂である。

「葬」(おくり)とは草むらの中に死体を置くことを意味している。「ほうむる」の「ほう」は「放」の変化であるから、自然葬が本流で墓は傍流である。しかし日本では墓地・埋葬に関する法律で、遺灰を墓に入れずに山河に撒くことを禁じている。

「墓」は「幕」からきており、「巾」(きん)をもって覆うという意味である。巾を土に置き換えただけが墓だと思っていると、バスは蜿蜒と広がる広闊な大地の一角に停車した。ここが見渡す限りの野辺の清東陵であった。(下図は清東陵の配置図)



1644～1911までの268年間、中国を統治した清朝の皇帝たちの墓群は、河北省遵化県と易県の2ヶ所にあり、遵化県の墓群を清東陵、易県の墓群を清西陵と呼んでいる。

【清王朝が入関前（山海関内）の都であった盛京（瀋陽・奉天）には、第一代のヌルハチの福陵と第二代のホンダイジの昭陵がある】

清東陵は遵化県の万里の長城近くの馬蘭峪にあり、北京より125㎞、遵化県城から30㎞離れた清朝の墓陵で、第三代順治、第四代康熙、第六代乾隆、第九代咸豊、第十代同治の各帝と、皇后、妃嬪、景妃、景双妃、裕妃、定妃、恵妃ら157人が葬られ、墓群が完成するまでに240数年を要している。

清朝最後の皇帝で満洲国皇帝となった愛新覚羅・溥儀(1906-1967)の墓は、清西陵に葬られる予定だったが、北京市八宝山公墓に葬られている。東陵と西陵とは北京からみて東か西かということである。

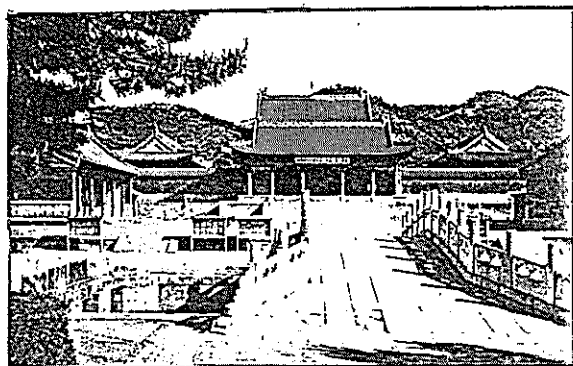
清東陵の北は重畳として蒼々とした昌瑞山、東は蜿蜒と抜がる馬蘭峪、西は薊県の雲中に聳える黄花山、南は天然の翠い屏風のような金星山がめぐらし、明の十三陵とはやや趣を異にしている。

馬蘭峪から入った我々が一瞥したところ、平らな盆地となった陵区内には200以上の建物があり、その屋根の色も違っていた。皇帝と皇后の陵は黄色の琉璃瓦、皇子、公主、保姆などは緑色の琉璃瓦で葺かれていた。また皇陵と后陵の規模は大きく甬路(ヨロ、甬で日式では甕)には石が敷かれ、牌坊や碑楼に石橋も架かり、石人・石獣も並んでいた。

一行は陵区正面中央の第三代皇帝陵(順治)「孝陵」の前を通過し、第六代皇帝・乾隆帝の「裕陵」へと案内された。(前頁の清東陵の配置図参照、下の写真は裕陵)

第四代康熙、第五代雍正帝の時代に清朝の制度が完成し、第六代の乾隆帝の時代にいよいよ最盛期を迎えた。

1711年に生まれて1799年に死んだ乾隆帝は、その生涯をもって18世紀の殆どを覆ったといつてよい。その60年の治世は清帝国の領土を極限まで拡張し経済力も頂点に達した。つまり以降の清朝の歴史は下降線をたどり、辛亥革命まで続いたのである。



1796年、乾隆帝の在位年数は60年に達した。すでに85才の高齢であった乾隆帝は、祖父の康熙帝の在位61年という記録を破るのを避ける名目で、嘉慶帝に譲位を発表して自分は太上皇帝と称した。しかし権力は手放さなかった。

康熙、雍正、乾隆の三代皇帝は清朝ばかりでなく、中国の歴史の全時代を通じて最盛期を象徴する君主であった。この三代の治世は中国文明が見せた最後の輝きで、国の人口もまた急激に増加をしている。

【裕陵】の規模は第三代(関内第一代)の順治帝の孝陵よりはやや小さいが、壮麗な建築、工芸の精巧さは清陵では最高だと感じたのである。(前頁の配置図参照)

孝陵と同じく神道があり、華表(塔)、神路橋、牌、楼、門などが設けられ、風流

天子と言われるほど文芸、吟詩、筆墨に親しんだから、神道には碑亭が建っていた。

在りし日の皇帝の住まいの華麗な明楼を拝観し、古洞門を通して柩を安置した地下宮殿へと進んだ。傾斜11度の地下道は深さ約32㍎、幅4㍎で、入棺の時の引路であった。

珍しいことには、これらの道路が「主」の字を形成し、地下は全部が無梁無柱で、棺は深さ54㍎のところに安置されていた。また四周の石壁には仏教を題材にした彫刻が施されて、厳肅な地下仏堂となっていた。

石の柩の前には乾隆帝の写真が飾られていたが、共産中国では考えられない「賽銭箱」が置かれ、小額の紙幣がたまっていた。 (上の写真は乾隆帝の柩)

取り巻く仏教彫刻は身高1、5㍎ほどの菩薩立像で、大勢至菩薩、地蔵王菩薩、虚空蔵菩薩、普賢菩薩、観世音菩薩、文殊菩薩から、四大天王、五方仏、八宝、ならびに梵語とチベット語の経典が彫られ、中国古代芸術の宝庫のようであった。

裕陵の地下宮殿は明の十三陵に勝るとも劣らないと思いながら地上に出ると、外界の蒼松古柏の緑は目にしみるほど青く、華麗な殿宇を引き立てていた。

引き続いて裕陵に向かって左に進むと【定東陵】であった。ここは咸豊帝の二人の太后の陵（東太后＝慈安、西太后＝慈禧）で、名称の由来は咸豊帝の定陵の東にあるからであった。（いちば46頁地図参照）

我々一行は歴史的に有名な悪名の高い西太后慈禧の陵を訪れた。300年あまりにわたる清朝の歴史の終幕に君臨したのは、皇帝でも宰相でもない一人の女・西太后であった。

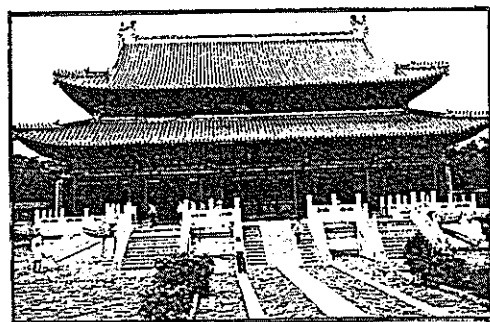
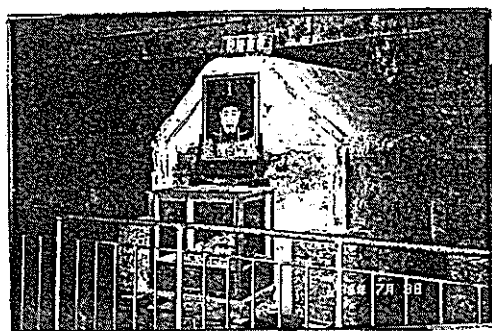
皇帝の側室として宮廷に入った無名の女は美しい上に頭脳は明晰で、信じられないような数々の幸運に恵まれ、1856年、咸豊帝の皇子を生んで妃となった。（右の写真は定東陵の正面）

咸豊帝の皇后は皇女ひとりを生んだだけで、数ある側室にも皇子は生まれなかった。たった一人の皇子の生母として西太后の権力は日増しに強くなり、政治にも口を出し始めた。

彼女は権力の中樞に近づき、挙句の果ては思うままに皇帝をつくり、操るというキング・メーカーの名を恣にしたのであった。

【上の左の写真は地下宮殿にある西太后の柩、右は柩の横の肖像画】

先帝（咸豊帝）の皇后は正式に母后皇太后となり、宮廷内では東の宮殿に住んでい



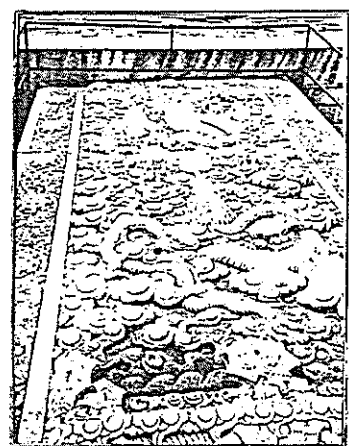
たから東太后が通称となった。それに対して新帝の生母は聖母皇太后となり、住まいが西の宮殿であったことから西太后と呼ばれ、西太后の名はここに始まった。

東太后のことは美号で慈安太后、死後の諡(オクナヒ)は孝貞皇后と言う。西太后のことは慈禧太后、諡は孝欽皇后と言ひ、西太后は東太后まで毒殺したと伝えられている。

西太后は同治・光緒両帝の実際の統治者で、その統治は48年間の長きにわたった。しかし清朝末期の国内国外の政治は難題ばかりで、北清事変では西安に逃亡するなどしたが、1908年10月12日に74才で卒したのであった。

権力を恣にした西太后の定東陵の階段には、右の写真のように鳳(皇后)の方が龍(皇帝)の上段に彫られていた。勿論、一般的に龍が鳳の上段であり、これは私も初めて見たが、則天武后(唐の高祖の皇后)以上の独裁者で、清朝を崩壊させた一人であった。

埋葬された地下宮殿には裕陵と同じように柩が祀られ肖像画まで描かれていた。(右の写真は鳳が龍の上段にある定東陵の階段の彫刻)



清東陵は1928年、国の兵馬の権が荒乱して統制がなくなり、土匪が蜂起して軍閥は横行し、端午の節句を期して陵の盗掘が始まった。

それ以前の辛亥革命から盗掘されていたが、1925年の奉直戦争時から匪賊による搬出は目に余り、清東陵に植えられていた幾百株の蒼松古柏までも悉く掠奪され、無数の葬宝はすべて盗難に遭遇し、今は何一つ残っていないと言う。

このようにして清朝は崩壊していったが、中国は昔から盗人の国であったことを、我々は覚悟しなければならず、甘言に翻弄されないよう厳に注意すべきである。

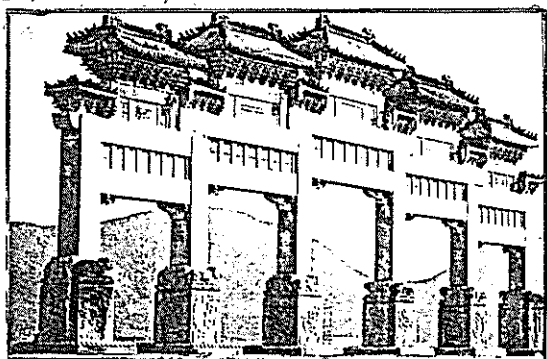
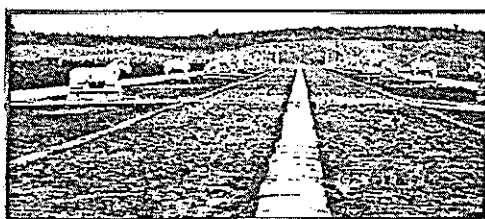
彼らは元に戻せば罪にならないという思想である。

清東陵の二つの陵の見学が終わり、飛行場のように広々とした陵の前庭を眺めていると、私のように戦場で多くの部下を失った者にとっては、墓は心の中に立てるべし、という感じが強まってきた。

「葬」という字は、死を中心にして上と下に草があり、草で死体を覆うという意味がある。戦場で葬ることも出来なかった霊に対してお詫びしたい一心であった。

(右写真の上段は清東陵の参道の石人石獸、下段は石造りの大牌坊)

清東陵に祀られるような人物は美化され易く、都合のよいように解釈されるものだが、万金を惜しまずに投じた建物やその他の雄渾壮大で富貴栄華を極めた物も、時代の流れの一時であろう。



清王朝を彷彿させた鮮やかな清東陵は強い太陽光線の照り返しを受け、次第に暮色が迫ってきた参道には石造りの大牌坊が厳然と天に聳え、石人石獸を両側にはべらせて延々と伸びていた。

彼ら皇帝たちの盛衰を身じかに考える良い機会を得たと、「地平かに天成る」という平成の年号のような大平原を眺めていた。中国歴史の二十四朝は革命の繰り返して今日まで及んでいるが、幸福になる秘訣は現在に生きること、今の瞬間から最大限の喜びを捜すことだと感じていた。

【参考】【清西陵について】

清西陵は北京の西120kmの易県にあって松柏の美しい林があり、そこに第七代の雍正帝の秦陵のほか、嘉慶帝の昌陵、道光帝の慕陵などの陵がある。

清の陵は遵化と定められていたが、雍正帝がこの易県の地を陵としたため、遵化の東陵に対しこちらを西陵と呼んでいる。陵墓の形は東陵と同様に明の陵の形式を受け継いでいる。西陵で美術的な見所は大紅門にある石の牌坊の彫刻だと言われている。

陵地の移転の原因は、雍正帝の秦陵を造営するときに東陵の土質は砂が多く、崩れる心配があったからと言われている。機会があればぜひ訪れたい。

薊県のホテルに帰還するバスの中で戦時中のことが再び脳裡に浮かび出し、清東陵の墓はまた死後のことについて考えさせてきた。

清朝の歴代皇帝のみならず明朝の皇帝も然り、エジプトの王も然りで、彼らは生まれ落ちるなり死後のことを考え準備した。誠に滑稽なことと言わざるを得ない。

死は前からでなく後ろから不意にやってくると言ったのは、徒然草の著者である兼行法師であり、名言である。しかし戦闘では主に前からやってきたが、前後左右わからないのが戦場の死で、死後のことを準備することなど考える余裕もなかった。

来るべき死後に世界があると信ずるから、清東陵に葬られている人たちは死後を準備したのであろう。しかし、私は死後の世界を信じない一人である。現世だけに強い関心があって死後のことなどは念頭にない。

いま自分の墓を造っているのは前記した通りで、私が生存していたことを証明する記念碑に過ぎないと思っている。子孫が墓参するのは彼らたちの心であって、その点に就いては何も言うことはない。

現在の世相を考えてみると死生観は余り論じられないようである。老後が長くなって私も「付け足し」の人生を送っているが、日本は50年ばかり戦争はなく、そのために「死生観」が育ち難いのかも知れない。

夏目漱石は墓碑はいらないと申しており、遺灰は空から撒いてほしいと望んでいた。しかし今は雑司谷の霊園の大きな墓に眠っているのは志と違っているようだ。

私は砲火飛来の生き地獄を駆け巡った軍人時代から、死後は自然に帰るという思想であり、遺骨は灰にして黄河とビルマの河に撒くように、重ねて家族に申しておく。

清東陵から薊県に帰る途中、夕食を摂るために遵化の街のレストランに立ち寄った。旅行社の計画表には宮廷料理を召し上がると書かれていたが、昔の宮廷の女官の服に似た支那服の中年女性が接待するだけで、部屋も普通の支那食堂であった。

7月4日

(木) 晴

金山嶺長城 (下図参照)

朝8時に出発したバスは鄙びた街道を北上すると、無気味なほど静まり返った山間道にかかった。

長時間のバスの旅に無聊を感じていると、突兀として気宇雄渾な山稜が続く「古北口長城」が現れた。(地図参照)

眠っているように沈黙している峰々は、神仙が棲んでいるような陰山陰峽で、要害堅固を競っているように見えていた。

霧靈山と臥虎嶺を結んだ古北口長城は、金山嶺長城の玄関口の関所で、古来から兵家必争の地であつたらしく、「一夫関に当たれば萬夫も進むあたわず」といった峻險であつた。我々は自然の彫刻を眺めながら古北口の汚いレストランで早い昼食を摂った。(下は古北口の長城の一部)

金山嶺長城は東の山海関長城、昨日見学した黄崖関長城、西の慕田峪長城、有名な八達嶺長城とともに、明時代に築城された長城の一つで、最近になって修復して観光に供している。(42頁の地図を参照)

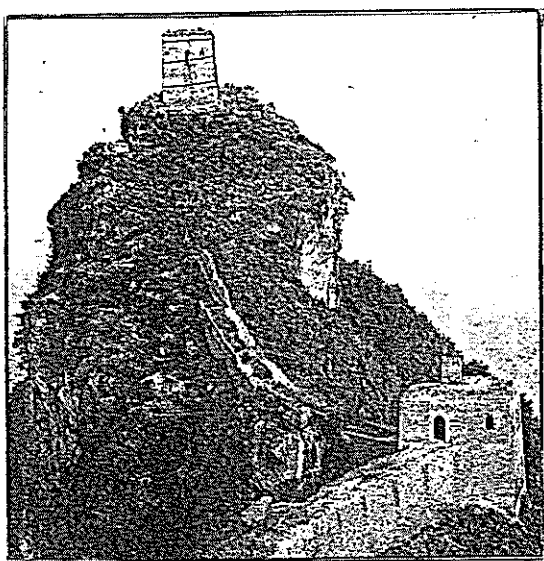
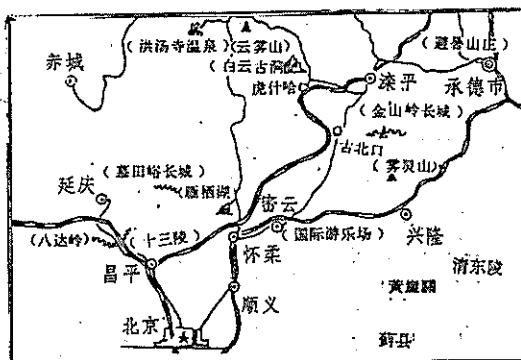
金山嶺は北京市密雲県と河北省の樂平県の境界地帯をなし、北京より140kmの距離で、北京に近い八達嶺や慕田峪に押されて客は少ないようである。しかし俗化しておらず違った味があり、幸い私はこれらの長城に悉く足跡を残している。

金山嶺長城の地勢は険しいが視野は開闊して美しく、芸術的な山岳美が楽しめるような感じである。

鵬翼のように蜿蜒と屈曲して続いている長城は、跳びはねた一条の龍のように見え、奇峰峻險な嶺の上をまたぐ城壁は太陽に輝く鱗のようで、素晴らしい山河襟帯と形容したい。

金山嶺長城には他の長城と同様に、大小の楼(ここでは金山楼と呼ぶ)が設けられていた。金山嶺史を繙くと、長城を修復するために約3000名の江南の兵士が連行されている。古里を思う心は誰しも同じで、彼らは故郷の風光明媚な鎮江の「金山」を偲んで金山嶺と呼び、これが長城の名称となった。

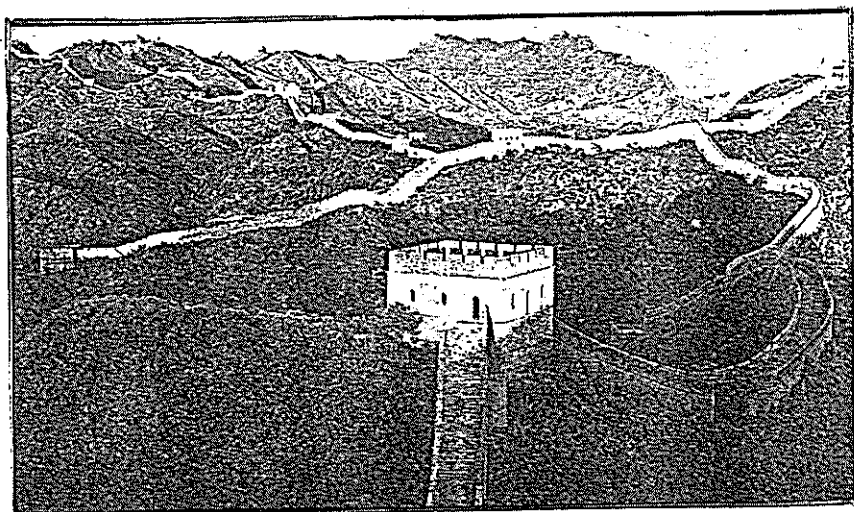
朝来からの快晴は久方振り、澄みわたった蒼穹には小さなちぎれ雲が浮かんでいた。バスは山の精が我々を楽しませてくれる山間道を走り、漸く長城へ上る一本の道路の下にたどり着いた。



意欲旺盛で健脚の人たちは細い急坂を登攀し、長城に通じる小道を滑りながら登っていった。残された数人の我々は真紅の曙光に照らされながら、氣息奄々としてしんがりを努めたが脚は思うように動かず、長城へ登るのは諦めた。

後塵を拝している私等を見た若い姑娘たちは、手を取り腰を押し挙げて城壁の上まで引き上げてくれた。

彼女等は土地の物売りの女で、買ってほしい魂胆は見え見えだったが、本当に涙ぐましい親切には恐れ入ってしまった。



(上の写真は深山幽谷の長城美が展開した金山嶺長城)

長城の上に登って溜め息を洩らしながら、パノラミックな景観に目を走らしていると、わが身が宙にあるような心地がしていた。又、大自然に接していると人の命などは風に舞う花びらのようで、「人面桃花」の故事が頭に浮かんできた。人は変わっても自然の風景は変わらないという意味である。

見渡す限りの全周は突兀とした燕山山脈の奇景が空を区切り、波打つ峰は遥か彼方の雲際 に 没し、削ったような山勢は急降下して谷に落ち、急傾斜の山腹を長蛇のように走る長城は、その偉観をいつまでも私を引き付けて放さなかった。

第二の八達嶺と言われているだけに、長城の制高点には数え切れない狼煙台や見張台があり、万歴6年に築城したとはいえ厳然と射撃のための射孔が残っていた。しかしどの長城を見ても我々の戦争と同じく、乱世に生まれた者の宿命に見えていた。

もう一度寂として人なしの城壁から、峰が翼を伸ばし重畳として尽きない千姿万態の光景を網膜に刻み、屈託のない姑娘たちの笑う姿に誘われて降りることにした。

城壁下に生えていた木の枝に響く微かな風の音を聞き、その風に乗ってくる草の香りをかきながら降りる間も、彼女たちは執拗に商売を続けて声を掛けていた。

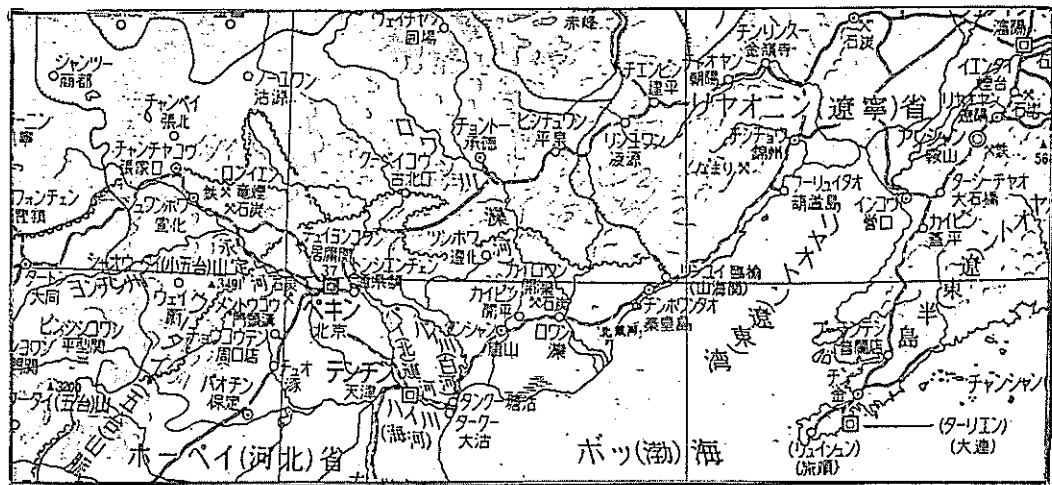
急な坂道を楊樹の茂みを求めて下ると、再び相好をくずした姑娘たちは手を貸して助け、私も「辛苦了」と応えて感謝した。大陸的な中国人は気長で、相手が根気負けするまで商売を続ける姿に屈して、数点の品を買い求めたのであった。

金山嶺から清の歴代皇帝が鳳輦(ほうけん、歸轡轡)を連ねた承德街道を疾走した。我々が軍人時代に熱河省と呼んでいた道筋は深山の気配が漂い、山間に清涼の気が充満して水気たっぷりのような感じがしていた。

承德までは80キロで以外に近く、16時に承德の外交員賓館に着くと、前には熱河(武烈河)が帯のように流れ、聞かされた満洲事変の熱河作戦の労苦が回顧された。

7月5日 (金) 雨のち曇 承德

北に大興安嶺の余脈が連なり、南に燕山山脈の山並みを望む風光明媚な省北の街が承德である。以下、歴史を繙いて概要を記述する。(下図参照)



承德は内蒙古から北京に通じる要路に当たり、古くは鮮卑(セビ)や契丹(キタン)らの諸族が馬で駆け巡ったところであり、以前は温泉水が流れて冬期も凍結しなかったから【熱河】と呼ばれたのである。

承德は古称を熱河、またの名を濟陽と称し、中国の華北北部と内蒙古高原にわたる大平原地帯に在り、北方から北京に進出するには好都合のところに位置し、僻地であったことは否めない。

承德は一つの山城に過ぎなかった。周囲を各々異なる群山が取り巻き、冬期は天然の屏風を立てたように蒙古高原からの寒風を防ぎ、夏期は繁茂した密林と緑地によって涼しく、もっとも避暑地に適している。だから前から日本人にも知られていた。

承德は原始社会末期には新石器文化がおこり、殷周時代には山戎が住み着いたところである。東胡等の少数民族が相次いで来たり、その後、漢族、匈奴、烏桓、鮮卑、契丹、突厥(トクツ)等の民族が来て、多民族聚落区となった。

(山戎は春秋から戦国時代にかけて東北辺境に居住した民族で、燕・斉などの東北諸国を侵襲した)

承德は地形環境から交通は閉鎖されて人口は希少であった。したがって政治・経済・文化は見るべきものはなく、承德の真の繁栄は清の康熙帝が避暑山荘の建築を始めてからである。

世の中は誠に不思議である。内蒙古から北京に通じるこの街道は前記の通り、鮮卑や契丹の諸族が馬で駆け巡った僻地だったが、夏も涼しいということから、清朝興亡の歴史を秘める広大な離宮「避暑山荘」によって発達したのである。

史書によると、古くから承德付近は少数民族と漢民族の混住の地となっていた。繰り返すが、清朝になって康熙、乾隆の時代に避暑山荘や外八廟が建築されて発達し、清朝文化と対異民族政策の跡を見ることができるようだ。

その点に就いて私なりに下記のように分析した。

①【自然の原因】康熙帝は1703年より毎年、春の端午の節句になると承德に避暑に出かけ、秋の重陽の節句(9月9日)になると北京に帰還し、承徳の滞在期間は半年間であった。この間、全ての点に於いて北方の極寒地に住む民族との融和が計られ、宗教生活とくにチベット仏教との融和が計られた。

②【政治的原因】満洲族の女真族は遼陽や瀋陽の盛京に根をおろし、関内(關内)に進出した満洲族同盟軍の兵力は極度に少なく、いつ逆襲されるか分からない状態が続いていた。そこで蒙古の各種族を味方につけるため、蒙古の息のかかった承徳に力を注いだのである。

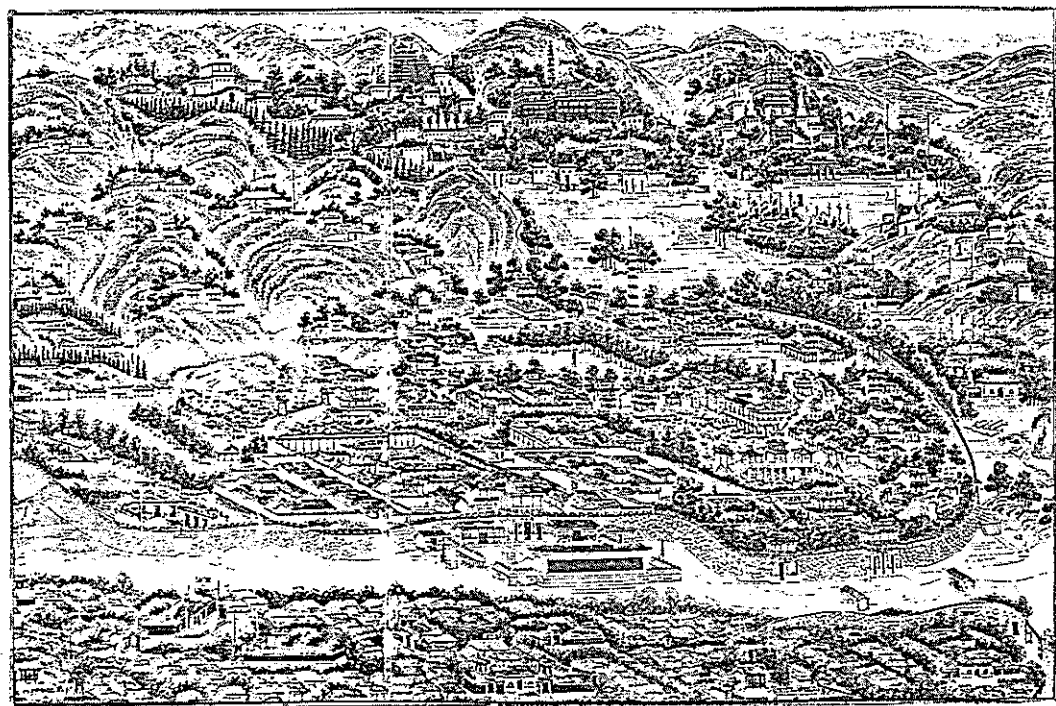
③【宗教的原因】ラマ教(チベット)の指導僧たちは、満洲族の力が強化されるとラマの仏像を盛京(瀋陽)に奉じ、清朝廷にラマ教を信奉するように圧力をかけた。これが承徳のラマ教寺院にも大影響を及ぼしている。

④【地理的原因】熱河にある蒙古部落の首領と清朝政府とは大変心が通じ、政治と宗教が中心になって一本化された。そして康熙帝は承徳にラマ中心の宗教を確立していったのである。

⑤【その他の原因】元来、満洲族(女真)はさかのぼれば蒙古族の一派であり、武力的には遥かに蒙古族が優れていた。その蒙古族には文化がなかったためチベット文化を取り入れ、チベット仏教(ラマ教)が盛んになった。

満洲族の遠大な大陸支配の構想は、チベット、青海省、甘肅省、陝西省、蒙古等の、漢民族を包囲している民族との団結を第一義としていた。これが承徳にも現れている。

清の康熙帝は1677年、初めてこの地を巡視し、内モンゴルから北京に通じる要路に当たるため、早速、軍備を固めるとともに避暑山荘を建設した。しかし名目は避暑であったが目的は狩猟にかこつけた軍事訓練であつた。(下の写真は承徳の鳥瞰図)



承德「外八廟」 (下図参照 前頁の上と右の高台の寺院群)

承德観光の順序としては「避暑山荘」を見学した後、「外八廟」を回るのが普通で、その方が理解しやすい。しかしこのツアーは反対に外八廟からの観光コースをとった。避暑山荘の周囲には11のチベット仏教寺院(ラマ教)が、山荘の宮殿の建立と同じ頃に建てられた。まるで宮殿を見守るように並び、「外八廟」と呼ばれているが、現存するものはその内七つである。

中でも普寧寺の千手千眼観音は、まるで長い歳月の経過を感じさせぬように、訪れる者を優しくに佇んでいた。

外八廟に対する清朝前期の政治的な目標は、漢、満、蒙、蔵の統一であった。そのため外八廟は各民族の建築の風格を表し、団結の証拠とするのが目的で、民族の建築芸術の粋と経済力を表していると言えるだろう。

清朝前期は多民族国家の大陸を統一国家にする重要な時期であった。特に王朝で気掛かりであったのは、漢民族以外では強力なチベット(西藏)と蒙古民族で、これらの辺境地区との歴史的な問題が進行中に創建したのである。

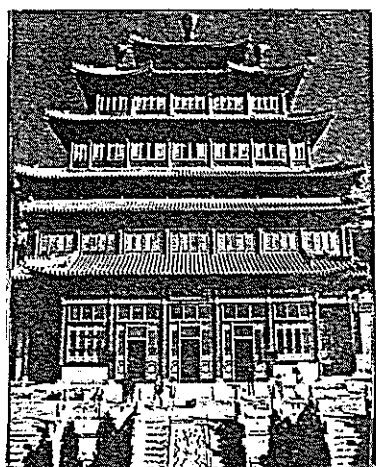
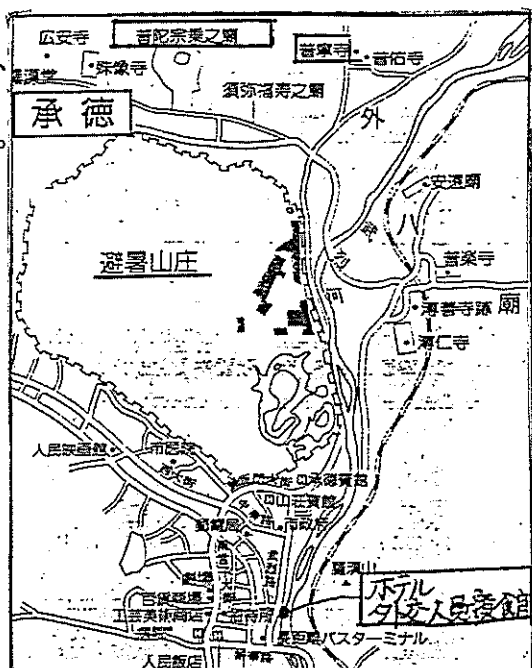
清朝前期における多民族国家の統一にかかる強固な意思は、ラマ教の政治工作を上手に利用し、お互いに仲の良い蒙古とチベットを融和させ、強力な封建中央政権に引き入れ、漢民族に対抗することであった。

清朝は少数民族の連合と漢民族の地主階級の封建性を勘案し、漢民族には「尊孔崇儒」的な封建道徳を奨励し、儒教を中心にして仏教兼容の政策を形成させた。

大辺境地区の少数民族にはラマ教を奨励し、清朝は蒙古、西藏、新疆の政治、経済、文化の発展もその通りだと信じ込ませたのである。

普寧寺

我々一行は街全体が小雨にけむり、鉛色のどんよりとした中を外八廟に向かった。避暑山荘の東側と北側の山麓に、地勢を利用して多民族の建築芸術が溶け合い、辺境地区の風格を備えた一群の寺院と廟が、山荘の外郭に見えてきた。これらが歴史的な文化都市の承



徳を構成する外八廟であった。1713年から避暑山荘の周囲に80年の歳月をかけて建てた寺院群の総称が外八廟である。

異民族王朝の清朝は、大乘仏教の一派ラマ教を通じて民族間の団結を計ったため、いずれもラマ寺院で、建築様式は漢、満、蒙、蔵、各族の特徴を取り入れている。その中の八寺廟には朝廷からラマ僧が派遣されていた。

現存する七寺廟のうち一般に公開されているのは四寺廟に過ぎない。いずれも漢、満、蒙、蔵、それぞれの様式が混合した建築様式で、我々一行は清朝美術の集大成が窺える「普寧寺」へと進んだ。

考えてみると秦の始皇帝が中国を統一してから、それぞれの国の宮殿を模倣して咸陽に宮殿を建てたのと似ている。「学ぶ」というのは「真似ぶ」から出た言葉であるから、真似たのであろう。また普寧寺は北京の「天壇」に似た傘型の屋根であった。

普寧寺は正面が漢族風で、奥の建物はチベットの三摩耶廟をまねて建てており、主殿の大乗閣には世界最大の千手千眼観音菩薩が祀られており、「大仏寺」とも呼んでいる。

(右の写真は普寧寺のラマ風の建築物)(前頁の下は大乗閣の全景)

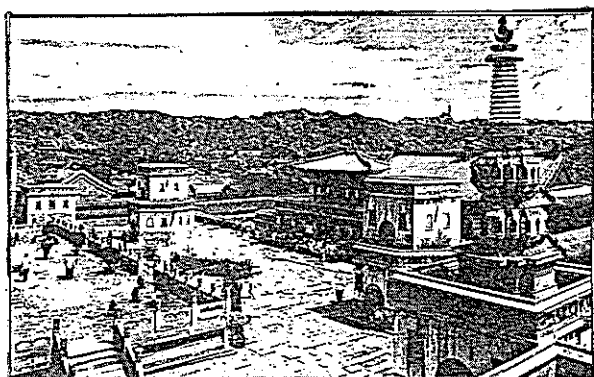
乾隆20年(1755)、清朝政府は西北辺境のジュンガルのダワチアムールサンナの民族分裂をしずめた後、乾隆帝は避暑山荘で盛宴をもって蒙古地方の貴族をもてなし、爵位を授けた。同時に命令してチベットの三摩耶廟の様式をもって、寺を修築して記念するようにした。そして「普寧」(天下泰平の意)と名付け、漢、満、蒙、蔵の四種族の文字で事件の顛末を刻んだ石碑を建立した。

普寧寺の建築群は大雄宝殿を境にして、前半分と後半分に分かれている。前半分は漢民族様式の廟である「伽藍七堂」の建築様式を採用して左右対照である。続いて山門、碑、亭、鐘楼、鼓楼天王殿、東西配殿、大雄宝殿の順で建てられていた。

後半分は大雄宝殿の高低差のある形をうまく利用し、岩石で作られた高さ9畝の墻台を境にして、仏教の經典に書かれた世界図象にもとづく、曼荼羅の配置による27ヶ所に建物が建てていた、

大乗閣を中心にして屋根の両側にそれぞれ金色瑠璃瓦の台殿があり、大乗閣の四角には赤、緑、黒、白の四色のラマ塔が立っていた。これは仏の「四つの知恵」を示している。

主殿の大乗閣は横に7間、奥行5間、高さ36、75畝、地勢を利用して前方には六重の軒、後方は四重の軒にして、西側の壁部を五重の軒にしていた。



(上の写真は普寧寺の千手千眼観音像)

主殿の真ん中に木造の高さ22、8呎の12臂観音（千手千眼仏）が厳かに立ち、両側に善才、竜女（娑婆仙人と功德天女とも呼ばれる）を従えていた。

この寺は巨大な木彫大仏を安置しているから、前記の通り大仏寺とも呼ばれており、「普天安寧」から普寧寺と名付けられたのである。

高地にある境内からの眺望は晴景雨景どちらも素晴らしく、極楽を彷彿させる空中の画のようで、奇岩秀峰と清流の織り成す景観は幽玄の世界に引き込んでいった。

普陀宗乘之廟

普陀宗乘之廟はチベットのラサにある布達拉(ポタラ)宮を模して建てたから、小ポタラ宮(ポタラを小さくした音訳)と呼ばれている。

小ポタラ宮の建物は漢族伝統建築の基礎の上にチベット建築の特徴を取り入れて建てたもので、漢・蔵建築芸術の粋を集めたものである。

ラサのポタラ宮は紀元7世紀、あの有名な「文成公主」が吐蕃(トハ、チベットを指していた王國で、漢族からの呼び名)の王に嫁いだ時に建てた城で一大堡壘である。

清の康熙帝は漢族、満族の専門家114名をラサに派遣し、半世紀の間、技術を習得させた後に小ポタラ宮を建てている。

その目的は乾隆32年～36年(1767~1771)、蒙古、青海(省)、新疆(ウイグル自治区)等の各民族の王侯貴族を承德に集め、乾隆帝の60才の誕生日(還暦)と母親の80才の傘寿を祝う祝賀会のために、チベット仏教の中心であるポタラ宮を建て、小ポタラと命名して開宴に招待した。

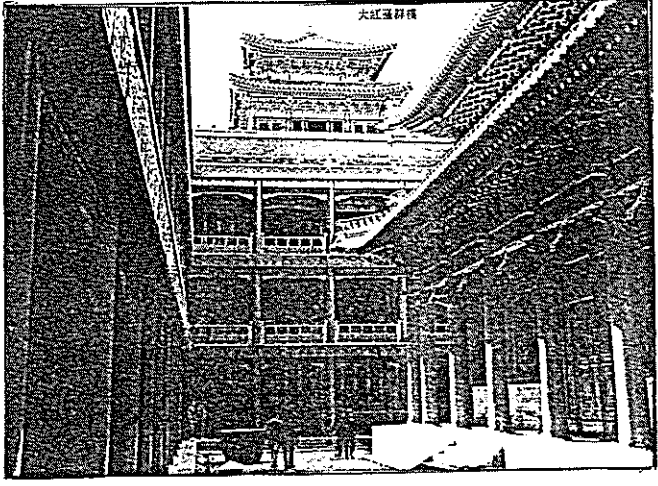
ポタラ(布達)は梵字で、古代インド南海岸の山の名の音訳である。唐の玄奘三蔵は觀世音菩薩の島、普陀(上海の南の舟山列島の島の名)に似ているから、普陀宗乘之廟と呼んだのかも知れない。

普陀宗乘之廟という宗教の一手段だが、これは明らかに乾隆帝の政治的な目的で、今の日本で騒いでいる政教分離は歴史が証明している。

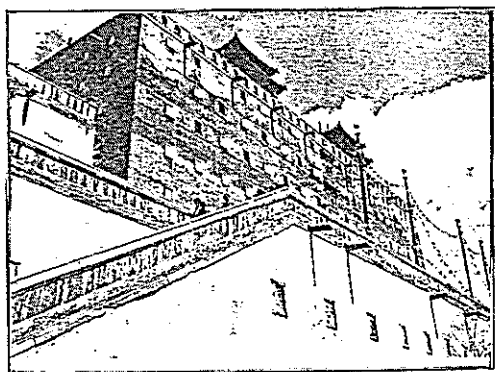
廟は須弥福寿之廟(ミツクシユ)の



(上の写真は小ポタラ宮の全景)



西にあり、南に向かった斜面を利用して階段状に配置されている。中心にある大紅台(顚の下段の写真、紅の土台のこと)は高さ42、5呎、幅59、7呎、白い花崗岩の台上に建てられ、全面が紅殻色に塗られて台形の窓が整然と並んでいた。(右の写真は下から見上げるように高い小ポラ宮の景観)



内部中央には「万法帰一殿」が建てられており、構内には随所に瑠璃牌坊がたち、天高く輝く金メッキの屋根や瑠璃瓦は西方極楽浄土を想像させていた。

以上、普寧寺と普陀宗乘之廟の二ヶ所の見学を以て外八廟の観光は終わった。降雨のために身体が思うようにならず、ガイドの説明も不十分で素通りした感じが強く、又とない機会をゆっくりと楽しめず悔しい次第である。

避暑山莊 (別名は熱河行宮、承德離宮)

外八廟を下って承德市内のレストランで昼食を摂り、午後はいよいよ避暑山莊だと、竜宮城を訪れる浦島の気分を掻き立てていると、幾分か白くなった豊かな空間が点々と見えだし、切れ切れに飛ぶ雲間から建物や山の輪郭が見え隠れしてきた。

私が避暑山莊を知ったのは北支那に出征中のことであった。美しい山水、古朴で典雅な清代の建物など、承德離宮は遠く黄河の戦場までその名が知られ、憧れの的となっていた。それから56年以上の歳月が泡のように消え去った。

「別荘」それは古今東西の男の夢である。それが皇帝ともなれば、そのスケールは桁違いに壮大なものだ。御輿に乗って遠い北京から半月もの時間をかけてまで、やって来た避暑山莊は、珠玉のような宮殿だろうと想像するだけでも楽しみである。

清朝になって多民族が統一された中国は一段と強国となり、歴史上「熱河」の名で知られた承德は、「東は遼寧、瀋陽に通じ、西から回族(イラムキョウ諺)を引き寄せ、北は内蒙古に接し、南は天下を制す」重要な地理的位置を占めている。

熱河を巡視した康熙帝は優れた自然環境が気に入って、称賛した。それから約90年もの年月をかけて造営し、1792年(乾隆57年)に完成したのが承德離宮である。敷地面積は北京の故宮と頤和園の面積を合わせたよりも大きく、周囲は約10kmの壮大な城壁で囲まれている。

1705年(康熙42年)から1861年(同治11年)までの清朝158年間に、皇帝10人のうち7人までが山莊を宿泊地としている。例年は約半年間、皇帝はここで政務を行い、行楽や娯楽を楽しみ、外国の使節もここで謁見することになっていた。

宮殿の奥深くにある豪華な「煙波致爽」殿は、無力となった清朝末期の北清事変による八ヶ国連合軍と、国辱ものの北京条約を調印した所であった。

中国の園林建築は、王朝の政治経済の威力で天下の景色を一堂に集め、天下の名勝を一ヶ所に移すという帝国思想を誇示している。

清代はすでに系統的に成就した明代の造園思想に基づいて流行し、避暑山莊は清代

に造られた園林のうちで独特な風格を備えた名園である。

避暑山荘は俗を嫌っている。だから大きくて雄大な建築もなければ、極彩色の小建築もなく、豪華で繁雑な色彩も施していない。自然を借景としてあくまで山と水に沿って造られている。外の軒は古風かつ典雅、できるだけ自然の景色を破壊しないよう、建築にも自然美を生かしている。

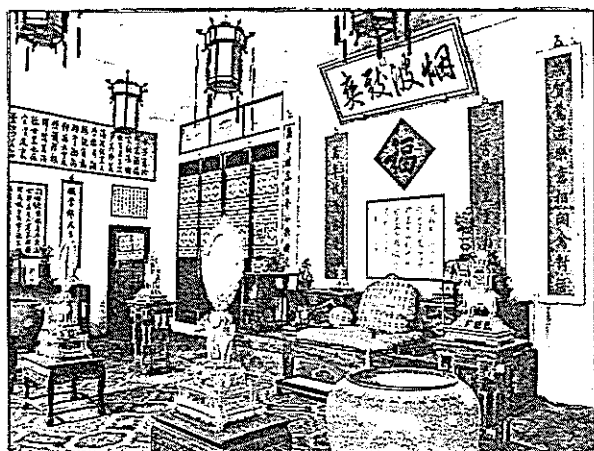
避暑山荘は宮殿区、水郷湖区、平原区に分かれ、まず宮殿区からの見学になった。

宮殿区

宮殿区は避暑山荘の中で最大の建築群がある地区で、清朝の皇帝たちはここで政務を執り、祝典を行い、呉楽、休息、住まいの場としていた。

宮殿区はまた各自の機能で「正宮」「松鶴斎」「万叡松風」「東宮」に分かれている。この四つの建物は並列し、配置は井然としていた。

正宮の皇帝自身の住居は、九重の宮殿たるべしとの規則に基づいて、九個の中庭が設けられ、前朝、後寝の二ヶ所に分かれている。また建築



は総べてははっきりと左右対照になっていた。しかし我々は建物の内部には入れず、窓越しに中を覗くだけで、印象に残るものは極く僅かであった。

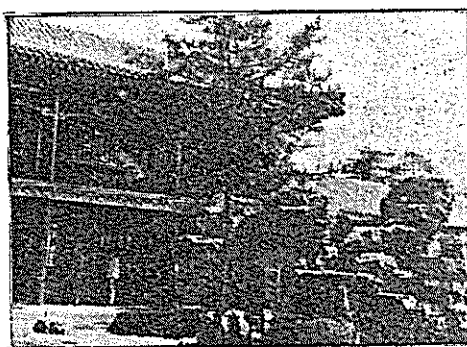
「澹泊敬誠殿」は避暑山荘の正殿で、各種の盛大な祝典行事は総べてここで行われた。機能は北京の紫金城（現故宮）の「大和殿」に当たり、建物には装飾はなく木材は木目のままであった。

「後寝」は門殿を入ると直ぐ主殿の「煙波致爽」殿で、ここが清朝皇帝の寝宮であった。康熙三十六景の第一景で、この寝室は七室がある古代建築であった。また前記した通り北清事変の屈辱的な北京条約を調印した部屋でもある。（上の写真は煙波致爽殿の内部）

特に私に印象を残したのは「雲山勝地」であった。この建物は室数が5室の二階建ての建築で、建物の東側の直ぐ前に黒々とした石積みがあり、建物の内部には階段はなかった。

二階の部屋に入るのには、築山となっている土を上り、空間を跨いで入るのである。私も諸外国を歩いてきたが、このようなものは初めてで、格別な情趣があつて感心していた。

（右の写真は雲山勝地で右側の石山が階段）



宮殿区の数え切れないほどの建築芸術は華美なところがなく、眼には荘厳で清麗な会のように映り、金石珠玉にも優る建築は心の琴線に触れるものがあつた。

寂寥とした樹間を五管を澄ませて歩いていると、宮殿区は宏壮な劇の中に身を置く

ような感じがしていた。しかし、栄耀栄華の皇帝でも始めあるものは終わりありで、「満れば欠くのは世の習い」だと後世に伝えていた。

水郷湖区

宮殿区に続く水郷湖区は広々として闊大にひらけ、承德を囲む千姿万態の山容は雄偉嵯峨の景観を表し、眺める天然の彫刻は心を遊ばす旅の魅力であった。

楊柳が玉すだれのように垂れた湖は、晴れていく周囲の山の清涼を生け捕って緑に染まり、雨を含んだ木々の青さが次第に目にしみてきた。この人知の及ばぬ造化の妙に康熙帝は曳かれたのであろう。

湖区の島々はすべて堤や橋でつながれていて、そこには各々特徴を生かした建物が建っていた。特に目に止まったのは「芝徑雲堤」と呼ばれる堤防で、この見事な景観は心の栄養であり、心の洗濯だと眺めていた。

芝徑雲堤は康熙三十六景の第二景で、杭州の西湖にかかる「蘇堤」（詩人・蘇東坡が造った堤）を模して造っていた。

その形は靈芝(リョウジ)の茎のようで、それと連なる三つの島は靈芝の葉のようである。明け方、ここを歩くと柳が波に垂れ辺り一面に霧が取り巻いて、仙境に遊んでいる気分になると言われている。

(右の写真は芝徑雲堤の一部の景観)

実際に私は靈芝の茎を見たことはないが承德市発行の承德旅遊勝景大観には、そのように記載されていて、中国人の表現は変幻自在の魔術師のようであった。

そのような意欲こそが人生を豊かにするもので、私に別な人格が乗り移ってきたみたいと感じて湖畔を歩いた。静寂の中に拡がる湖には何か神秘的な香りが漂っているようで、芳香幽玄の大厦高樓から美観を眺めた皇帝たちの心中を推察していた。

目に映るものは聖に、純に、円く、美しく、さながら水晶宮のようであり、宇宙的で崇高な環境の中心に自分が立った場合に、私は責任観念の旺盛な人は動まらなないと推察するのであった。

長い中国の歴史に於いて最大の権力を握った現在の王朝・共産党政権は、どうだろうかと思像していた。改革開放路線が功を奏して大躍進に自信を深めた彼らは、伝統とも言うべき中華帝国のルーズな支配に後戻りしてはならない。

人と人が、文化と文化が、民族と民族が、想いと想いが、出逢う機会をもっと作ることが平和の根本であり、過去ばかり言うべからずである。手のひらは二つなければ音が出ないのと同様に、一衣帯水の日中の友好は口先だけであってはならない。

今日の中国の周辺諸国はかつての拝跪の儀式と貢納の代わりに、資本と技術と有罪な借款の追隨外交を以て接近している。これが何となく彼らに皇帝意識を持たしているのではないだろうか。

雨上がりの夏の山を覆っていた雲煙は流れ、晴れ間が覗き出した中を次へと進んだ。



平原区

波風一つ立たない極めて平和な湖水に向かい、心の中で中国は平和に強い国になって欲しいと叫びながら通り抜けた。そこには鬱蒼として茂る森が見えてきた。ここは鹿が遊んでいる避暑山荘の万樹園で、昔は巻狩りや練兵の場に使われ、乾隆帝が少数民族の首領や外国使節と接見した場所でもあった。

せつないほど静寂な平原区では森の精が私を慰めてくれ、くたびれた足をさらに進めていくとラマ塔が見てきた。その下には白い「パオ」群(モンゴルではゲルという)が並んでいた。

今では独特の風格が観光客に喜ばれ、蒙古のパオはホテルとなっていた。この光景を眺めるとモンゴルの荒涼とした大草原や、蒼穹が思い出され、運命を感じられるのである。

古人は「生まれ育った星の下」を宿命と呼び、人間の思念を超越した摂理によるものとして大切にした。これを考えると人間は生まれた時に、死刑を宣告されたようなものである。(上の写真は平原区のパオのホテルと熱河)

乾隆帝はこの蒙古のパオで、文武百官を持て成すために大宴会を開いた。今と違って当時は草木は緑、花は鮮やかな紅で、微風に乗ってくる芳香が人々を襲ったことだろう、と想像して歩いていた。

古代中国では東夷(イ)、西戎(ジュ)、南蛮(バ)、北狄(テ)と称して少数民族を侮蔑していた。流石に少数民族の満洲族の清朝は彼らを手なづけるために、承德の避暑山荘や外八廟を利用したのである。

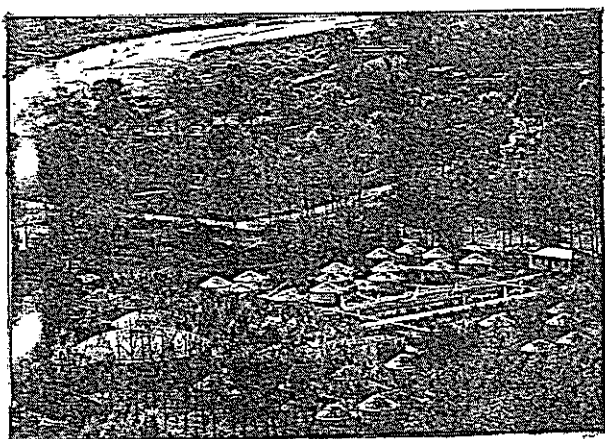
しかし21世紀ともなれば民族独立の機運が一層高まり、少数民族の独立問題は歴史の必然的課題となるだろう。

中国有数の歴史文化名城都市である承德観光も、これで終わりとなった。南の秀麗と北の雄大な美を兼ね備えた避暑山荘と外八廟は域内に翠嶺が重なり、満、漢、蒙、蔵、各族の仏教建築の粋を結集し、天空に聳える巍峨たる殿宇は感嘆措(お)くあたわず、私の才能では表現の術を知らない。

旅立って中国の大地に歩を進めて以来、清朝との歴史の出会いが再現されたような旅であった、と帰るバスの中で旅を反芻(ハヅメ)していた。

車窓から眺める屏風のように取り巻く奇峰怪石の山々は、陽光に映えて自然の夢幻美を描き出し、一幅の絵のような光景は市民に本当の幸福を与えているようであった。

【上の写真は磬鍾峰(ケイシュフ、高384)で康熙帝が命名した。磬は中国古代の楽器】



夜見世

五十数年来の希望の地の一つであった承德、熱河の名で知られた承徳の観光は終わりを告げた。広大な外八廟や離宮は10日間もかけて見学しなければ十分に理解できないが、僅か1日で駆け回ったぐらいでは素通りの観光に過ぎなかった。しかし想い出は多く、夜の観光の夜見世もまた然りである。

清王朝の政治経済の威力で天下の景色を一堂に集め、天下の名勝を一ヶ所に移すという、帝王思想を誇示しているのが承徳であった。我々まで承徳に詣でたことに、さぞかし康熙帝や乾隆帝もご満悦なことであろう。

中国では建物は豪華絢爛の華美な色彩を施すのを常としている。承徳は俗を嫌って大きな建築物もなければ、繁雑な彩色をした建物もない。自然を借景として飽くまで山水に沿って造られて古風かつ典雅、できるだけ自然の景色を破壊しないように工夫し、建築に自然の美を生かしているのは、我々日本人の好みである。

しかし、その陰には多大な犠牲が伴っていることも忘れてはならない。「人は一代の人に非ず」と言われているが、この世には常なるものがないのである。国家というものは興隆し拡張してやがて老い、最後は滅ぶもので永久ではない。

かつて世界の指導的な地位を占めていた数々の民族も文明も、消えていつている。経済大国といわれた日本も既に最盛期は過ぎ、爛熟期に入っているのであろうが、最近は不安材料ばかりが聞こえてくる。承徳も清朝遺産ばかりを当てにしているのは、将来がないのではないだろうか。

夕食前の一時、習い性となっているメモを整理しながら、急いで雑感を書いていた。食後、一行はガイドに連れられて夜見世の見学に出掛けた。古い街並みにつづく新しい街並みには、片側に中華飲食店の屋台が、反対側に種々雑多な屋台が500軒ばかり伸びてた。

中国の夜見世で有名なのは宋の都であった河南省の開封である。昨年、開封を訪ねて散策した夜見世は1000年の歴史を誇っていた。康熙・乾隆両帝が天下の景勝を一ヶ所に集めたように、現在の承徳市民はこれに習い、幻想を呼ぶように開封の夜見世を真似て、夜の観光の一役をかって出たように見えていた。前記したように「学ぶは真似ぶ」である。

屋台の一つに福祿寿を形どった人形が並んでいた。現世願望主義の中国人にとって人生の至福とは、「福、祿、寿」であったが、今でもそうだろうかと手に取ってみた。①の福は子供が多いことである。しかし今は一人っ子政策だ。②の祿は金が多いこと、③の寿は寿命の長いことで、①だけは昔と違っていた。儒教では子供が多いことが親孝行である。



7月6～7日 (土・日) 晴

北京～成田

余韻嫋嫋として承徳に想いを残して、朝8時に2泊したホテルを発った。乗車したバスの前を荷車を曳いた挽馬が通ると、一瞬、時代が溯ったような感じに打たれた。

これで旅に錠(ジョリ)がおりて、すべて予定は終わった。これからの我が人生にはもう花が咲くことはないが、深山の紅葉のように燃えて、眼下の溪流に吹く一陣の風に、散っていくようでありたいものだと、車窓の景観を眺めていた。

再び巍峨群峰の山河襟帯を従えた古北口の万里の長城を通過し、燕山山脈の鄙びた街道をスピードをあげて疾走し、北京に向かった。

郊外のホテルで早い昼食を摂り、北京を知らない人のために天安門広場で停車した。

1ヶ月前の6月4日で、学生市民らの民主化運動が武力制圧された、「天安門事件」から満7年を迎えた。

地方の民主活動家が事件の見直しを求める書簡を、全国人民代表大会(全人代=国会)に送るなど、散発的な動きはあるものの、現在の政治情勢は全般的に平穩のようである。

今一番、中国で問題になっているのは犯罪の増加である。それは改革開放による経済発展の負の部分が表面化したもので、江沢民政権は天安門事件の遠因となった物価高騰、貧富拡大、それに基づく治安の強化に強い決意を示している。しかし、これは強権統治に傾く危険性を秘めていることを忘れてはならない。

我々のように枯れて市井の片隅に生きる人間にとっては、政治のことはよく分からないが、「政治は自分を正すこと」だと日中両国の政治家に申し上げたい。

天安門広場からバスは移動して、明王朝最後の皇帝となった崇禎帝(莊烈帝)が、首吊り自殺をした景山に登った。しかし私は何回も登っているから辞退し、タクシーを拾って崑崙飯店へと走り、北京観光は省略したのであった。

7月7日、9:20発の中国国際航空機に搭乗し、もう2度と来ることはない中国に、「さようなら」だけが人生だと別れを告げ、予定通り13:50に成田に到着し旅の幕は閉じたのである。



あとがき

旅は人生の宝物で心の洗濯だと、世界90ヶ国ちかくを回った私も遂に胃癌に冒され、8月14日の開腹手術を控えながら6月27日、最後の海外旅行と覚悟して出発した。念願だった日露戦争の激戦地であった203高地や東鶏冠山北堡壘から、夢にまで見た清朝ゆかりの地を訪ね歩き、大願成就して金では買えない満足感を味わった。

「年年歳歳 花相い似たり」(死語) 「歳歳年年人同じからず」(死語)

上記した漢詩は誰でも知っている死生観を詠ったもので、私もその死生観に沿って世を去るほかはないだろう。

何れは迎える己の死を、戦陣に立った若い時は別として、真剣に深く考えたことは余りなかった。癌に冒される年齢に達し、人生の総決算の日が接近しているから、それまでは充実した生活を全うし、終着駅までより良く生きようと願うだけであった。

我が人生の前半生は、国家意識に駆り立てられて犠牲的精神に燃えていた。死生を超越した戦場では多くの部下を犠牲にし、その責任感の重圧の影響だろうか、後半生は自分の死に対する感覚が麻痺していた。

3ヶ月の入院生活を終えて退院した喜びは老年だから一層大きく、授かった命の尊さを感じながら、最後の紀行文となるかも知れないと綴ったが、非才の上にも大病は脳細胞まで退化させ、顔から火が出るほど無恥厚顔な文書となってしまった。

戦争を語る一人として日露戦争の古戦場を訪れた私は、第2次大戦に破れた日本軍の反省の意味に於いても、次に若干書いておきたい。

散華された先輩の眠る旅順の地は凜として沈黙し、殉国の至情が雄叫びとなって笹(コガマ)した山並みは、森林公園となって緑の素晴らしい自然景観を呈していた。その赤い血潮で奪取した堡壘は、砲弾にも優る価値ある教訓を残していた。

明治以来の軍の歴史を回顧すると、陸海軍の誕生(誕生)から38年目に日露戦争を戦い、それから38年目の昭和20年8月、戦いに破れて軍は音を立てて瓦解した。

その最後の軍に在籍した私の戦陣生活の思い出は、日本軍が負けた愚痴である。愚痴は無知の浅知恵に対するもので、それは大正・昭和一桁の軍及び政府高官であった。人生の終わりになって意味はないと言えば、それまでである。しかし「成敗は一時にして情けは万古なり」と言う通り、犠牲者に申し訳がないからの愚痴である。

出征兵士に示された戦陣訓に、「死生を貫くものは崇高な献身奉公の精神なり。生死を超越して一意任務の完遂に邁進すべし、心身一切の力を尽くし、従容として悠久の大義に生きることを悦びとすべし」と書かれているが、それ以前に考慮すべきことを首脳は忘れていた。

死に直面して初めて生の厳粛さを悟るものだが、生の厳粛のために軍首脳は兵器の改革から補給等まで、真剣に取り組まなければならなかった。極限状態に身を置いたことのない人たちは、死に対する感覚が無神経のため、原始戦争のような戦闘を強行したのである。戦陣訓のような多彩な表現力だけでは戦えない。

軍人の最大の道徳は責任と義務で、軍事学は軍事を通じての人間学だが、苦中の苦の第一線指揮官は上層部を、天上天下唯我独尊の先見性のない人物だと思っていた。

日露戦争は予想を遥かに越えた大勝であったが、これに続く大正・昭和の後継者までが「視野狭窄症」にかかり、何時までも戦勝に酔って改革を忘れ一途に精神万能主義に走り過ぎ、大敗を喫したことを旅順に眠る先輩にお詫びを申し上げた。

私が最前線の中隊長、大隊長として戦っていた時、「頼れるものは自分だけである」と自分に言い聞かせていた。その責任と義務の人間学から生まれるのが、創意工夫と油断大敵であった。しかし第一線指揮官には軍を改革するほどの力量はない。

湾岸戦争のハイテク兵器や現在言われている電脳作戦を考えれば、進歩改革を忘れた軍の無策は一目瞭然である。世の中は無神経ほど強いものはなく、無謀は無知から出た戦法だと言わなければならない。

近年の私は年に一回ほど訪中している。しかし政治・経済は勿論のこと軍事その他の専門家でもない私だが、旅人の一人として感じることを少々記しておく。

先ず第一は、日本では死者はすべて神仏となるという思想である。だから外国人に対しても相応の敬意を表し、それを辱める言動は堅く禁じられている。しかし中国が日本の総理の靖国神社参拝を非難するのは失礼な限りで、儒教の本場の国らしく、又大国らしい態度をとって欲しい。

次は我々が訪中する約1ヶ月前、中国は予定通り地下核実験を行ったことである。同日、橋本総理はお決まりの遺憾の意を表したが、具体的な措置は無償資金協力停止の継続だけで、円借款の凍結は見送った。

総理の靖国神社参拝に抗議する中国に対し、核実験に強硬に抗議をする必要があると同時に、地下核実験を行う余裕のある国に何故金を貸さねばならないのか、金が必要なら実験費用を転用すればよいと言うべきであった。

これらを考えると、中国から独立すべきは台湾でなく、日本だと言わなければならない。彼ら中国には今でも遠い昔のように属国視が忘れられず、我が国は厳然として中国の顔色を窺って事を運んではならない。

50年も前に日本は中国に侵行したが、その反省と詫びは数え切れないほど行っている。昭和初期までの世界は弱肉強食の歴史であり、独り日本だけが軍事中心に動いたのではない世界史も緋き、隣人の和を考慮して欲しいものである。

私のこの世の思い出の最たるものは第2次大戦に参加したことで、中国やビルマで散華した部下達のことを思うと、私は生きすぎるほど長生きした。

人間は如何なる人生観であっても最後の終着駅は墓地である。紀行文中記述した通り、私がこの世に生存していた証として、また亡き戦友の慰霊のために、中国の黄河とビルマのパゴダを模して墓を造った。これは私の胃癌手術と中国旅行には無関係で、奇しくも一致しただけである。(右の写真は我が墓地)

